

特16

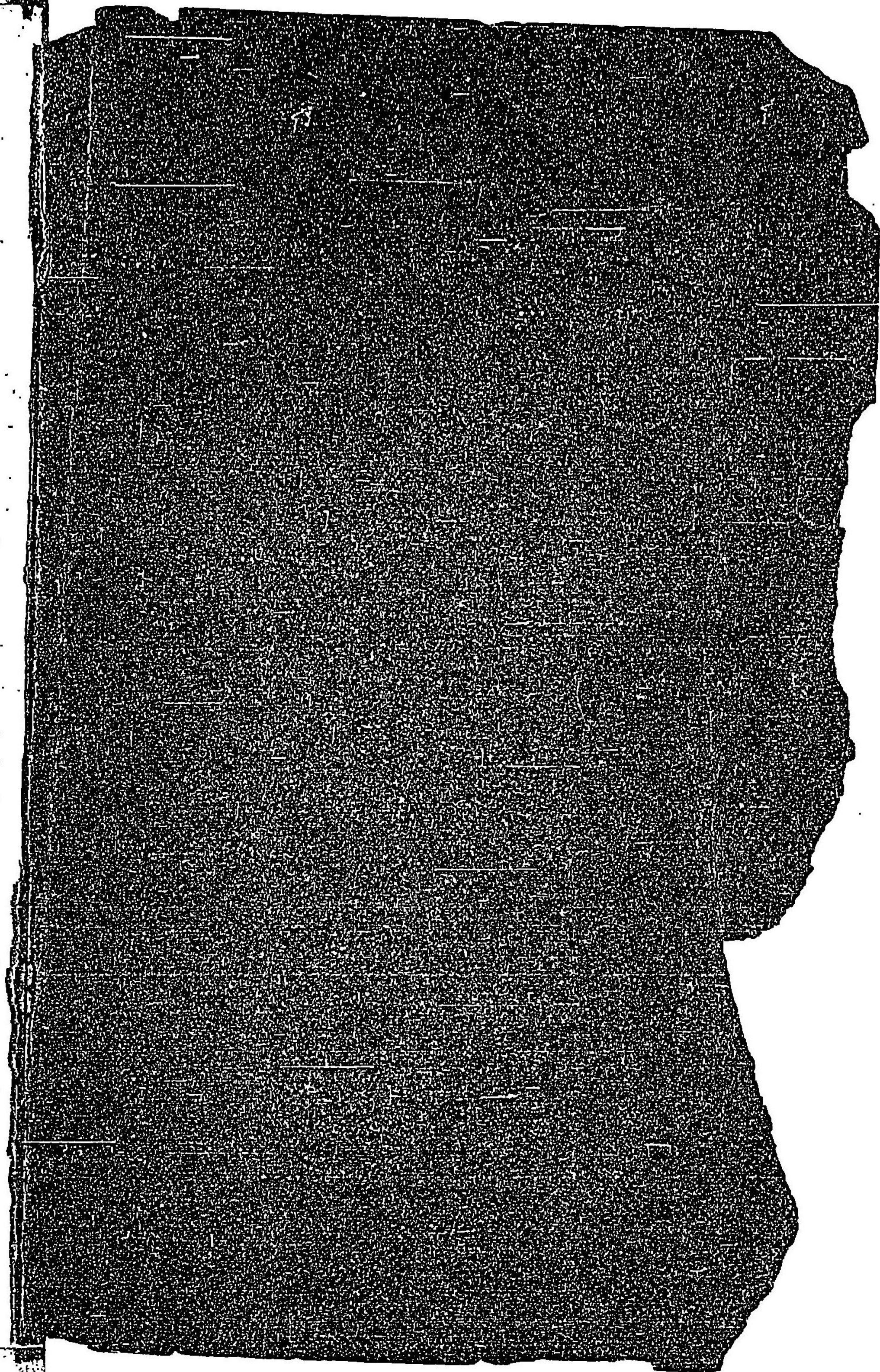
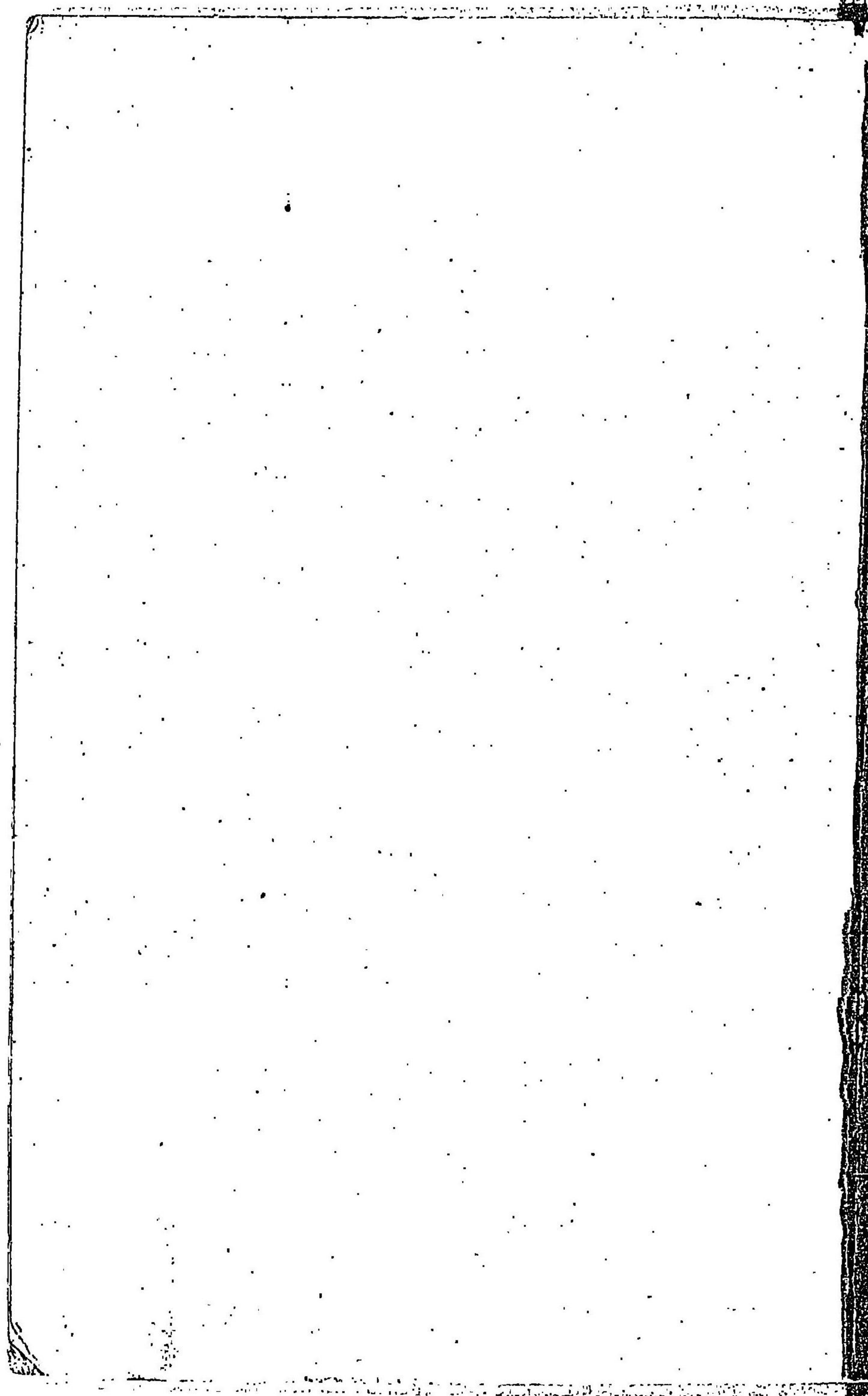
508

中江政庸編纂

第三編

大
日
本
語
辭
頭
見
下
去
律
書

明治十八年八月



CE
711
0189



大日本現行法律全書第三卷
附諸罰則
目次

第一編

罰令ニ係ル法律規則

第一章 電信

第一節 電信條例

第二節 電信取扱規則

第三節 電信切手發行

第四節 壹岐對馬及朝鮮國ニ發着スル電報料并
ニ海外電報ノ國內傳送料

第五節 電信切手買戻ヲ爲スヘキ電信分局

第二章 醬油

第一節 醬油稅則

第二節 同上取扱心得

第三節 同上施行以前製造着手ノ者課稅ノ件

第四節 未製成ノ醬油賣渡ノ件

第三章 菓子

第一節 菓子稅則

一丁
十二丁
二十九丁
全丁
四十一丁
全丁
四十二丁
四十七丁
四十八丁
全丁
四十八丁

目次

第二節	同上取扱必得	五十三丁
第三節	西洋菓子卸小賣ノ件	五十四丁
第四節	税則ノ雇人ト稱シ及器械沒收并ニ煎餅 團子餅類等菓子範圍外ノ件	全丁
第五節	呼賣出賣指稱ノ件	五十六丁
第六節	出賣露店又ハ呼賣ト稱スルモノ及ヒ六 月以前製造菓子課税ノ件	全丁
第七節	菓子原質品買入及自家ニテ仕入ヲ爲ス モノ鑑札ノ件	五十七丁
第八節	雇人ニハ職人モ包含シ露店呼賣ハ一家 一人ニ限ラス及ヒ露店呼賣課税并ニ他 ノ營業ヲ兼スル者ノ雇人課税ノ件	五十八丁
第九節	子弟ヲシテ呼賣ヲ爲サシムル者及ヒ露 店呼賣ヲ兼スル者鑑札下附ノ件	五十九丁
第四章	專賣	
第一節	專賣特許條例	六十〇丁
第二節	社會公益最大ナル發明品及改良追加年限	

發明品外國ヨリ輸入發明品偽造并ニ詐 偽ヲ以テ特許ヲ受ケル等ノ件	六十五丁
第三節 專賣特許手續	六十九丁
第四節 特許年限間他人ヲシテ製造賣買セシム ルノ件	七十二丁
第五節 專賣特許諸願書式及明細書文例	全丁
第六節 專賣標記方	九十一丁
第七節 專賣免許料收納手續	全丁
第五章 爆發物	
第一節 火藥取締規則制定ニ付管轄廳ニ於テ届 ケ出方	九十四丁
第二節 火藥類鐵道運送條規	全丁
第六章 商標	
第一節 商標條例附屬中追加	九十七丁
第二節 同上附屬中追加ニ付商標登錄願書式	全丁
第三節 商標觀覽所設置ノ件	全丁
第四節 公有商標ノ件	九十八丁

第七章 船舶

第一節	船舶檢査施行手續並ニ船舶檢査規則	九十九丁
第二節	不登簿船舶檢査報告書送附方	百五十〇丁
第三節	西洋形船舶檢査所設置	全丁
第四節	船燈監査手續概目	全丁
第五節	北海道諸產物出港稅船改派出所増設	百五十五丁
第八章	水產物取獲罰則中追加	全丁
第九章	驛傳	
第一節	驛傳取締所設置方ノ件	百五十五丁
第二節	組合外ノ地ニ到リ營業スル其地組合規則ニ從フ件	百五十六丁
第三節	驛傳取締ノ爲メ現在ノ町村驛名改稱不成ル件	百五十七丁
第十章	印紙賣捌規程取扱手續	百五十八丁
第十一章	兌換銀行券條例中追加	百六十六丁
第十二章	地券書換ノ節心得方	全丁
第十三章	摺附木製造ニ黃燐ヲ用ルヲ禁ス	全丁

第十四章 徵兵

第一節	徵兵事務條例中削除	百六十七丁
第二節	徵兵適齡者失踪シ事由書ヲ差出ス者ナキ時戶長ヨリ届出及戶主死亡嗣子失踪ニ男嗣子トナルモ猶豫ニ屬セサル件	全丁
第三節	徵兵相當者体格乙種身幹四尺九寸以上ノ者處分方ノ件	百六十八丁
第四節	年齢正誤ノ者處分ノ件	百七十〇丁
第五節	輜重輸卒身上異動届出方之件	全丁
第六節	豫備後備兵服役中ノ者屯田兵志願ノ件	百七十一丁
第七節	病氣犯罪等ニテ入營セサル輜重輸卒取扱方ノ件	全丁
第八節	札幌農學校ニテ修業中ノ者檢査ヲ要セス第一豫備徵員ニ編入ノ件	百七十二丁
第九節	檢査定日戶主ヨリ其檢査ヲ受クヘキモノニ示サス及ヒ定日前失踪逃亡シタルモノ告發ノ件	百七十三丁

第十節 癩疾不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムル 不能サルモノ猶豫鑑別ノ件	百七十三丁
第十一節 徵兵諸名簿異動取扱ノ件	百七十四丁
第十二節 徵兵適齡者失踪シ三十三歳以上ノモ ノ及徵兵署閉鎖罷名稱ノ者ニ關スル 件	百七十五丁
第十三節 新兵入營前他府縣又ハ管内ノ轉居及 ヒ豫備員等異動取扱ノ件	百七十六丁
第十四節 近衛兵入營附添人ノ件	百七十七丁
第十五章 古物商條例第四條第六條ニ該ル者處分 方ノ件	百七十八丁
第二編 懲罰	
第十六章 華族懲戒例	百八十〇丁
第十七章 戶長職務上過失處分方	百八十二丁
第十八章 在監人實印及ヒ權利義務ニ關スル証書 類ヲ隱匿スルモノ處分方	百八十三丁
第三編 民法	

第十九章 戶長所有ノ地所建物船舶ヲ質入書入等 ノ節扱方	百八十四丁
第二十章 土地所有者ニシテ其土地所在ノ戶長役 場ニ居住セサル代ノ人屈置ノ件	全 丁
第四編 訴訟法	
第廿一章 戶主身代限リノ節非戶主財產糶賣ノ件	百八十五丁
第廿二章 民事上帶勳有位者喚問	全 丁
第廿三章 地所建物船舶質入書入ノ公証ヲ受ケタ ルモノハ出訴期限ナキ件	百八十七丁
第五編 雜則	
第廿四章 衛生	
第一節 種痘施術心得書	百八十八丁
第二節 入齒々抜口中療治接骨取締	百九十五丁
第三節 鍼灸術營業取締	全 丁
第四節 鍼灸按摩ハ入齒々抜口中療治接骨ニ包 含セス及口腔科并ニ營業鑑札ニ關 スル件	全 丁

第廿五章 同業組合準則

百九十七丁

第一節 同業者組合準則中追加

第二節 規約ニ違約シ處分スルモ拒絶スルモノ
其他違犯者處分方并ニ同業組合ノ資格
ヲ以テ營利事業ヲ爲ス件

第三節 規約ヲ違約スルモ除名セサル件

第四節 組合同業者集會并ニ營業停止及規約中
ニ違約者處分記載方等ノ件

第五節 地主及其小作者同業中へ算入并ニ甲乙

第六節 漁業ハ準則ニ包含シ湯屋髪結渡世ハ包
含セス及ヒ組合ニ加盟ヲ拒ムモノ并新
同業者既定ノ規約履行等ノ件

第廿六章 官規

第一節 恩給令第三十條ノ件

第二節 官吏恩給令附則

第三節 文官傷痍疾病等差例

全 丁
百九十八丁
全 丁
二百〇丁
二百〇丁
二百〇四丁
二百〇五丁
二百十八丁

第四節 各廳ニ於テ恩給ヲ受ル者ヲ採用シ又ハ
免シタルモ恩給局へ通牒ノ件

第五節 戶長退官等ノ節金圓給與方ノ件

第廿七章 乘馬飼養令中加除

第廿八章 預金

第一節 預金規則

第二節 各廳ノ積立金預金局へ預ケ方

第三節 成規ニ從タル積立金及利殖等取調開申ノ件

第四節 預金取扱手續

第廿九章 鳥獸獵

第一節 神官戶長郵便取扱人巡查等職獵差許ノ件

第三十章 官有地拂下並ニ貸下

第六編 刑法治罪法

第卅一章 刑法(令訓)

第一節 刑期計算

○欠席裁判ヲ受ケタルモノ他ノ事件ニテ入監シ
不論罪トナリ或ハ裁判アリタルヲ知ラス自

二百二十一丁
二百二十二丁
全 丁
二百二十三丁
二百二十四丁
二百二十五丁
二百三十四丁
二百三十五丁

時16
508



大日本現行法律全書第三卷

中江政庸纂編

首シタル者刑期計算ノ件 二百三十七丁

第卅二章 控訴 二百三十八丁

第一節 輕罪ニ係ル控訴實施

第二節 控訴規則發布以前刑ノ言渡ヲ受ケタルモノ、ノ件 二百三十九丁

第三節 控訴ニ係ル裁判執行ノ件 二百四十〇丁

第四節 控訴ヲ爲シタル被告人拘禁中ノ諸費支辨方ノ件 二百四十二丁

第五節 同上既決囚ノ工錢收入ノ件 二百四十三丁

第六節 輕罪控訴事件登記簿式並書例 二百四十五丁

第七節 輕罪控訴事件表差出方 二百五十一丁

第卅三章 普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法 全丁

第卅四章 舊海陸軍刑律ニ依リ奪官及ヒ回籍ノ刑ニ該リ文武大小ノ員ニ補スルヲ禁セラレタル者五年ヲ過クル後解禁ノ件 二百五十二丁

大日本現行法律全書第三卷

中江政庸纂編

第一編 罰令ニ係ル法律規則

第一章 電信

第一節 電信條例

○明治十八年五月七日第八號布告

○電信條例別冊ノ通改定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但明治七年九月第九拾八號布告十二年五月工部省第九號布達其他本條例ニ牴觸スル從前ノ布告布達ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

○電信條例

○罰則

第十章 罰則

第五十二條 第七條ヲ犯シタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

○條例

第一章 電報

第一條 凡電報別テ三種ト爲ス

一 官報

二 局報

三 私報

電信條例

第五十三條 第二十二條 官報局報私報各別テ七類ト爲ス

條第二十三條ヲ犯シ

タル者ハ二圓以上五

拾圓以下ノ罰金ニ處

ス

第五十四條 第卅五條

第三十六條ヲ犯シタ

ル者ハ二圓以上二拾

圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十五條 第四十六

條ヲ犯シタル者ハ二

圓以上百圓以下ノ罰

金ニ處シ其機器ヲ沒

収ス

第五十六條 第四十八

條第四十九條ヲ犯シ

タル者ハ二圓以上百

一 通常電報

二 至急電報

三 追尾電報

四 同文電報

五 照校電報

六 受信電報

七 返信料前納電報

第三條 電報ヲ傳送スルノ順序ハ官報ヲ先トシ局

報之ニ次ニ私報又之ニ次クモノトス

第四條 電信局長ニ於テ法律規則ニ違背シ又ハ治

安ヲ妨害シ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル私報ハ

其傳送ヲ止ムヘシ

第五條 政府ハ時機ニ依リ線路又ハ地方又ハ語辭

ヲ限リ私報ヲ停止スルコトアルヘシ

第二章 電報書法 第六條 凡電報ヲ書載スルニハ普通辭又ハ秘辭隱

圓以下ノ罰金ニ處シ

其情狀ニ依リ電線私

設ヲ禁止ス

第五十七條 第五十條

ヲ犯シタル者ハ二月

以上二年以下ノ重禁

錮ニ處シ五圓以上百

圓以下ノ罰金ヲ附加

シ其機器ヲ沒収ス

第五十八條 電線ヲ切

斷セスト雖モ電氣ヲ

吸引シ易キ物ヲ纏繞

シテ不通ニ致シ若ク

ハ其効力ヲ妨害シタ

ル者ハ三月以上三年

以下ノ重禁錮ニ處シ

五圓以上五拾圓以下

語ヲ問ハス和文ハ片假名及數字ヲ用ヒ歐文ハ羅

馬字及亞刺比亞數字ヲ用フヘシ

第七條 電信局長ニ於テ私報ニ用フル秘辭隱語ノ

解譯又ハ其合符原本ヲ要スルトキハ之ヲ差出ス

ヘシ

第三章 電報料

第八條 凡電報料ハ國內ヲ通シテ同一ト爲ス但一

市内及壹岐對馬ニ發着スルモノハ此限ニアラス

第九條 電報料及手数料ノ金額ハ別ニ布達ヲ以テ

之ヲ定ム

第十條 電報料及手数料ハ電信切手ヲ以テ納ムル

モノトス其切手ハ賴信紙ニ貼付スヘシ但返信電

報料ノ前納及尋問電報料ノ假納ハ貼付スルノ限

ニアラス

第十一條 電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ

設ケアラサル地ヨリ郵便ニ付シテ電報ヲ發出ス

ルトキハ郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルコ

ノ罰金ヲ附加ス
 第五十九條 疎虞懈怠ニ因リ電信ノ器械柱木條線ヲ損壞切斷シテ電氣ヲ不通ニ致シ或ハ其効力ヲ妨害シタル者ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス其水底電信線ニ係ルトキハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス
 第六十條 電信ノ柱木條線ニ紙鷲ヲ懸ケ若クハ瓦礫其他ノ雜物ヲ擲チ又ハ柱木及測量標木ヲ獸畜ヲ繫キ若クハ貼紙シ戲書シ

トテ得其郵便切手ハ賴信紙ニ貼付セサル者トス
 第十二條 電報料及手数料ニ用ヒタル電信切手ハ電信中央局及分局ニ於テ消印スヘシ
 第十三條 電報料及手数料ハ過納アルモ己ニ電信切手ニ消印シタル後ハ之ヲ還付セズ未タ傳送セサル電報ヲ返還スルトキ已ニ消印シタルモノ亦同シ
 第十四條 第四條ニ據リ私報ノ傳送ヲ止ムルトキハ其既ニ納メタル料金ヲ還付セズ
 第十五條 電報取扱ノ過失ニ因テ甚シク遲延シ若クハ到達セサルモノハ其料金ヲ還付ス照校電報ニシテ傳送ノ際誤謬ヲ生シテ其用辨ヲ闕キタルコト判然タルモノ亦同シ
 第十六條 料金還付ノ請求ハ發信ノ日附ヨリ六十日以内ニ電信局長ニ申出ヘシ此期限ヲ過クルトキハ一切之ヲ受理セズ
 第十七條 電報料及手数料ニ不足アルトキハ電信

又ハ柱木ノ記號及測量標木ヲ毀棄汚穢シタル者ハ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ料
 第六十一條 政府ノ指定シタル水底電信線路内ニ於テ艦船ヲ繫船シ又ハ漁業採藻ヲ爲シ土砂ヲ掘鑿シ又ハ電信線ノ號標ニ舟筏ヲ繫キ又ハ其號標ヲ毀棄シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス
 政府ノ指定シタル電信船ノ號標距離内ニ

中央局及分局ニ於テ其電報ヲ傳送スルモ其不足ノ料金ニ倍テ發信人ヨリ追納セシムヘシ
 第十八條 發信人又ハ受信人ヨリ納ムヘキ料金ヲ七日以内ニ徵收シ難キトキハ發信人ノ納メサルモノハ受信人ヨリ受信人ノ納メサルモノハ發信人ヨリ徵收スヘシ
 第四章 電信切手
 第十九條 電信切手ハ日本政府ニ於テ發行セシモノタルヘシ
 第二十條 電信切手ハ電報料及手数料納濟ノ證トナスモノトス
 第二十一條 電信切手ヲ賣ル者ハ電信局長ノ免許ヲ受ケ電信切手賣下所ノ標札ヲ掲クヘシ
 第二十二條 電信切手ハ電信中央局及分局並電信切手賣下所ノ外ニ於テ賣買スヘカラス
 第二十三條 電信切手ハ其額面ヨリ低價ヲ以テ賣ルヘカラス

於テ前項ノ所爲ヲ行 第二十四條 返信電報料ノ前納及尋問電報料ノ假
 ヒ又ハ航行シタル者 納ニ充ツル電信切手並電信切手ニ代用スル郵便
 亦同シ 切手ヲ賴信紙ニ貼付シタルモノハ各其効用ヲ失
 フ

第六十二條 偽計又ハ

威力ヲ以テ電報ノ傳 第二十五條 電信切手ノ汚穢毀損又ハ不明瞭ナル
 送配達及架線其他ノ モノハ其効用ヲ失フ但其未タ使用セサルモノニ
 工事ヲ妨害シ若クハ 限リ二人以上ノ證人ヲ立テ其原由ヲ證明シタル
 之ヲ阻止シタル者ハ トキハ電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定メ分
 二月以上二年以下ノ タル分局ニ於テ定價十分二減ニテ買戻スヘシ

重禁錮ニ處シ二圓以 第二十六條 電信中央局及工部卿ノ告示ヲ以テ定
 上二拾圓以下ノ罰金 メタル分局ニ於テハ四枚以上連續シタル電信切
 手ヲ其所持人ノ請求ニ依リ定價十分一減ニテ買
 戻スヘシ

第六十三條 已レニ屬

セサル電報ヲ開封シ 第五章 電報發送
 若クハ私用シ或ハ毀 第二十七條 電報ノ傳送ハ電信中央局及分局ニ於
 棄汚穢抑留隱匿シ若 テ之ヲ管スルモノトス
 クハ受取人ニ非サル 第二十八條 電信中央局及分局ノ廢置並開局時間

者ニ交付シ及其情ヲ 工部卿之ヲ告示スヘシ
 知テ之ヲ收受シタル 第二十九條 電報ヲ依托スル時間ハ開局時間ニ限
 者ハ一月以上二年以 ルヘシ但至急官報ハ此限ニアラス
 下ノ重禁錮ニ處シ二 第三十條 發信人ノ請求アルニ非サレハ電報ノ受
 取證書ヲ交付セス之ヲ請求スルトキハ其手數料
 罰金ヲ附加ス 第三十一條 官報ハ官廳又ハ官吏ノ印ヲ押捺スヘ
 第六十四條 電信切手 第三十二條 官報ノ原信ヲ證據トシテ差出ストキ
 ナ偽造變造シ又ハ其 キモノトス但官報タルノ確證アルトキハ此限ニ
 情ヲ知り之ヲ使用シ アラス
 タル者ハ一年以上五 第三十三條 電信中央局及分局ニ於テ私報ノ發信
 年以下ノ重禁錮ニ處 ハ其返信ヲ官報トシテ發送スルコトヲ得
 シ五圓以上五拾圓以 第三十四條 電報ハ其宛名ノ家又ハ本人ニ之ヲ配
 下ノ罰金ヲ附加ス 達スヘシ但受取ルヘキ人名ノ指定官アルモノハ
 第六十五條 已ニ貼用 此限ニアラス
 シタル電信切手ヲ再
 ヒ貼用シタル者ハ二
 圓以上二拾圓以下ノ

罰金ニ處ス

第六十六條 電信事務

ヲ奉スル者前數條ノ

罪ヲ犯シタルトキハ

各本刑ニ照シ一等ヲ

加フ

第六十七條 電信局長

ノ許可ヲ得スシテ通

信室ニ入りタル者ハ

二圓以上二拾圓以下

ノ罰金ニ處ス之ヲ入

レタル者ハ一等ヲ加

フ

第六十八條 電信事務

ヲ奉スル者私報ノ旨

意ヲ漏泄シタルトキ

ハ三月以上三年以下

第三十五條

電報ヲ受取タル者ハ電報受取紙ニ時

刻ヲ記入シ記名ノ下ニ捺印シ直ニ之ヲ配達人ニ

交付スヘシ

第三十六條

宛名ノ家又ハ本人ニ屬セサル電報ノ

配達ヲ受取タル者ハ其由ヲ附箋シ直ニ之ヲ着信

局ニ返付スヘシ

其電報ヲ誤テ開封シタル者ハ更ニ封緘シ其事由

ヲ副署スヘシ

第三十七條

電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘサ

ル地ニ配達スル電報ハ手数料ヲ要セス但別使配

達嶋嶼配達船配達ハ此限ニアラス

第三十八條

電信中央局及分局ヨリ一里ヲ超ヘタ

ル地ニ配達スル電報ニシテ發信人ヨリ其配達方

ヲ指定セサルモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第三十九條

郵便ニテ遞送スル電報ハ其郵便稅ヲ

納ムヘシ

別使又ハ船船ヲ以テ配達スル電報ハ手数料ヲ納

ムヘシ

ノ重禁錮ニ處シ五圓

以上五拾圓以下ノ罰

金ヲ附加ス但法律規

則ニ從ヒ開披説明ス

ルハ此限ニアラス

官報及局報ノ旨意ヲ

漏泄シタル者ハ一等

ヲ加フ

第六十九條 電信事務

ヲ奉スル者頼信紙ニ

貼用シタル切手ヲ剝

取タルトキハ一月以

上一年以下ノ重禁錮

ニ處シ三圓以上三拾

圓以下ノ罰金ヲ附加

ス

其未タ消印ヲナサ、

マ嶋嶼ニ配達スル電報ハ實費ヲ納ムヘシ

第四十條 受信人ニ配達シ能ハサル電報ハ着信局

ニ留置キ本人或ハ其委任ヲ受ケタル代人ヨリ請

求スルトキハ之ヲ交付スヘシ若シ着信ノ日ヨリ

六十日以内ニ請求スル者アラサルトキハ之ヲ沒

書トナスヘシ

第四十一條 未タ傳送セサル電報ハ其發信人タル

ノ證據ヲ以テ返還ヲ請求スルトキハ之ヲ還付ス

ルコトアルヘシ

第四十二條 電報ノ傳送ヨリ生シタル損失又ハ異

議アルモ電信局ハ一切其責ニ任セス

第六章 尋問改正

第四十三條 受信人電報ノ字句ニ疑惑アリテ尋問

ヲ要スルトキハ其電報ヲ受取リタル時ヨリ二十

四時以内ニ之ヲ請求スルコトヲ得但其料金を假

納スヘシ

電信中央局及分局ニ於テハ其請求ニ應シ電報ヲ

ル切手ヲ剝取タル者
ハ刑法竊盜ノ本條ニ
照シテ處斷ス

第七十條 電信事務ヲ
奉スル者故ナクシテ
通信ノ依託ヲ拒ミタ
ルトキハ四圓以上四
拾圓以下ノ罰金ニ處
ス

第七十一條 政廳解怠
ニ因リ電報ヲ遺失シ
又ハ傳送配達ヲ延滞
シタル者ハ一圓以上
壹圓九拾五錢以下ノ
科料ニ處ス

第七十二條 配達人謝
儀若クハ不當ノ賃錢

校正シ通信上ニ誤謬ナキトキハ假納ノ料金を收
入シ若シ誤謬アルトキハ之ヲ還付スヘシ

第四十四條 發信人電報ノ字句ニ改正ヲ要スルト
キハ其電報ヲ依託シタル時ヨリ七十二時以内ニ
之ヲ請求スルコトヲ得但發信人タルノ證據ヲ差
出スヘシ

第七章 閱覽正寫

第四十五條 發信人又ハ受信人ハ電報發着ノ日ヨ
リ三十日以内ニ本人又ハ其代人タルノ證據ヲ以
テ發着局ニアル原信ノ閱覽ヲ請求スルコトヲ得
又其原信ニ相違ナキノ證印アル正寫ヲ請求スル
コトヲ得其期限ヲ過キタルトキハ更ニ六十日以
内ニ之ヲ電信局ニ請求スルコトヲ得此期限ヲ過
クルトキハ一切之ヲ許サス原信ノ正寫ヲ請求ス
ルトキハ其手数料ヲ納ムヘシ

第八章 電機私設

第四十六條 凡電氣ノ機器ヲ以テ通信傳話及號報

ヲ要求シタル片ハ五
拾錢以上壹圓九拾五
錢以下ノ科料ニ處ス

第七十三條 第五十八
條第六十二條第六十
四條第六十五條ニ記
載シタル罪ヲ犯サン
トシテ未ダ遂ケサル
者ハ刑法未遂犯罪ノ
例ニ照シテ處斷ス

第七十四條 第六十四
條第六十五條第六十
九條ニ記載シタル罪
ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處
シタル者ハ六月以上
二年以下ノ監視ニ付
ス

ヲナサントスル者ハ工部卿ニ願出ヘシ

第四十七條 私設ノ電線ハ官設ノ電線アラサル地
ニ於テ一人又ハ兩人ノ用ニ供スルモノニ限り許
可スルモノトス但傳話又ハ鐵道ノ用ニ供スルモ
ノハ官設ノ電線アル地ニ於テモ許可スルコトア
ルヘシ

第四十八條 電線私設ノ許可ヲ得タル者ハ電信局
ニ於テ定メタル規約ニ從フヘシ

第四十九條 私設ノ電線ハ最寄電信分局ニ連續設
置スヘシ但傳話又ハ鐵道ノ用ニ供スルモノハ此
限ニアラス

第五十條 私限ノ電線ハ他人ノ電報ヲ傳送スルコ
トヲ許サス

第九章 海外電報

第五十一條 海外電報ハ同盟諸國ノ會議ヲ以テ定
ムル所ノ萬國條約書ニ據リテ取扱フヘシ
(第五十二條ヨリ第七十四條迄上段ニ在)

第二節 電信取扱規則

明治十八年五月七日第七號布達

電信取扱規則別冊ノ通相定ム

右布達候事

別冊

電信取扱規則

第一章 電報

第一條 官報トハ各官廳ノ公信並締盟國ノ大臣長官陸海軍將師公使

及領事ノ通信ヲ云フ但商人ニシテ領事ヲ兼スル者ヨリ發出スル電

報ハ在官者ニ宛テ且公務ニ關スルモノニ非サレハ官報ト爲サス

第二條 局報トハ電信事務ニ關シ電信局及中央局并分局相互ニ送受

スル通信ヲ云フ

第三條 私報トハ官報局報ヲ除クノ外諸般ノ通信ヲ云フ

第四條 發信人ハ第二條ニ記載シタル各類ノ電報ヲ單用シ又ハ併用

スルコトヲ得

第五條 至急電報ハ通常電報ヨリ先ニ傳送シ同種類ノ電報ハ發信局

ニ於テハ受托ノ前後ニ山リ中繼局ニ於テハ受信ノ順序ニ從テ傳送

スルモノトス

第二章 電報書法

第六條 電報ニ用フル文字及數字ハ莫爾斯字號ニ翻書スルコトヲ得

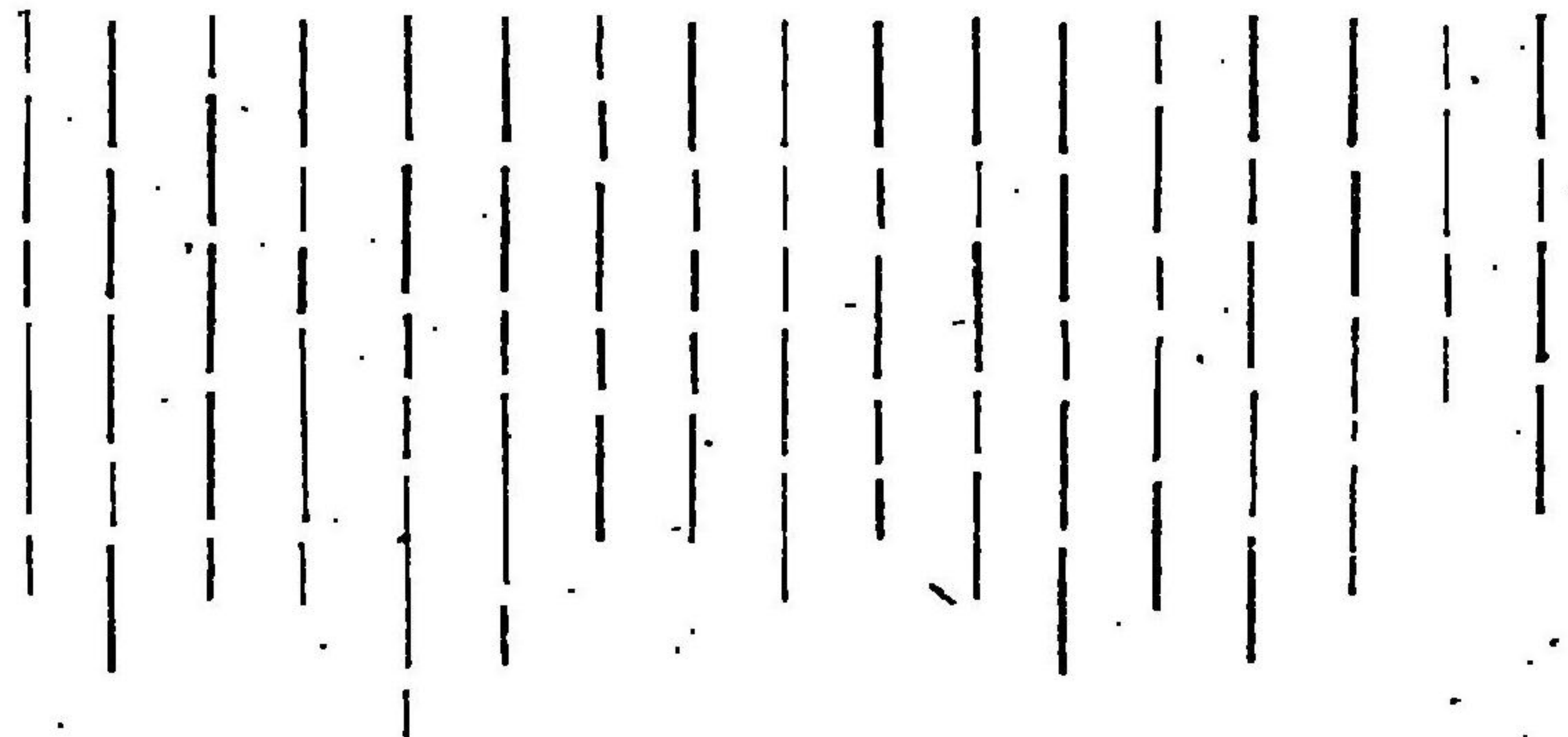
ヘキモノニ限ル

第七條 莫爾斯字號左ノ如シ

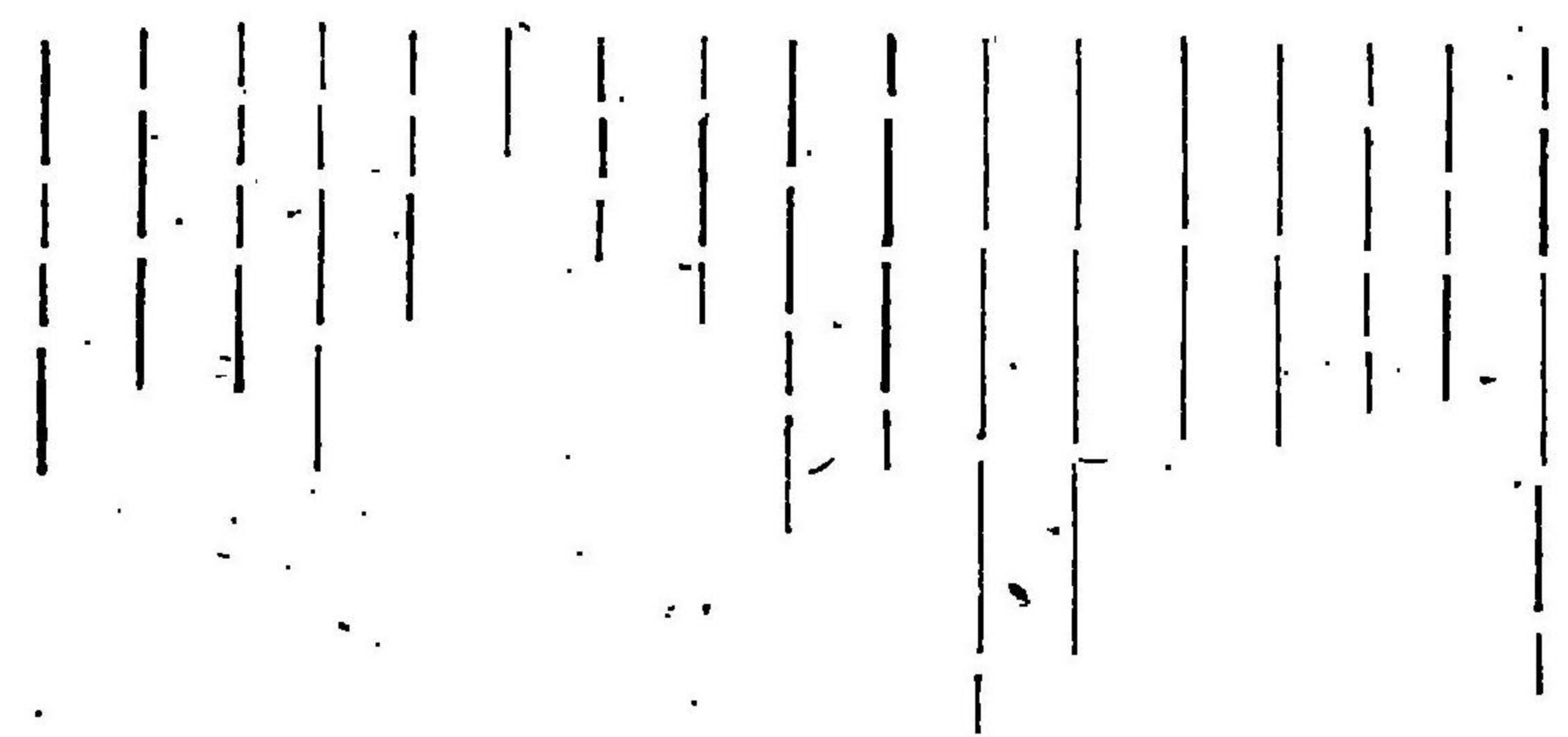
片假名及數字

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

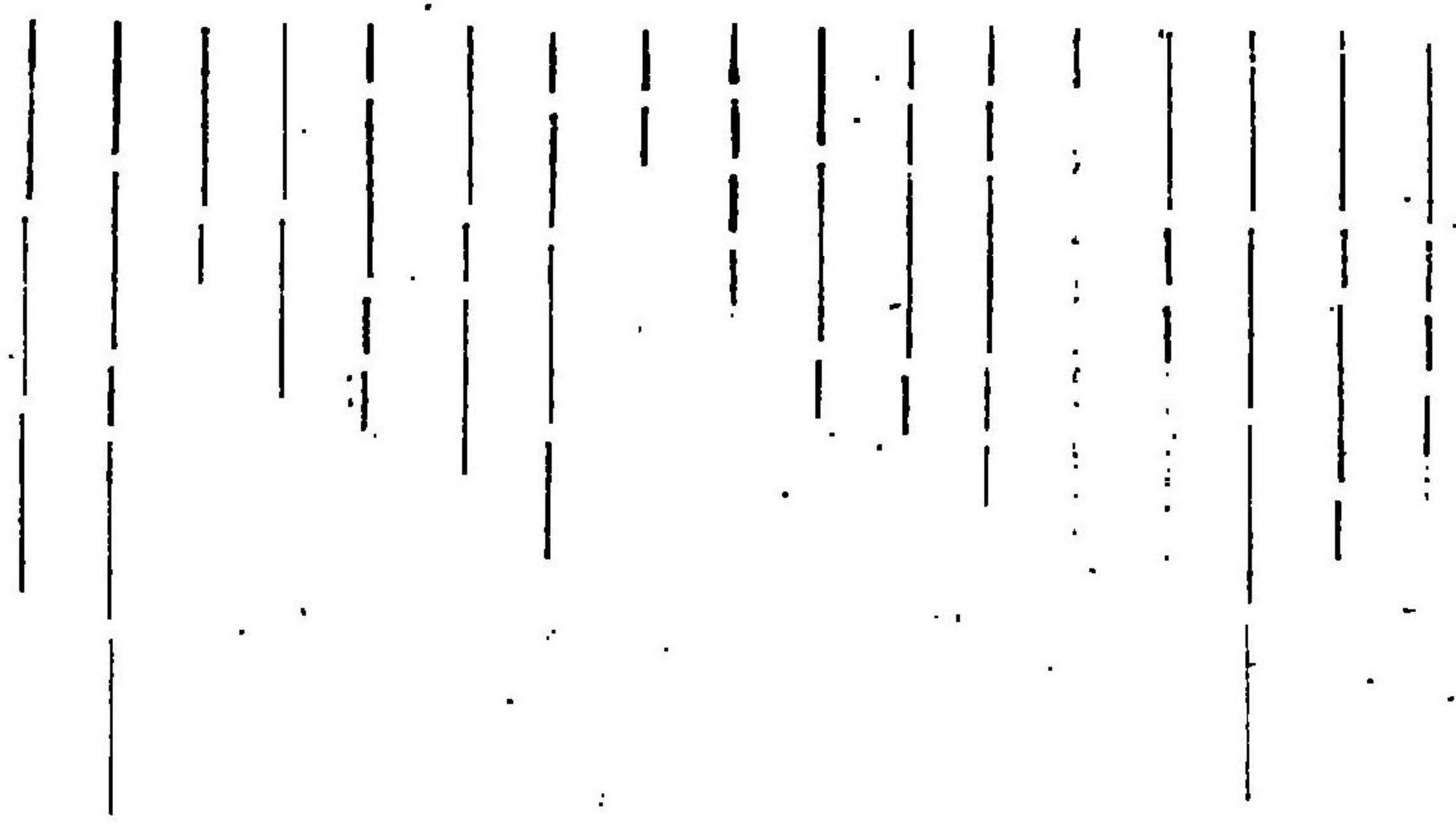
ソ ス セ モ ヒ シ ミ メ ヌ キ サ ア テ エ コ フ ケ



マ ヤ ク ノ ウ ム ラ ナ チ ツ ソ レ タ ヨ カ ワ ナ



o ñ n m l k j i h g f é e d ch c b

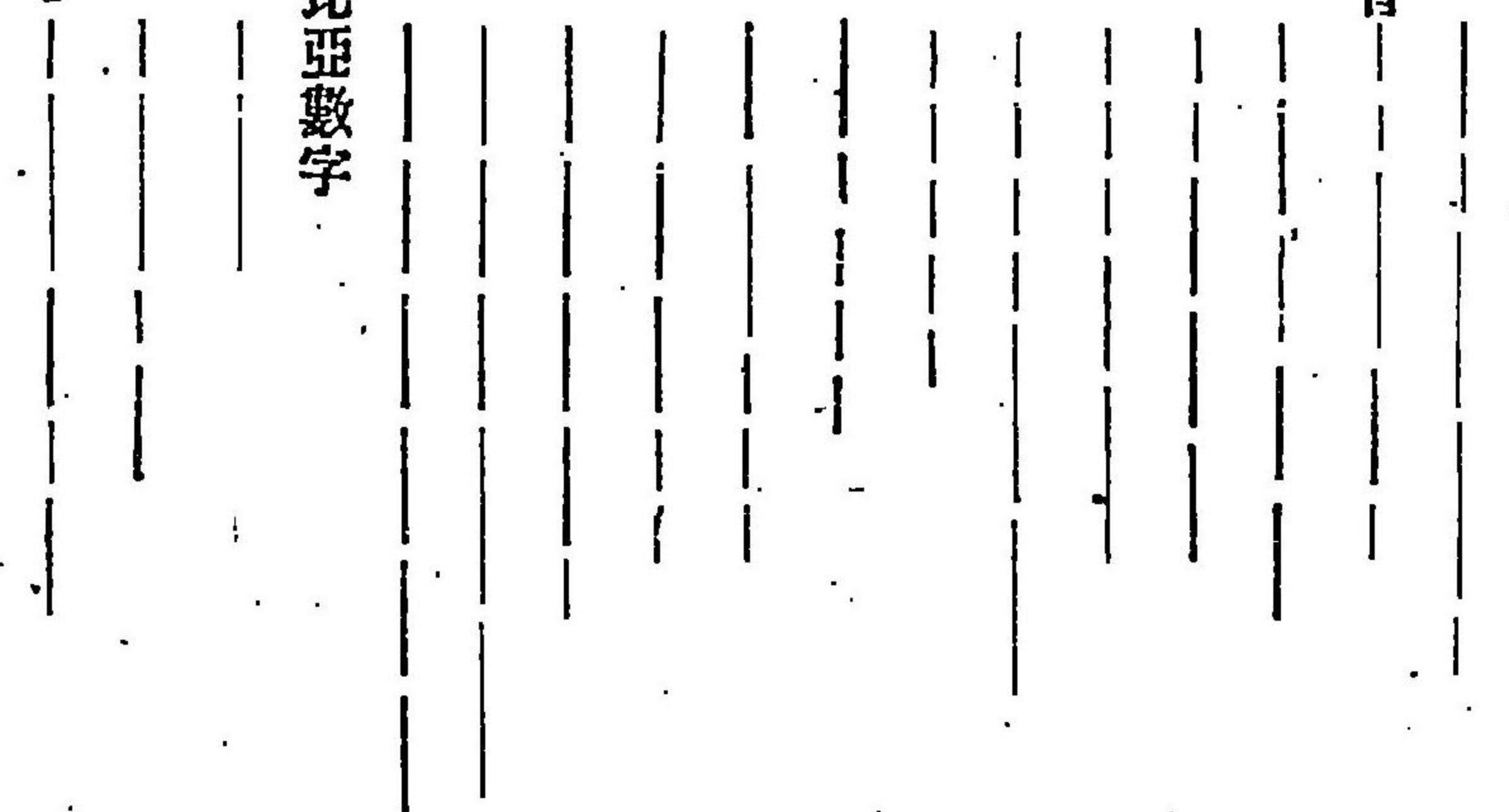


羅馬文字及亞刺比亞數字

á 又 há
ä a

歸除線 零 九 八 七 六 五 四 三 二 一

〇 半濁音 濁音



重點	小讀	讀	終點	斷文句讀點及記號	括孤	新章	句讀點	和文句讀點及記號	掃除線	0	9	8	7	6	5
:	;	,	.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

4 3 2 1 z y x w v ü u t s r q p ö

—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問標	?
感符	!
畧符	,
新章	—
連續點	—
括弧	()
轉倒句讀	“ ”
字下線	—
略符號	
至急官報	ウナ
追尾電報	チラ
改追尾電報	ナチ
同文電報	ヨム
照核電報	ムニ
受信電報	ニナ
返信料前納電報	ナツ
局待	ヤム
	WT RP CR TC MT RF FS UR

親展	ニカ
郵便配達	ツツ
書留郵便配達	カナ
別使配達	マツ
船船配達	ハホ
	BD XP LR PP CL

第八條 普通辭トハ和文ハ片假名歐文ハ羅匈語又ハ常ニ通用スル歐洲國語ニシテ其意味ノ通解シ易キモノヲ云フ但電報新書及電報新編ニ依リ語解ニ代用スル數字ヲ以テ書シタル電報ハ普通辭ト看做スヘシ

第九條 秘辭トハ普通辭ニ非ス文字又ハ數字ノ孤立或ハ聯集シテ其意味ノ通解シ難キモノヲ云フ

第十條 隱語トハ每語ニハ通スヘキ意味アルモ作文全體ニ於テ通解シ難キモノヲ云フ

第十一條 普通辭中秘辭ヲ用ヒタルトキハ括弧ヲ以テ秘辭ノ前後ヲ圍ムヘシ

第十二條 秘辭ヲ用ヒタル私報ニハ文字ト數字トヲ混用スヘカラス

第十三條 普通辭ヲ用ヒタル和文ニハ數字ヲ混用スルコトヲ得
 第十四條 和文ニハ普通辭秘辭隱語ヲ問ハス第十五條ノ場合ヲ除ク
 ノ外ハ亞刺比亞數字ヲ挿入スヘカラス
 第十五條 和文ニハ歐字及之ニ附屬シタル亞刺比亞數字ヲ挿入スル
 コトヲ得但小括弧ヲ以テ之ヲ區別スヘシ
 第十六條 受信人ノ住所氏名ハ着信局ニ於テ配達シ易キ爲メ詳ニ之
 ヲ肩書スヘシ若シ町村名等他ニ類似ノ地名アルモノハ府縣名又ハ
 國名及郡區名ヲ記スヘシ但詳明ヲ要スルモ贅語ヲ用フヘカラス
 第十七條 宛名ノ不十分ヨリ起リタル損失ハ總テ發信人ノ負擔タル
 ヘシ
 第十八條 受信人ノ住所氏名ハ豫メ電信局ト約定シテ零號ヲ常用ス
 ルヲ得
 第十九條 第七條ニ記載シタル略符號ハ賴信紙中受信人ノ名下ニ記
 スヘシ若シ普通ノ文字ヲ以テ書シタルトキハ發信局ニ於テ之ヲ零
 符號ニ改書スルモノトス
 第二十條 發信人ノ賴信紙中ニ記シタル零符號判然タラサルモノハ
 都テ通常電報ト爲シテ取扱フヘシ

第三章 字數計算

第二十一條 和文電報ノ住所氏名ハ字數ニ算入セス歐文電報ノ住所
 氏名ハ語數ニ算入ス

第二十二條 和文中濁點半濁點ヲ付シタル文字ハ之ヲ二字ニ計算ス
 ヘシ

例

ハ 二字

ヒ 二字

第二十三條 和文中コ用ヒタル數字歸除線句讀點及第十五條ニ記載
 シタル歐字及之ニ附屬シタル亞刺比亞數字ハ其一字又ハ一個ヲ片
 假名一字ニ計算スヘシ

例

八八^六/_三

數字歸除線合セテ五字

セキタンサンヒヤクエン

文字句讀點合セテ十二字

セキタン。サンヒヤクエン

同

「a no 150」

小括弧歐字及亞刺比亞
數字合セテ八字

第二十四條 和文中ニ用ヒタル括弧及小括弧之ヲ片假名二字ニ計算スヘシ

第二十五條 歐文ハ一語ノ聯綴十五字ヲ超ヘサルモノハ之ヲ一語ニ計算シ十五字ヲ超ヘタルモノハ又之ヲ一語ニ計算スヘシ

第二十六條 歐文中文字又ハ數字ノ弧立シタルモノハ之ヲ一語ニ計算スヘシ

第二十七條 歐文中聯記シタル數字五個ヲ超ヘサルモノハ之ヲ一語ニ計算シ五箇ヲ超ヘタルモノハ又之ヲ一語ニ計算スヘシ

第二十八條 歐文中順序數字ヲ作ル爲メ數字ニ加ヘタル文字ハ之ヲ一個ニ計算スヘシ

例

17th 一語 數字文字合セテ四個

1778th 二語 同六個

第二十九條 歐文數字中ニ用ヒタル分數點讀點及歸除線ハ一個ノ一字ニ計算スヘシ

例

41.55 一語 (數字分數點合セテ五個)

44,560 二語 (數字讀點合セテ六個)

510 $\frac{1}{2}$ 二語 (數字歸除線合セテ六個)

第三十條 歐文中ニ記入シタル句讀諸點連續點畧符新章ハ之ヲ語數ニ計算セス但此記號ハ必スシモ傳送スルヲ要セス

第三十一條 歐文中連續點ヲ以テ繋キタル辭及畧符ヲ以テ分チタル其分辭毎ニ一語ニ計算スヘシ

例

Weston-super-mare 三語

New-York 二語

I've 二語

第三十二條 歐文中字下線ヲ每認ニ引キ又ハ二語以上ニ繋ケテ引クトキハ一個ノ一語ニ計算スヘシ

例

The matter is urgent 七語并字下線

Leave at once 二個合セテ九語

第三十三條 歐文中ニ用ヒタル括弧轉倒句讀ハ之ヲ一語ニ計算スヘシ

第三十四條 歐文普通辭中秘辭ノ雜リタルモノハ其普通辭ハ通常ノ例ヲ以テ之ヲ計算シ數字又ハ文字ノ聯集シタルモノハ數字ノ例ニ依テ之ヲ計算シ第八條ニ記載シタル國語ニ非サル語辭ハ文字ノ聯集ト看做シテ之ヲ計算スヘシ

第三十五條 歐文中國語ノ用法ニ反シテ語辭ノ聯綴シタルモノ若クハ省畧シタルモノハ普通辭ノ例ヲ以テ計算スルヲ得ス然レモ府縣名地名其他官位氏名等及ヒ文字ニテ記載シタル數目ハ發信人ニテ之ヲ顯明ニスル爲メ用ヒタル語數ニ因テ計算スヘシ

第三十六條 第七條ニ記載シタル略符號ハ和文ハ二字歐文ハ一語ニ計算スヘシ

第四章 電報料及ヒ手數料

第三十七條 國內一市内及ヒ壹岐對馬ヲ除クヲ通スル電報料左ノ如シ

一和文 片假名十字以内一音信金拾五錢

十字以内ヲ加フル毎ニ金拾錢ヲ増ス

一歐文 一語毎ニ 金十錢

五語以内ハ總テ金五拾錢トス

第三十八條 一市内ニ發着スル電報料左ノ如シ

一和文 片假名十字以内一音信金五錢

十字以内ヲ加フル毎ニ金三錢ヲ増ス

一歐文 一語毎ニ 金三錢

五語以内ハ總テ金拾五錢トス

第三十九條 至急官報ノ電報料ハ通常電報料ノ二倍トス

第四十條 至急官報ノ電報料ハ通常電報料ノ三倍トス

第四十一條 追尾電報料ハ追尾一回毎ニ原信電報料ノ半額ヲ増ス

第四十二條 同文電報料ハ原信ヲ除クノ外一通毎ニ和文ハ金五錢歐文ハ金拾五錢トス

第四十三條 照校電報料ハ原信電報料ノ半額ヲ増ス

第四十四條 受信電報料ハ和文ハ一音信歐文ハ五語ノ料金ヲ増ス

第四十五條 電報料ニ一錢未滿ノ端數ヲ生シタルトモ其端數ハ切捨ツル者トス

第四十六條 歐文電報ノ住所氏名ノ畧號常用料ハ一ヶ年正貨拾圓トス

第四十七條 例條第三十條ノ電報受取証書ノ手數料ハ金三錢トス

第四十八條 例條第三十九條ノ別使配達料ハ九丁毎ニ金三錢トス

第四十九條 條例第三十九條ノ船艀配達料ハ金ニ拾錢トス
 第五十條 條例第四十五條ノ原信正寫ノ手数料ハ和文百字以内毎ニ
 金貳錢歐文百語以内毎ニ金拾錢トス
 第五十一條 料金ノ還付ヲ講求スルキハ不達ニ係ルモノハ着信局又
 ハ受信人ノ書面ヲ添へ誤謬逕延ニ係ルモノハ受信人ニ到達シタル
 電報ノ原書ヲ添へ發信人ヨリ電信局長ニ申立ヘシ但時宜ニヨリ受
 信人ヨリ申立ツルヲ得
 第五十二條 電報逕延ノ申立ハ郵便ニテ遞送スル時日ヨリモ後レテ
 届先ニ達シタル者ニ限ルヘシ
 第五十三條 料金ヲ還付スルトキ前ニ電信切手又ハ郵便切手ヲ以テ
 納メタル者ハ電信切手ニテ還付シ通貨ヲ以テ納メタルモノハ通貨
 ニテ還附スヘシ
 第五十四條 同文電報ノ内若干通ノ料金ヲ還付スルキハ原信ノ料金
 及ヒ通數ニ因テ收入シタル料金ヲ併セ之ヲ總通數ニシテ除算シ其
 得數ヲ以テ還付スヘキ一通ノ額トスヘシ
 第五十五條 料金ノ追納方ヲ通知シタルトキハ其通知ノ日ヨリ七日
 以内郵便往復ノ日數ヲ除クニ納ムヘシ此期限ヲ過ルトキハ條例第十八條ニ依テ處

分スヘシ

第五十六條 發信人又ハ受信人ヨリ料金ヲ追納スルトキハ電信中央
 局又ハ分局ノ追徴證書ニ據リ電信切手若クハ通貨ヲ以テスヘシ又
 郵便切手ヲ以テ電信切手ニ代用スルコトヲ得ヘキ地ニ在テハ郵便
 切手ヲ以テスルコトヲ得但其通貨又ハ郵便切手ハ電信中央局及分
 局ニ於テ電信切手ニ換ユルモノトス

第五章 電報發送

第五十七條 發信人ハ電報一通ニ三名マテ連署スルコトヲ得
 第五十八條 受信人ノ便利ヲ圖リ電報ヲ電信中央局又ハ分局ニ預ケ
 置カントスルトキハ其局宛トナスモ妨ケナシ
 第五十九條 電報ノ受取證書ニハ其手数料ニ當ル電信切手ヲ貼付シ
 且消印シテ交付スヘシ
 第六十條 郵便ニテ電信ヲ發出スルトキハ電報文ト郵便切手トヲ合
 封シ其近傍ノ電信分局へ宛テ之ヲ差出スヘシ
 第六十一條 郵便ニテ發出シタル電報ニテ閉局後ニ受取リタルモノ
 ハ翌日開局ノ時傳送ノ手續ヲナスモノトス
 第六十二條 發信人速ニ返信ヲ望ミ發信局ニ在テ之ヲ待ツキハ局待

ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ
 第六十三條 發信人電報ノ受信家へ到達スルキ他人ノ披見スルコトヲ憚ルトキハ親展ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ
 第六十四條 別使ヲ以テ配達スヘキ電報ハ別使配達ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ
 第六十五條 別使ヲ以テ配達スヘキ電報ニシテ發信局ニ於テ里程分明ナラサルトキハ發信人ニ豫算ノ金額ヲ納メシメ著信局ニ於テ實地ノ調査ヲナシ過剩アラハ發信人ニ還付シ不足アラハ受信人ヨリ徴収スヘシ
 第六十六條 郵便ヲ以テ遞送スヘキ電報ハ郵便又ハ書留郵便ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ但シ別配達郵便ハ之ヲ取扱ハス
 第六十七條 艦船宛ノ電報ニシテ舢舨ヲ以テ配達スヘキモノハ舢舨配達ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ
 第六十八條 艦船宛ノ電報ニシテ別使ヲ以テ配達スヘキモノハ舢舨配達并ニ別使配達ノ零符號ヲ以テ指定スヘシ
 第六十九條 艦船宛ノ電報ニシテ舢舨配達ノ指定ナク實際舢舨ヲ要スルキハ其舢舨料ヲ受信人ヨリ徴収スヘシ

第七十條 嶋嶼配達ノ電報ハ著信局ヨリ一里内外ニ拘ハラズ別使又ハ郵便ヲ用フヘキニ依リ何レカ其零符號ヲ以テ指定スヘシ但シ記入ナキモノハ先拂郵便ヲ以テ遞送スヘシ
 第七十一條 嶋嶼ノ別使配達料ハ水陸トモ實費徴収スヘキニ依リ發信人ヨリ豫算ノ金額ヲ發信局へ納ムヘシ其過不足ハ第六十五條ニ依リ處分スヘシ
 第七十二條 電報ハ著信局ニ於テ受信シタル順序ニ依リ配達スヘシ
 第七十三條 電報ハ送達紙ニ記シテ配達スヘシ
 第七十四條 受信人ニ配達スル送達紙ニハ無手数料ニテ其發信局名及依托ノ月日時分ヲ記スルモノトス
 第七十五條 送達紙ニ記載シタル宛名ノ者他所へ移轉シ其居所分明ナルモノ一里ヲ超ヘサルトキハ別ニ手数料ヲ要セスシテ配達スヘシ一里ヲ超ユルトキハ郵便ヲ以テ遞送スヘシ
 第七十六條 條例第三十四條ニ依リ受信人豫テ電報ヲ受取ルヘキ人名ヲ指定スルトキハ其旨書面ヲ以テ申出置ヘシ
 第七十七條 電信中央局又ハ分局ニ預リ置キ及留置ク電報ハ其發信人及受信人ノ住所氏名ヲ詳記シテ七日ヨリ少ナカラサル間其局前

ニ揭示スヘシ

第六章 至急電報

第七十八條 官報私報ヲ問ハス通常電報ニ先チテ傳送ヲ要スルモノハ至急電報ノ畧符號ヲ以テ指定スヘシ

第七十九條 至急電報ニシテ返信料ヲ前納シ其返信モ至急電報ト爲ストキハ至急電報ノ畧符號ノ次ニ「ヘン」シ「ウ」ト記スヘシ

第七章 追尾電報

第八十條 發信人豫メ受信人ノ轉居又ハ旅行等ヲ知リテ電報ヲ追送セントスルトキハ追尾電報ノ畧符號ヲ以テ指定スヘシ

第八十一條 追尾電報ノ第一着局以外ノ料金ハ受信人ヨリ徴収スヘシ但一市内ニテ追送スルモノハ料金ヲ要セス

第八十二條 追尾電報ノ頼信紙ニハ追尾スヘキ受信人ノ居所ヲ逐次ニ記スヘシ

第八十三條 追尾電報ノ畧符號アルモ追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記セサルモノニシテ若シ受信人不在ノキ更ニ追尾スヘキ居所ヲ知ルコトヲ得タルトキハ直ニ之ヲ追送スヘシ若シ追送スヘキ居所不分明ナルカ又ハ之ヲ追送スルモ受信人ヲ尋得サルトキハ電報ヲ留置クヘシ

第八十四條 追尾電報ノ畧符號アリテ且追尾スヘキ居所ヲ逐次ニ記シタルモノハ受信人ニ達スルマテ逐局之ヲ傳送シ若シ受信人ヲ尋得サルトキハ其終尾ノ局ニ於テ前條ニ依テ之ヲ取扱フヘシ但追尾電報ノ本文ハ固ヨリ一字モ省畧セス逐局之ヲ傳送ス然レモ逐書シタル居所ハ其當サニ送ルヘキモノ、ミヲ存シ已ニ經過セシモノハ之ヲ削除スヘシ

第八十五條 追尾ノ指定ナキ電報ニテモ受信家ノ者ヨリ之ヲ追尾電報ト爲ストキハ更ニ改追尾電報ノ畧符號ヲ以テ指定シ之ヲ逐局傳送スルコトヲ得

第八十六條 追尾電報ニシテ其返信料ヲ前納スルトキハ追尾電報ノ畧符號ノ次ニ前納ノ畧符號ヲ記シ第一着局マテノ返信料ヲ前納スヘシ

第八十七條 返信料ヲ前納シタル電報ヲ更ニ追尾電報ト爲ストキハ返信料前納ノ畧附號ノ次ニ改追尾電報ノ畧符號ヲ記スヘシ其着信局ニ於テハ第一着局マテノ返信料ヲ受信人ニ交付ス

第八十八條 何人ニテモ電報ノ配達ヲ受ル所ノ電信分局ヘ移轉等ノ

事由ヲ書面ニテ申出置キ其電報ノ到着次第追尾電報ノ規則ニ依リ再送ヲ受ント請求スルコトヲ得此電報ハ着信局ニ於更ニ改追尾電報符號ヲ以テ指定シ移轉ノ居所所在ノ着信局へ追送スヘシ

第八十九條 追尾電報ヲ若信局ヨリ一里ヲ超ヘタル地ニ遞送スルトキハ前拂郵便ヲ用ヒ其送達紙中ニ電報料及郵便税ノ金額ヲ記シ之ヲ追徴ス

第九十條 受信人ニ配達スル追尾電報ノ送達紙ニハ第一發信局ノ局各月日時分ヲ記スルモノトス

第九十一條 追尾電報ヲ傳送シタル後受信人ノ在所不分明ニテ配達ヲ得サルトキ又ハ受信人ヨリ追尾料金ヲ出スコトヲ拒ムトキハ其追尾依託人ニ事實ヲ報シテ其料金ヲ追徴スヘシ

第八章 同文電報

第九十二條 發信人ヨリ同時ニ同文ノ電報ヲ一市内又ハ一市内ニ非サルモ着信局ヲ同フスル地方ニ經シテ居所ヲ異ニスル數名へ差出サントスルトキハ同文電報ノ符號ヲ以テ指定スヘシ

第九十三條 同文電報ノ頼信紙ニハ初筆ノ受信人ノ名下ニ符號ト受信人ノ員數ヲ記スヘシ

第九十四條 同文電報ハ原信一通ニ定則ノ電報料ヲ課シ其餘ハ一通毎ニ同文電報料ヲ課スルモノトス

第九十五條 照校電報ヲ同文電報ト爲ストキハ同文電報ノ符號ノ次ニ照校電報ノ符號ヲ記スヘシ其電報ハ原信一通ニ照校電報料ヲ課シ其餘ハ同文電報料ノミヲ課スルモノトス

第九十六條 受信電報ヲ同文電報ト爲ストキハ同文電報ノ符號ヲ記シ同文電報料ノ外其通數ニ應シ受信電報料ヲ納ムヘシ

第九十七條 同文電報ハ發信人ニ於テ送達紙各通ニ受信人ノ連名ヲ記スルコトヲ請求セサルトキハ一通毎ニ一名ノミヲ記スルモノトス故ニ之ヲ請求スル者ハ同文電報ノ符號ノ次ニ「レ」ノ「メ」ト記スヘシ

第九十八條 住居ヲ同クスル者ニ宛タル電報ニテモ同文電報ト爲スニ非サレハ電報一通ニ三名ヲ超ヘタル連名ヲ記スルコトヲ得ス

第九十九條 同文電報ヲ送達スルニ或ハ郵便ヲ以テシ或ハ別使ヲ以テスル等各配達ノ方法ヲ異ニスルモノハ受信人ノ名下ニ一々郵便配達若クハ別使配達ノ符號ヲ以テ指定スヘシ

第九章 照校電報

第三百條 發信人ニ於テ電信中字句ノ誤謬ヲ豫防セントスルトキハ照校電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第三百一條 照校電報ハ各局傳送ノ際全文ヲ校正スルモノトス

第三百二條 返信料ヲ前納シタル照校電報ニテ其返信モ亦照校電報ト爲ストキハ照校電報ノ略符號ノ次ニ「ヘンシンセウカウ」ト記スヘシ

第十章 受信電報

第三百三條 發信人電報ノ正ニ受信人ニ到達セシヤ否ヤノ報知ヲ受ケントスルトキハ受信電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第三百四條 受信報知ヲ要スル電報ノ發信人ニハ受信人ノ電報ヲ受取リタル時刻ヲ報知スヘシ

第三百五條 受信電報ハ其原信ノ種類ニ依テ之ヲ傳送スヘシ

第三百六條 受信報知ヲ要スル電報ヲ受信人ニ配達スル能ハサルトキハ着信局ニ於テ先ツ發信局ニ其旨ノ局報ヲ送ルヘシ然ル後電報ヲ配達スルコトヲ得タルトキハ直ニ受信電報ヲ送ルヘシ若シ局報ヲ送リタル後二十四時ヲ過クルモ尙配達スル能ハサルトキハ更ニ其事由ヲ確報スヘシ

第三百七條 受信報知ヲ要スル電報ニシテ其着信局ヨリ受信人ニ別使

又ハ郵便ヲ以テ配達スヘキモノハ受信電報ノ略符號ノ次ニ別使配達若クハ書留郵便配達ノ略符號ヲ記スヘシ

第三百八條 發信人配達區外ニ居住スルニ依リ別使又ハ郵便ヲ以テ受信電報ノ配達ヲ得ントスルトキハ賴信紙ノ端末ニ「別使又ハ郵便」ト記シ其別使料又ハ郵便稅ヲ前納スヘシ

第十一章 返信料前納

第三百九條 發信人ニ於テ受信人ヨリ納ムヘキ電信料ヲ前納シテ返信ヲ受ケントスルトキハ返信料前納電報ノ略符號ヲ以テ指定スヘシ

第三百十條 一音又ハ五語ヲ超ヘテ返信料ヲ前納スルトキハ返信料前納ノ略符號ノ次ニ其字數又ハ語數ヲ記スヘシ

例

和文 (ナツニ〇)

歐文 (RP 6) 又ハ (RP 10)

第三百十一條 返信料ハ原信料ノ三倍ニ超ヘテ前納スルコトヲ得ヌ又歐文五語未滿ノ料金ヲ前納スルコトヲ得ヌ

第三百十二條 返信ノ爲メ前納スル料金ハ通貨ヲ以テスルモ妨ケナシ

但着信局ニ於テハ此料金ニ當ル電信切手ヲ以テ電報ト共ニ受信人ニ交付スヘシ

第百十三條 返信料前納ノ電報ヲ受信人ニ交付スルコト能ハス又ハ受信人ニ於テ返信料ヲ受領スルコトヲ拒ムトキハ其旨ヲ着信局ヨリ電報ヲ以テ發信局ヲ經テ發信人ニ報知シ其報知ノ電報ハ返信ノ代ト看做シテ前納シタル金額ヲ收入スヘシ但和文一音信以上歐文五語以上ノ料金ヲ前納シタルモノハ一音信若クハ五語分ヲ納メテ其餘ハ發信人ニ還付スヘシ

第百十四條 返信料前納ノ電報ヲ郵便ニテ送達スルトキハ着信局ニ於テ電信切手ヲ電報ト共ニ封入シ書留郵便ヲ以テ遞送スヘシ

第百十五條 前條ノ場合ニ於テハ返信料前納ノ零符號ノ次ニ書留郵便ノ零符號ヲ記スヘシ

第百十六條 返信料前納電報ノ受信人ヨリ發スル返信ハ何時何地方ニテモ隨意ニ之ヲ送ルコトヲ得

第十二章 尋問改正

第百十七條 條例第四十三條第四十四條ニ依リ既送現送ノ電報ニ關シ發信人又ハ受信人ノ依頼ニ依リ傳送スル電報ハ其種類ニ依リ取

扱フモ之ヲ往復スルニハ局名ヲ以テスルモノトス

第十三章 原信正寫

第百拾八條 原信ノ正寫ニハ其手數料ニ當ル電信切手ヲ貼付シ且消印シテ交付スヘシ

第三節 電信切手發行

明治十八年五月七日第八號布達

電信切手十種別紙見本ノ通發行ス

右布達候事 (見本畧ス)

第四節 壹岐對馬及朝鮮國ニ發着スル電報料并

ニ海外電報ノ國內傳送料

明治十八年五月七日第九號布達

壹岐對馬及朝鮮國ニ發着スル電報ノ料金并海外電報ノ國內傳送料金別紙ノ通相定ム

別紙

一 壹岐對馬及朝鮮國ニ發スル電報一音信ノ料金左ノ如シ

電信切手發行○壹岐對馬及朝鮮ニ發着スル電報料并ニ海外電報ノ國內傳送料 三十九

	內地各分局	正貨三拾錢	嚴原分局	正貨五拾錢	釜山分局	正貨六拾錢
	長崎分局	正貨貳拾錢	正貨四拾錢	正貨五拾錢		
	郷ノ浦分局		正貨廿五錢	正貨五拾錢		
嚴原分局				正貨三拾錢		

一 壹岐對馬及朝鮮國ニ發着スル電報ハ和文片假名七字歐文ハ一語ヲ以テ一音信トス片假名七字ニ滿タサルモノ亦同シ

一 壹岐對馬及朝鮮國ニ發着スル電報和文ハ受信人ノ住所氏名ヲ字數ニ算入セス歐文ハ發信人受信人ノ住所氏名共ニ字數ニ算入ス

一 前三項ノ外日本朝鮮兩國間ノ電報ハ總テ電信萬國條約書ニ依テ取扱フモノトス

一 海外電報ニ日本語ニ用フルトキハ羅馬字ヲ以テ書載スヘシ

一 海外電報ノ國內壹岐對馬ヲ除ク傳送料金ハ何地ヨリ發スルヲ間ハス一語毎ニ正貨貳拾錢トス長崎以外ノ傳送料金ハ海外各國ニ於テ定ムル所

ニ依ル

一 壹岐對馬及朝鮮國釜山浦ヨリ海外ニ發スル電報長崎迄一語ノ料金左ノ如シ

郷ノ浦長崎間	正貨三拾錢	嚴原長崎間	正貨六拾錢
釜山長崎間	正貨六拾錢		

其餘ハ海外電信料表ニ依リ收ムヘシ

第五節 電信切手買戻ヲ爲スヘキ電信分局

明治十八年五月十五日工部省第拾七號公示

電信條例第二十五條第二十六條ニ依リ電信切手ノ買戻ヲ爲ス可キ分局ハ當分左ノ拾八箇所トス

- 西京電信分局
- 長崎電信分局
- 名古屋電信分局
- 德嶋電信分局
- 赤間電信分局
- 仙臺電信分局
- 神戶電信分局
- 函館電信分局
- 廣嶋電信分局
- 高知電信分局
- 金澤電信分局
- 札幌電信分局
- 橫濱電信分局
- 新潟電信分局
- 鹿兒嶋電信分局
- 松江電信分局
- 秋田電信分局
- 根室電信分局

電信切手買戻ヲ爲スヘキ電信分局(註)出札

右告示候事

第二章 醬油
第一節 醬油稅則

明治十八年五月八日第拾號布告

醬油稅則別紙ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但東京府管轄伊豆七島小笠原嶋函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分
之ヲ施行セス

右奉 勅旨布告候事

(別紙)

醬油稅則

○罰例

第貳拾四條 第一條ニ
違ヒ免許鑑札ヲ受ケ
スシテ醬油ヲ製造シ
タル者ハ五圓以上五
拾圓以下ノ罰金ニ處

○稅則

第壹條 凡ソ醬油溜リヲ併稱スヲ製造シテ營業セント欲ス
ル者ハ其旨管轄廳ニ願出製造場一箇所毎ニ免許
鑑札ヲ受クヘシ
第貳條 免許ヲ受ケタル者ハ左ノ通營業稅及ヒ造
石稅ヲ納ムヘシ

シ仍ホ現在ノ醬油及
ヒ製造器械ヲ沒收ス

既ニ賣捌キタル者ハ
其代金ヲ追徵ス第二

十條ニ違ヒ卸賣人小

賣人ニ於テ醬油ヲ製
造シタル者亦本條ニ

據リ處分ス

第貳十五條 醬油ヲ隱

蔽シタル者ハ製成ト

未製成トニ拘ハラズ

其石數ニ相當スル造

石稅三倍ノ罰金ニ處

シ仍ホ其犯罪ニ係ル

醬油及ヒ容器ヲ沒收

ス既ニ賣捌キタル者

ハ其代金ヲ追徵ス但

營業稅 製造場一箇所ニ付一箇年金五圓
造石稅 製造高一石ニ付 金壹圓

第三條 免許鑑札ヲ失却毀損スルカ或ハ代替改名
轉居セシトキハ管廳ニ届出其再渡又ハ書換ヲ請
フヘシ

第四條 醬油製造人廢業スルトキハ管廳ニ届出免
許鑑札ヲ還納スヘシ

第五條 免許鑑札ハ貸借賣買及ヒ讓受讓渡ヲ爲ス
コトヲ得ス

第六條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分チ前半年分ハ
其年一月三十一日限後半年分ハ同ク七月三十一

日限之ヲ納ムヘシ但新ニ開業スル者ハ免許鑑札
ヲ受クルトキ其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

第七條 造石稅ハ左ノ期限ニ從ヒ之ヲ納ムヘシ但
廢業スル者ハ其節之ヲ納ムヘシ

第一期 五月三十一日限
一月一日ヨリ四月中檢査濟石數ニ係ル稅額

検査既済ノ醬油ト檢査未済ノ醬油トヲ混和シテ隠蔽シタル者ハ其總石數ニ就テ論ス

第二期 九月三十日限
五月一日ヨリ八月中檢査済石數ニ係ル稅額
第三期 翌年一月三十一日限
九月一日ヨリ十二月中檢査済石數ニ係ル稅額

第貳十六條 第八條第九條第十條ノ檢査ヲ受ケスシテ醬油ヲ賣

第八條 醬油ハ製成ノ後五日以内ニ管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ

捌貸渡讓渡又ハ自用シタル者ハ其造石稅ノ三倍ニ相當スル罰金ニ處シ仍ホ其代金ヲ追徴ス

第九條 廢業ノ際未製成ノ醬油ヲ所持スル者ハ其節管廳ニ届出檢査ヲ受ケ其石數ニ就キ納稅スヘシ但之ヲ同業者ニ賣渡シ又ハ二箇所以上ニ於テ製造スル者共一箇所以上ヲ廢シ尙ホ存スル所ノ製造場ニ之ヲ移ス者ハ其旨届出製成ノ上其製成者ニ於テ第八條ニ從ヒ檢査ヲ受クヘシ

第貳十七條 第十八條ニ違ヒ他ノ依托ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ製造場ヲ貸シタル

第十條 檢査未済ノ醬油ト檢査既済ノ醬油トヲ混和スル者ハ其混和ノ日ヨリ五日以内ニ其旨管廳ニ届出更ニ總石數ヲ以テ檢査ヲ受ケ納稅スヘシ

第十壹條 檢査既済ノ醬油其造石稅納期內ニ非常

ノ損害ニ罹リテ廢棄ニ屬シ若クハ腐敗シタルトキハ直ニ管廳ニ申出檢査ヲ受ケ該造石稅ノ免除ヲ請フコトヲ得

者又ハ第二十一條ノ制限ヲ超ヘテ醬油ヲ製造シタル者ハ三圓以上三拾圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其醬油及ヒ容器ヲ沒收ス

第十貳條 外國ニ輸出スル醬油ハ輸出ノ節稅關ニ於テ檢査ヲ受ケ置輸入港稅關ノ陸揚免狀若クハ其他ノ證據ト爲ルヘキ書類ニ在留領事ノ檢印ヲ受ケ之ヲ當初輸出ノ稅關ニ差出シ其造石稅ニ相當スル金額ノ下戻ヲ請フコトヲ得但造石稅ノ下戻ヲ受ケタル醬油ヲ再輸入シタルトキハ更ニ其金額ヲ納ムヘシ

第貳十八條 第五條ニ違ヒ免許鑑札ヲ賣買

貸借及ヒ讓受讓渡シタル者第十三條ニ違ヒ帳簿ヲ調製セス若クハ帳簿ノ登記ヲ詐リタル者第十四條ニ違ヒ檢査ヲ受ケスシ

第十三條 醬油製造人ハ左ノ帳簿ヲ調製スヘシ
醬油製造原品買入帳
醬油仕込帳
醬油賣上帳

テ容器ヲ使用シタル者又ハ第十五條ニ違ヒ開封ヲ爲シタル者

第十四條 醬油製造用ノ容器ハ使用以前管廳ニ届出檢査ヲ受クヘシ
第十五條 醬油摺リ器械ニハ主任官ノ封緘ヲ受ク

ハ二圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第貳十九條 第三條第

四條第八條第九條第十條第十五條但書第十六條又ハ第十七條ノ届出ヲ怠リタル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第三十條 此規則ヲ犯

シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第三十壹條 醬油製造

人ノ家族雇人ニシテ

置使用スルトキハ其旨申出開封ヲ請フヘシ但過誤等ニテ封緘ヲ毀損シタルトキハ直ニ管廳ニ届出更ニ封緘ヲ請フヘシ

第十六條 醬油製造人ハ毎年一月三十一日迄ニ其年製造見込ノ石數並ニ其製造方法ヲ管廳ニ届出ヘシ新ニ開業セシ者ハ免許ヲ受ケタル翌日ヨリ十五日以内ニ之ヲ届出ヘシ但見込石數ノ増減並ニ製造方法ノ變換ハ其時々届出ヘシ

第十七條 醬油製造ニ屬スル倉庫納屋并ニ諸器械ハ營業免許ヲ受ケタルトキ直ニ之ヲ管廳ニ届出ヘシ但増減ハ其時々届出ヘシ

第十八條 醬油製造人ハ他ノ依托ヲ受ケテ醬油ヲ代造シ又ハ同業者ニ非サル者ニ醬油ヲ製造スル爲メ製造場ヲ貸スコトヲ許サス

第十九條 醬油製造人ハ自家用料ニ充ル醬油ト雖モ此規則ニ從ヒ檢査ヲ受ケ其造石稅ヲ納ムヘシ
第二十條 醬油卸賣又ハ小賣ヲ以テ營業トスル者

其營業ニ係リ此規則

ヲ犯シタルトキハ其

營業者ヲ處罰ス

ハ自家用料ノ醬油ヲ製造スルコトヲ得ス

第二十一條 醬油營業人ニ非スシテ自家用料ノ醬

油ヲ製造スル者ハ同居ノ家族雇人一人ニ付一個

年壹斗五升ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ス

第二十二條 醬油製造人ノ醬油仕込高並ニ仕込ニ屬スル豆麥其他ノ

原品及ヒ營業ニ關スル諸帳簿ハ主任官隨時之ヲ檢査スルコトアル

ヘシ

第二十三條 主任官ニ於テ此規則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料

スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但其主任タルノ證憑ヲ携帯スヘシ

第二十四條ヨリ第三十一條迄上段ニ在

第二節 醬油稅則取扱心得

明治十八年五月十八日大藏省第二十二號府縣(函館沖繩) 稅根(宇野)ヲ除クノ達

本年五月第十號ヲ以テ醬油稅則公布相成候ニ付右稅則取扱心得書別冊之通定ム

但別冊ハ主稅局ヨリ送付スヘシ
右和達候事

醬油稅則取扱心得○醬油稅則施行以前製造着手ノ者課稅ノ件 四十七

第三節 醬油稅則施行以前製造着手ノ者課稅ノ件

明治十八年五月十六日達第二十三號府縣(函館沖繩札幌根室ヲ除ク)ノ達今般第拾號ヲ以テ醬油稅則公布來ル七月一日ヨリ施行相成候ニ付テハ六月三十日迄ニ製成濟ノ者ハ其石數ヲ取調テクベシ尤施行以前製造着手ノ者ニシテ七月一日以後製成スル分ハ課稅スヘキニ付豫テ其膠石數ヲ査定シテシベシ

右相達候事

第四節 未製成ノ醬油賣渡ノ件

千葉縣(報電) 十八年六月十一日

廢業ニ非スシテ未製成ノ醬油ヲ他ニ賣渡スハ苦シカラスヤ

大藏省指令(報電) 同年六月十七日

相成ラス

第三章 菓子

第一節 菓子稅則

明治十八年五月八日第十二號布告

菓子稅則別紙ノ通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但東京府管轄伊豆七嶋小笠原嶋函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分之ヲ施行セス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

菓子稅則

○罰例

第十七條 第二條ニ違 第壹條 菓子營業者ヲ分テ左ノ三種トス

ヒ營業鑑札ヲ受ケス 菓子製造人 菓子ヲ製造シ之ヲ菓子營業者ニ賣

シテ菓子營業ヲ爲シ 渡ス者ヲ云フ

タル者ハ五圓以上五 菓子卸賣人 菓子ヲ買入レ之ヲ菓子營業者ニ賣

拾圓以下ノ罰金ニ處 渡ス者ヲ云フ

シ仍ホ現在ノ菓子及 菓子小賣人 菓子ヲ需用人ニ賣渡ス者ヲ云フ

ヒ製造器械ヲ沒収ス 第貳條 菓子營業ヲ爲サントスル者ハ管廳ニ願出

既ニ賣捌キタル者ハ 營業鑑札ヲ受クヘシ但一人ニテ二箇所以上ノ營

業場ヲ設クル者又ハ二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者

其代金ヲ追徴ス 各別ニ營業鑑札ヲ受クヘシ

第十八條 第十二條第 第三條 菓子營業者自己又ハ家族雇人ヲ以テ仕入

十三條ノ屆書又ハ第

未製成ノ醬油賣渡ノ件 ○菓子稅則

十四條ノ帳簿ニ詐偽ノ記載ヲ爲シタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

又ハ出賣ヲ爲サントスルトキハ管廳ニ願出仕入鑑札又ハ出賣鑑札ヲ受ケ各自之ヲ携帶スヘシ
第四條 鑑札ヲ受クルトキハ左ノ鑑札料ヲ納ムヘシ

第十九條 第三條ニ違

營業鑑札料 一枚ニ付金貳拾錢

ヒ鑑札ヲ携帶セシメテ仕入又ハ出賣ヲ爲

仕入鑑札料 一枚ニ付金拾錢

シタル者及ヒ第七條

出賣鑑札料 一枚ニ付金拾錢

ニ違ヒ鑑札ヲ貸借賣

第五條 鑑札ヲ失却毀損シ又ハ代替改名轉居セシトキハ管廳ニ届出共再渡又ハ書換ヲ請フヘシ但

買又ハ讓受讓渡シタ

前條ノ鑑札料ヲ納ムヘシ

ル者ハ貳圓以上貳拾

第六條 菓子營業者廢業スルトキハ管廳ニ届出鑑

圓以下ノ罰金ニ處ス

札ヲ還納スヘシ

第二十條 第五條第六

第七條 鑑札ハ貸借賣買又ハ讓受讓渡ヲ爲スコト

條第十二條第十三條

ヲ得ス

ノ届出ヲ怠リタル者

第八條 菓子營業者ハ左ノ區別ニ從ヒ營業稅ヲ納

及ヒ第十四條ノ帳簿

ムヘシ但二種以上ノ營業ヲ兼ヌル者ハ其稅額ノ

ニ記載ヲ怠リタル者

多キモノニ就キ納稅スヘシ

製造營業稅

ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

雇人十人以上アル者 一箇年 金貳拾圓

雇人六人以上アル者 一箇年 金拾五圓

雇人三人以上アル者 一箇年 金拾圓

雇人二人以下アル者 一箇年 金五圓

雇人ナキ者 一箇年 金壹圓

卸賣營業稅

雇人十人以上アル者 一箇年 金貳拾圓

雇人六人以上アル者 一箇年 金拾五圓

雇人三人以上アル者 一箇年 金拾圓

雇人二人以下アル者 一箇年 金五圓

雇人ナキ者 一箇年 金壹圓

小賣營業稅

雇人三人以上アル者 一箇年 金七圓

雇人二人以下アル者 一箇年 金三圓

雇人ナキ者 一箇年 金壹圓

二種以上ヲ兼タル營業者ノ雇人ハ各種ヲ別タス之ヲ合算スルモノト

ス

露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其營業稅ヲ免除ス

第九條 營業稅ハ一箇年ヲ二期ニ分テ前半分ハ其年一月三十一日限後半分ハ同ク七月三十一日限之ヲ納ムヘシ但新ニ開業スル者ハ營業鑑札ヲ受クルトキ其半年分ノ營業稅ヲ納ムヘシ

第十條 營業稅前半分ハ其年一月一日後半分ハ同ク七月一日ノ雇人ノ現員又新ニ開業スル者ハ其營業鑑札ヲ受クルトキノ現員ニ據リ定ムヘシ但雇人増加シタルトキハ該期ノ増稅ヲ納ムヘシ

第十壹條 菓子製造人ハ製造稅トシテ菓子賣上金高百分ノ五ヲ左ノ期限ニ從ヒ納ムヘシ

第一期	一月一日ヨリ六月三十日	其年八月三十一日限
第二期	七月一日ヨリ十二月三十一日	翌年二月二十八日限

半年分ノ賣上金高三拾圓未滿ノ者及ヒ露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ其製造稅ヲ免除ス

第十貳條 菓子營業者ハ毎年一月一日七月一日現在雇人ノ員數氏名ヲ取調其月十五日限又新ニ開業スル者ハ出願ノトキ管廳ニ届出ヘシ但増員アルトキハ其時々之ヲ届出ヘシ

第十三條 菓子製造人ハ毎年其製造高及ヒ賣上金高ヲ左ノ通管廳ニ届出ヘシ但露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ此限ニアラス

一月一日ヨリ六月三十日迄ノ分 其年七月十五日限
七月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ分 翌年一月十五日限

第十四條 菓子製造人ハ菓子并ニ其製造原品ノ賣買ヲ帳簿ニ記載シ置ヘシ但露店又ハ呼賣ヲ業ト爲ス者ハ此限ニアラス

第十五條 菓子營業者ノ帳簿倉庫營業物品ハ主任官隨時之ヲ檢査スルコトアルヘシ

第十六條 主任官ニ於テ此規則ニ關シ犯罪アリト認知シ又ハ思料スルトキハ其場所ニ立入り證憑取調ノ處分ヲ爲スコトヲ得但其主任タルノ證票ヲ携帶スヘシ

第十七條 ヨリ第二拾二條マテ上段ニ在リ

第二節 菓子稅則取扱心得

明治十八年五月十六日達第二十四號府 函館沖繩札幌
本年五月第十一號布告ヲ以テ菓子稅則被定候ニ付取扱心得書別冊之
通相定ム

但別冊ハ主稅局ヨリ送付スベシ

菓子稅則取扱心得○西洋菓子小賣ノ件○稅則雇人ト稱
シ及器械沒収并煎餅團子餅類等菓子範圍外ノ件

右相達候事

第三節 西洋菓子卸小賣ノ件

高知縣伺(報)十八年五月十八日

西洋菓子ノ卸小賣ヲ爲ス者ハ菓子税則ニ據リ課税スヘキモノナルヤ
大藏省指令(報)同年廿六日
申出ノ通心得ヘシ

第四節 税則ノ雇人ト稱シ及器械沒收並煎餅

團子餅類等菓子範圍外ノ件

東京府伺 十八年五月廿八日

一 税則第八條ニ掲タル菓子營業者ノ雇人ハ菓子製造及ヒ仕入出賣店
賣等ニ從事スル者ニ限ラス一家総テノ雇人(炊飯裁縫等ニ使役スル
者共)ヲ指タルモノニ有之候哉果シテ然ラハ菓子營業者ニシテ他ノ
營業ヲ兼ルモノハ其雇人中菓子一途ニ從事スル者ト他ノ營業ニ從
事スルモノトハ自カラ區別アルヘシト雖モ同ク一家ノ雇人タレハ
是レハ菓子營業ノ一方ヨリ視ル時ハ殆ト分別シ難シ况ンヤ炊飯等
ノ雜事ニ使役スルモノハ誠ニ其限界ヲ定メ兼候如斯モノハ區別ハ
如何相心得可然哉

一 税則第十七條ニ製造器械ヲ沒收ストアリ然ルニ製造器械員數届出
ノ明文無キヲ以テ實際處分ノ場合ニ臨ミ其區別ハ検査員ノ認定ニ
有之儀ト相心得可然哉

一 左記品目ノ如キモ菓子ノ範圍内ニ有之候哉

- 煎餅類 鹽煎餅 八ツ橋煎餅 北占煎餅 餡類 菓子類 醬油菓子 餡菓子
- 餅類 葛餅 阿波餅 大々餅 萩餅 麵包類 餡パン 菓子パン 砂糖豆類 源氏豆 南京豆
- 糖 紅梅燒 氷菓子 アイスクリ 白玉 トコロテン 吹寄類 輕燒 カリン
- 砂糖煎金時 揚ケ餅 切り揚 氷砂糖 砂糖 果物 菌 蔬菜ノ類ヲ乾燥シテ砂
- シッコ細工 文珠麩干柿

大藏省指令 同年六月四日

伺之趣左ノ通可相心得候事

第一項 税則ノ雇人トハ菓子ノ製造其他菓子業ニ從事スルモノヲ
指ス故ニ菓子業ニ從事セスシテ專ラ他ノ業務ヲ執ルモノハ算入
セサルモノトス但シ附籍寄留ノ者其他手傳等ノ名義ヲ以テスル
モノト雖モ雇人同様ノ業務ヲ執ルモノハ總テ算入スルモノトス
第二項 菓子製造ノ用ニ供シタルモノハ沒收スルモノトス

呼賣出賣指稱ノ件○出賣露店又ハ呼賣ト稱スルモノ及ヒ 五十五
六月以前製造菓子課税ノ件

第三項 鹽煎餅餡汁子(櫻中汁子) 團子類餅類(葛餅櫻餅大福餅ノ類ニシテ) 食麵
包水砂糖白玉心(トコロ) 寒天(甘露糖) 切リ揚真粉細工干柿氷菓子砂糖漬ノ
内糖汁ニ浸シタルモノ、類ハ菓子ノ範圍外トス

第五節 呼賣出賣指稱ノ件

石川縣伺 十八年五月廿八日

税則中呼賣トハ路頭ヲ徘徊スルモ出賣トハ家々へ立寄り又ハ小賣露
店等へ賣捌クモノヲ指稱スヘキヤ

大藏省指令 同年六月八日

伺之趣呼賣トハ店舗ヲ設ケス専ラ需用人ニ賣歩クモノ出賣トハ定リ
タル店舗ヨリ他ニ派出シテ同業者又ハ需用人ニ販賣スル儀ト可相心
得事

第六節 出賣露店又ハ呼賣ト稱スルモノ及ヒ六

月以前製造菓子課税ノ件

椽木縣伺 十八年五月廿六日

第一條 税則第八條第三項ニ露店又ハ呼賣ヲ業ト爲スモノハ其營業
税ヲ免除ストアリ右呼賣トハ路上ヲ發聲行商スルモノヲ指稱スル

ヤ也夕單ニ需求者ノ家宅ニ臨ミ販賣スル行商モ呼賣ト併稱スヘキヤ
第二條 家屋外へ戸板或ハ椽臺等ヲ置キ菓子類ヲ販賣スルモノハ露
店ト同視スヘキヤ

第三條 本年六月三十日以前製造ノ菓子モ七月一日以後ノ販賣ニ係
ルモノハ無論賣上金高ニ組込納税セシムヘキヤ

大藏省指令 同年六月八日

第一條 後段申出ノ通

第二條 申出ノ通

但自家軒下ニ於テスルモノハ此限ニアラス

第三條 申出ノ通

第七節 菓子原質品買入及自家ニテ仕入ヲ爲

スモノ鑑札ノ件

静岡縣伺(電) 十八年六月五日

菓子製造人原質品買入及ヒ自製ノ菓子小賣スルモノハ仕入鑑札ヲ受
クルニ及ハスヤ

大藏省指令(電) 同年六月十日

菓子原質品買入又ハ自家ニテ仕入ヲナス者ハ仕入鑑札ヲ要セス

菓子原質品買入及自家ニテ仕入ヲ爲ス者鑑札ノ件○雇人ニハ職人モ包含シ露店呼賣ハ一家
一人ニ限ラス及ヒ露店呼賣課税并ニ他ノ營業ヲ兼ヌル者雇人課税ノ件 五十七

第八節 雇人ニハ職人モ包含シ露店賣呼ハ一

家一人ニ限ラズ及ヒ露店呼賣課税并

ニ他ノ營業ヲ兼ヌル者雇人課税ノ件

神奈川縣伺(錄)十八年五月十八日

第五條 稅則第八條ニ掲クル雇人トハ其家ニ戶籍ヲ入レ又ハ寄留スルモノニ止ラス一時雇俗ニ渡リ職人ト云フノ者モ含有スルノ義ナルヤ

第六條 露店又ハ呼賣ヲ業トスル爲ス者トハ自ラ製造シ又ハ製造者ヨリ買受自己又ハ家族ヲ以テ營業ニ從事シ自家店頭ノ營業ヲナサス要スルニ微々ナル業體ノ者ヲ指スノ意義ニ候哉果シテ然ラハ別ニ出賣鑑札ヲ下付セス(仕入鑑札ヲ下付スルハ勿論)營業鑑札ヲ携帶セシムルモノニシテ其業體一家一人ニ止マルモノニ候哉

但本文ニ據レハ本人ニ代リ其鑑札ヲ以テ家族一時營業ヲ助クル場合アルモ苦シカラヌヤ

第七條 露店呼賣者ト事實ヲ同フスルモ自家ニテモ營業ヲナス上ハ出賣者トシテ賣上高ヲ合算シ課税スルハ勿論ナルヤ

第八條 菓子營業ト他ノ營業ヲ兼ヌル者ニシテ一店內區域ヲ異ニセス雇人ヲ區別セサルモノハ其總員ニ就キ課税シ一店内ト雖モ

自ラ區域ヲ異ニシ雇人ノ正別アルモノハ之ヲ分別シ課税スヘキヤ

大藏省指令 同年六月九日

第五條第七條申出ノ通

第六條 露店又ハ呼賣ヲ業トスルモノハ一家一人ニ限ラス營業各人

ニ其鑑札ヲ下付スヘシ但家族ノ者露店又ハ呼賣先ニ於テ其業ヲ助クルハ苦シカラヌ

第八條 雇人ハ申出ノ通

但店内ノ區域ヲ異ニスルト否トニ關セス

第九節 子弟ヲシテ呼賣ヲ爲サシムル者及ヒ露店呼賣ヲ兼ヌル者鑑札下附ノ件

鹿兒嶋縣伺(電)十八年六月九日

菓子露店ノ者子弟ヲシテ呼賣ヲ爲スモノハ出賣鑑札ヲ下付シ又一人ニシテ露店呼賣ヲ兼ル者ハ營業鑑札二枚下付スヘキヤ

大藏省指令 同年六月十三日

露店營業ノ者子弟ヲシテ呼賣ヲ爲サシムル者ハ更ニ其子弟ニ呼賣ノ

子弟ヲシテ呼賣ヲ爲サシムル者及ヒ露店呼賣ヲ兼ヌル者鑑札下附ノ件○專賣特許條例 五十九

鑑札ヲ下付シ出賣鑑札ヲ下付スルノ限ニアラス又露店業ノ者呼賣ヲ兼ヌルキハ鑑札ニ露店呼賣ト列記シ二枚ヲ下付スルニ及ハス

第四章 專賣

第一節 專賣特許條例

明治十八年四月十八日第七號布告

專賣特許條例別冊之通制定シ明治十八年七月一日ヨリ施行ス

但明治四年四月七日布告專賣零規則及明治五年(三月)第百五號布告

ハ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

(別冊)

專賣特許條例

○罰例

第二十條 專賣特許ノ發明品ヲ偽造シ若クハ外國ヨリ輸入シ又ハ專賣特許ノ方法ヲ

○條例

第一條 有益ノ事物ヲ發明シテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ農商務卿ニ願出其特許ヲ受クヘシ農商務卿ハ其專賣ヲ特許スヘキモノト認ムルトキハ專賣特許證ヲ下付スヘシ

鑄用シタル者ハ一月第二條 專賣特許ヲ願出ルニハ其願書ニ發明ノ明

以上一年以下ノ重禁細書并必要ノ圖面ヲ添フヘシ但時宜ニ依リ其現

錮ニ處シ四圓以上四品又ハ雛形ヲ差出サシムルコトアルヘシ

拾圓以下ノ罰金ヲ附第三條 專賣特許ノ年限ハ專賣特許證ノ日附ヨリ

加ス起算シ十五年ヲ起ユルコトヲ得ス

第二十一條 專賣特許第四條 左ノ諸項ニ觸ルモノハ專賣特許ヲ願出

ルコトヲ得ス

一 他人ノ既ニ發明シタルモノ但他人ヨリ讓受

ケタルモノハ此限ニアラス

二 專賣特許願出以前公ニ用ヒラレ又ハ公ニ知

ラレタルモノ

三 治安風俗健康ヲ害スヘキモノ

四 醫藥

第五條 軍用ニ必要ナリト認メ又ハ廣ク用ヒシム

ルコトヲ必要ナリト認ムル發明ニハ農商務卿ニ

於テ專賣特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタルモノト

雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ

第二十二條 第二十條
第二十一條ノ犯罪ニ

ノ罰金ヲ附加ス

專賣特許條例

係ル物品ヲ情ヲ知テ
販賣シタル者ハ四圓
以上四十圓以下ノ罰
金ニ處ス

第二十三條 第二十條
第二十一條 第二十二
條ノ場合ニ於テハ其
物品及犯罪ノ用ニ供
シタル物件ヲ沒收シ
テ專賣人ニ給付シ其
既ニ賣却キタルモノ
ハ代價ヲ追徴シテ之
ヲ給付ス

第二十四條 詐偽ノ所
爲ヲ以テ專賣特許ヲ
受ク又ハ專賣特許ヲ
僞稱シタル者ハ十五
圓ノ罰金ニ處ス

前項ノ場合ニ於テハ農商務卿ニ於テ相當ト認ム
ル報酬金ヲ其發明者ニ下付スヘシ

第六條 專賣特許ヲ願出ルノ權及專賣ノ權ハ相續
者ニ傳ハルヘキモノトス

相續者ニ於テ專賣ノ權ヲ相續シタルトキハ三ヶ
月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第七條 專賣ノ權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントス
ルトキハ農商務卿ニ願出ヘシ

第八條 專賣人其發明ヲ改良シタルトキハ追加專
賣特許ヲ願出ルコトヲ得但追加特許ハ原專賣特
許ノ年限ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條 專賣人ノ發明ヲ改良シテ專賣特許ヲ得ン
ト欲スル者ハ專賣人ノ承諾ヲ經ヘシ

專賣人其承諾ヲ拒ミ農商務卿ニ於テ改良ニ妨ア
リト認ムルトキハ其發明ヲ改良ノ部分ト合セテ
使用スルノ特許ヲ改良者ニ與フルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ農商務卿ニ於テ相當ト認ム

日以上六月以下ノ重
禁錮ニ處シ貳圓以上
貳拾圓以下ノ罰金ヲ
附加ス

第二十五條 第六條第
二項第十二條ノ届出
ヲ其期限内ニ爲サ、
ル者ハ壹圓以上壹圓
九拾五錢以下ノ料料
ニ處ス

第二十六條 此條例ヲ
犯シタル者ニハ刑法
ノ數罪具發ノ例ヲ用
ヒス

第二十七條 第二十條
第二十一條 第二十二
條ノ犯罪ハ專賣人ノ

ル報酬金ヲ改良者ヨリ專賣人ニ與ヘシムヘシ

第十條 專賣人ハ其發明品ニ專賣特許證ノ年月日
ヲ標記スヘシ品柄ニ由リ標記スルコトヲ得サルモ
ノハ其上包等ニ標記スヘシ

第十一條 專賣人ノ名簿及發明ノ明細書圖面等ハ
農商務省ニ於テ衆庶ノ觀覽ニ供スヘシ

第十二條 專賣人轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタル
トキハ三ヶ月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第十三條 專賣特許證ヲ毀損遺失シタルトキハ其
再渡ヲ農商務卿ニ願出ヘシ

第十四條 左ノ場合ニ於テハ專賣特許無効ニ歸シ
其特許證ヲ返納セシムヘシ

一 第四條ノ諸項ニ觸レタルコトヲ發見シタル
トキ

二 願書并明細書圖面等ニ相違ノ事實アルコト
ヲ發見シタルトキ

第十五條 左ノ場合ニ於テハ專賣ノ權ヲ失フ

告詐ヲ待テ其罪ヲ論ス

第二十八條 專賣人告

訴ヲ爲シタルトキハ

裁判官ニ於テ假ニ其

告訴ニ係ル物品ノ發

賣ヲ停止スルヲ得

- 一 專賣特許證ノ日附ヨリ二年ヲ經テ其發明ヲ實施公行セス又ハ事故ヲ届出スシテ二年間之ヲ中止シタルトキ
- 二 專賣特許ノ發明品ヲ外國ヨリ輸入シテ之ヲ販賣シタルトキ

歸シタルトキ又ハ專賣ノ權ヲ失ヒタル者アルトキハ農商務省ヨリ

之ヲ廣告スヘシ

第十七條 專賣特許ノ願出ル者ハ左ノ免許料ヲ納ムヘシ但願書ヲ却

下スルトキハ之ヲ返付スヘシ

- 一 五年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金拾圓
 - 二 十年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金拾五圓
 - 三 十五年ノ專賣特許ヲ願出ル者 金貳拾圓
 - 四 讓與分與ヲ願出ル者 金五圓
 - 五 追加特許ヲ願出ル者 金五圓
 - 六 專賣特許證ノ再渡ヲ願出ル者 金壹圓
- 第十八條 專賣特許ノ事務ニ關スル官吏ハ專賣特許ヲ願出スルヲ却

得ス

第十九條 專賣人其專賣權ヲ侵サレタルトキハ之ヲ告訴シ并要償ノ

訴ヲ爲スコトヲ得但第十條ノ標記ヲ爲サハルトキハ要償ノ訴ヲ爲

スコトヲ得ス

(第二十條ヨリ第二十八條マテ上段ニ在リ)

附 則

明治四年四月七日專賣器規則布告以後本條例布告以前ニ發明シ明治五年三月第五號布告但書ニ依リ届出タル事物ニシテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ公ニ用ヒラレ公ニ知ラレタルモノト雖モ本條例施行ノ日ヨリ六月間ニ其專賣特許ヲ農商務卿ニ願出ルコトヲ得

本條例布告以前既ニ前項ノ發明ヲ使用シタル者ハ本條例施行ノ日ヨリ一ケ年間ニ其使用特許ヲ農商務卿ニ願出ルコトヲ得此場合ニ於テハ本條例第十七條專賣特許ノ免許料ト同一ノ金額ヲ納ムヘシ

第二節 社會公益最大ナル發明品及改良追加年限發明品外國ヨリ輸入發明品偽造并ニ詐偽ヲ以テ特許ヲ受クル等ノ件

諸發明偽造并ニ詐偽ヲ以テ特許ヲ受クルノ件

埼玉縣伺 十八年四月廿七日

今般第七號御布告專賣特許條例及第五號御布達專賣特許手續條項中
疑義ノ廉左ニ

一 條例第五條中ニ又ハ廣ク用ヒシムルコトヲ必用ナリト認ムル
發明ニハ農商務卿ニ於テ專賣特許ヲ與ヘス云々ト有之右ハ軍
用器ノミニ限ラス諸般ノ物件ニシテ社會公益ノ最モ大ナルモ
ノト公認セラル、モ惟リ發明者ニ專賣權ヲ附與スルキハ却テ
之カ擴充ヲ妨クルノ恐レナキ能ハサルヲ以テ發明者ニハ相當
ノ報酬金ヲ與ヘラレ而シテ該發明品ハ何人ヲ問ハス製造販賣
勝手ヲエシムヘキ御仕向ニ候哉

二 同第八條但書ニ追加特許ハ原專賣特許ノ年限ヲ超ユルコトヲ
得スルアルハ譬ヘハ其物件ニ改良ヲ加ヘテ追加專賣特許ヲ願
出ル時ハ其追加特許証ノ日付クヨリ起算シテ更ニ向フ何年特原
許五年ナレハ追加特許モ五年同十年ノ特許ヲ受ケ得ラル、義ニ候哉又ハ當
十五年ナレハ追加モ又十年十五年初十五年ノ特許ヲ得テ既二十年ヲ經過セシ後チ改良ヲ加ヘ願
加テ願出ルトキハ殘リ五年丈ケノ特許ニシテ其以上ヲ超ユル
コトヲ得サルノ意ニ候哉

三 同第十五條其二項ニ專賣特許ノ發明品ヲ外國ヨリ輸入シテ之
ヲ販賣云々トアルハ譬ヘハ何某ノ發明ヲ以テ專賣特許ヲ得タ
ル物品ト同一ノ物品外國ニ發明者アリテ齊シク其政府ノ專賣
特許ヲ得テ本邦ニ販賣シ來リテ之ヲ販賣スル者アルキハ右何某
ノ專賣權ハチノツカラ消滅ストノ意ニ候哉又ハ專賣特許ヲ得
シ發明品ヲ自カラ外國ニ遣リテ製造セシメ之ヲ輸入シテ販賣
セシコトノ發覺シタル時專賣ノ權ヲ剝奪セラル、トノ意ニ有
之候哉

四 同第二十條ニ專賣特許ノ發明品ヲ偽造シ若クハ外國ヨリ輸入
シ又ハ專賣特許ノ方法ヲ竊用シタル者ハ云々ト有之右發明品
ヲ偽造ストハ他人ノ專賣特許ヲ得タル發明品ヲ摸造シテ之ニ
發明者ノ姓名及ヒ特許ノ年月日年限等ヲ標記シタルモノ、謂
ヒニシテ外國ヨリ輸入ストハ他人ノ專賣特許ヲ受ケタル發明
品ヲ竊カニ外國ニ遣リテ造ラシメ之ヲ輸入販賣シ或ハ其輸入
品ヲ摸造トシテ製造販賣シ一方ヨリ專賣權ヲ侵サレタリトシ
テ告訴スルモノアルモ外國品摸造ノ口實ヲ以テスルカ如キ故
意ノ者ヲ指ス義ニ候哉將タ方法ヲ竊用ストハ例ヘハ專賣特許

諸發明品偽造并詐偽ヲ以テ特許ヲ受クルノ件

ヲ得タル發明品圓形ナレハ方形ニシテ木製ナレハ鐵製ニシテ
 形容ヲ殊ニスルマテニテ其實右發明者ノ考按意匠ヲ全用シタ
 ル者ヲ指ス義ニ候哉

五 同第二十四條ニ詐偽ノ所爲ヲ以テ專賣特許ヲ受ケ又ハ專賣特
 許ヲ偽稱シタル者ハ云々ト有之右詐偽ノ所爲云々トハ條例第
 二十條ノ事項ト類似ノ故意騙瞞ヲ以テ既ニ特許ヲ受タルモノ
 謂ヒニシテ偽稱云々トハ專賣特許ヲ得スシテ特許ノ名ヲ密
 用スルヲ指ス義ニ有之候哉

六 (特許手續ニ出ツ)

農商務省指令 同年五月二日

伺之趣左ノ通可相心得事

- 一 見解ノ通
- 二 後段見解ノ通
- 三 專賣人自ラ輸入シテ販賣スル場合ヲ指スモノトス
- 四 前二段見解ノ通後段ハ專賣特許ヲ得タル製造方法ノ如キ工術
 ヲ竊用シタルモノヲ指スモノトス
- 五 見解ノ通

第三節 專賣特許手續

明治十八年四月十六日第五號布達

今般專賣特許條例制定候ニ付專賣特許手續別紙之通相定ム
 右布達候事

(別紙)

專賣特許手續

- 第一條 專賣特許ニ關スル願書及ヒ届書ハ總テ地方廳ヲ經テ農商務
 務省ニ差出スヘシ
- 第二條 專賣特許ヲ願出ルトキハ壹個ノ發時ニ付願書二通明細書并
 圖面各三通ニ免許料ヲ添フヘシ
 二人以上協同シテ一個ノ發明ヲ爲シタルトキハ其願書及明細書等
 ニ連署スヘシ
- 第三條 明細書及圖面ハ願人ヨリ封緘シテ之ヲ差出シ地方廳ハ封緘
 ノ儘之ヲ農商務省ニ進達スヘシ
- 第四條 專賣特許願書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ
 - 一 發明ノ名稱
 - 二 專賣特許ノ年限

三 條例ニ抵触セサル旨
 四 願書明細書等ニ相違ナキ旨
 第五條 明細書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ
 一 發明ノ目的及性質ノ大體説明
 二 圖面ノ解説(圖面ヲ添フルトキハ)
 三 發明ノ製作構造組成及使用ノ方法等ニ關スル詳細ノ説明
 四 發明ノ區域
 五 發明人ノ族籍住所氏名
 第六條 圖面ニハ番號ヲ記シ其各部ニハ片假名又ハ數字ヲ付シテ明細書ノ説明ト符合セシムヘシ
 第七條 條例第七條ニ依リ專賣權ノ讓與又ハ分與ヲ願出ルトキハ願書ニ通ニ專賣特許證約定書寫及免許料ヲ添フヘシ
 第八條 條例第八條ニ依リ追加專賣特許ヲ願出ル者ハ第二條及ヒ第三條ノ手續ニ從フヘシ
 第九條 條例第九條第二項ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其理由ヲ詳記シタル願書ニ通ヲ差出スヘシ
 第十條 條例第六條第二項及第十二條氏名變換ノ届出ヲ爲ストキハ

農商務省ニ於テ專賣特許證ニ裏書ヲ爲スヘシ
 第十一條 條例第十三條ニ依リ專賣特許證ノ再渡ヲ願出ルトキハ其理由ヲ詳記シタル願書ニ免許料ヲ添フヘシ
 第十二條 專賣特許ヲ受ケタル者其願書明細書等ニ脱漏又ハ過誤アルコトヲ發見シテ之ヲ補足又ハ改正セント欲スルトキハ其理由ヲ詳記シタル願書ニ通ヲ差出スヘシ
 但其補足又ハ改正ノ爲メ發明ノ重要事項ニ變更ヲ生スルモノハ之ヲ願出ツルコトヲ得ス
 第十三條 專賣特許ヲ受ケタル者約束ヲ以テ他人ニ其發明ヲ使用セシムルトキハ雙方連署シテ之ヲ届出ヘシ
 第十四條 條例第四條第一項ニ觸レ專賣特許無効ニ歸シタル後先發明者更ニ專賣特許ヲ願出ルトキハ其年限ハ前專賣人ノ特許年限ヲ超ユヘカラス
 第十五條 附則第二項ニ依リ使用特許ヲ受ケント欲スル者ハ其來歴ヲ詳記シタル願書ニ通ヲ差出スヘシ
 ○明治十八年六月二十三日農商務省第廿六號府令ニ達
 本年第五號布達專賣特許ヲ手續ニ據リ當省ヘ差出スヘキ願書届書等

專賣特許手續○特許年限間他人ヲシテ製造販賣セシムル件 七十一

ハ當省工務局專賣特許所へ送達候儀ト可相心得此旨相達候事

第四節 特許年限間他人ヲシテ製造賣買セシムルノ件

埼玉縣伺 十八年四月廿七日

六 手續第十三條ニ專賣特許ヲ受ケタルモノ約束ヲ以テ他人ニ其發明ヲ使用セシムルトキハ雙方連署シテ之ヲ届出ヘシトアルハ專賣權ヲ有スルモノ自己ノ都合ニ依リ讓與分與ノ手續ニ依ラス特許年限中若干年間若クハ全期他人ヲシテ之ヲ製造及販賣セシムルコトヲ爲シ得ラル、トノ意ニ有之候哉
農商務省指令 同年五月二日
伺之趣左ノ通可相心得事
六 見解之通

第五節 專賣特許諸願書式及明細書文例

○明治十八年四月二十三日農商務省告示
專賣特許條例本年第七號ヲ以テ布告相成候ニ付右ニ關スル諸願書式及明細書文例左ノ通相定候條此旨告示候事

願書式

用紙美濃紙其上部曲尺壹寸程下部八分程横シ口壹寸五分程ヲ餘白ト爲シ字體明瞭ニ認ムルヲ要ス

第一 (一箇ノ發明者又ハ協同發明者又ハ他人ノ發明)ヲ讓受ケタル者ヨリ專賣特許ヲ願出ルトキ

專賣特許證

一何發明

右ハ私共ノ(何誰儀發明者何誰ヨリ讓受候)發明ニシテ從來世上ニ使用セラレサル(機械)(物品)(方法)ナルハ勿論一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(書面ヲ添フルトキ)ニ相違之廉無之段確信候間何箇年ヲ期限トシ專賣特許証御下付相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

何縣地名番號(居住)

族籍

業名

發明者 氏 名 印

又發明者二人ナルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名 印

同

年 月 日

專賣特許諸願書式及明細書文例

同 氏 名 印

又他人ノ發明ヲ讓受タルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名 印

同 氏 名 印

讓受人 氏 名 印

農商務卿殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年 月 日

何府知事 某 印

第二(相續者ヨリ專賣特許ヲ願出ルトキ)

一何發明

右ハ私亡父(亡兄)何誰發明ニ候處何年何月何日死亡致候ニ付今般家名

相續ノ廉ヲ以テ私受繼候右機械(物品)方法ノ從來世上ニ使用セラレサルハ勿論一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セシ事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間何々年々期限トシ專賣特許證御下附相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

故何之誰相續人

何府地名番地(居住)寄留

族籍

業名

氏 名 印

年 月 日

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年 月 日

何府知事 某 印

第三(追加專賣特許ヲ願出ルトキ)

追加專賣特許願

私(私共)所持罷在候何年何月何日付第何號專賣特許証ニ係ル發明ニ就キ今般改頁ヲ加ヘ候處一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間追加專賣特許證御下付相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府地名番號(居住)寄留

族籍

業名

年月日

農商務卿某殿

發明者

氏

名印

前書之通願出候ニ付進達候也

何府知事

某

印

第四(應與又ハ分與ヲ願出ルルキ)

專賣權分讓與願

一何年何月何日付第何號專賣特許證

一何發明

一發明者何之誰

一現所有主何之誰

右ハ今般別紙約定書寫之通何之誰ニ讓與(分與)致度依テ前記ノ專賣特許證並御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府地名番地居住

族籍

年月日

分讓與人

氏

名印

分讓肩書前同斷

分讓受人

氏

名印

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

何府知事

印

第五

專賣特許證紛失燒失ニ付再渡願

一何年何月何日付第何號專賣特許證

一何發明

一發明者何之誰

右專賣特許證ハ私所有ニ有之候處何年何月何日何地ニ於テ紛失(火災ニ罹リ燒失)(水難ニ遭ヒ流失)候ニ付再渡相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府地名番地居住

族籍

年月日

專賣特許證所有者

氏

名印

農商務卿某殿

專賣特許證書式及明細書文例

前書之通願出候ニ付進達候也

年 月 日

何府知事 某

印

第六(專賣特許願書明細書又ハ圖面ニ遺漏又ハ誤謬アルトキ其補足又ハ改正ヲ願出ルトキ)

專賣特許願書發明明細書圖面脱漏補足(誤謬改正)願

一何年何月何日付第何號專賣特許證

一何發明

一發明者何之誰

一現所有主何之誰

右專賣特許證ニ係ル願書(明細書圖面)中何々ノ遺漏(誤謬)有之候ニ付別紙之通補足(改正)致度尤之カ爲メ發明ノ重要事項ニ變更ヲ生スル儀無之ト確信候間此段奉願候也

何府地名番地 居住

族籍

業名

年 月 日

發明者(發明人死去)

又發明者存生ノトキハ左ノ如シ

氏

名 印

肩書前同斷

發明者 氏 名 印
現所有主 氏 名 印

農商務卿 某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年 月 日

何府知事 某

印

第七(專賣特許條例附則第一項ニ依リ專賣特許ヲ願出ルトキ)

專賣特許願

右ハ私共(明治何年何月發明致シ明治何年何月何日ヨリ使用致シ來リ候處一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實並圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間何箇年ヲ期限トシ專賣特許證御下付相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府地名番地 居住

族籍

業名

年 月 日

發明者

氏

名 印

又發明者二人ナルトキハ

肩書前同斷

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第八(專賣特許條例附則第二項ニヨリ使用ノ特許ヲ願出ルトキ)

使用特許願

一何發明

右ハ何之誰發明ノ(機械)(物品)(方法)ニシテ私儀營業ノ爲メ明治何年何月何日ヨリ之ヲ使用シ來候處今般右發明人何誰專賣權ヲ受候ニ付テハ何箇年ヲ期限トシ右發明使用ノ儀御許可相成度依テ御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府知事某

何縣地名番地(居住) 族籍

業名

氏名

名印

年月日

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第一(方法ノ發明ヲ記載スルトキ)

明細書

明細書文例 用紙美濃紙其上部曲尺一寸程下部八分程綴シロ一寸五分程ヲ繪白ト爲シ楷書若クハ行書ニテ明瞭ニ記載スルヲ要ス

何府知事某

印

煤氣精製ノ改良法

煤氣ヲ精製スルニ當リ其容積ヲ著シク減少セシテ其瞭力ヲ増進スルヲ得ヘキ新奇有益ノ改良法ヲ發明セリ之ヲ左ニ明解ス
從來煤氣ヲ精製スルノ方法ハ煤氣ヲシテ獸炭中ヲ通過セシムルニアリト雖モ單ニ獸炭ノミヲ使用スルトキハ暫時ヲ經ルノ後汚物ヲ吸収スルノ力ヲ耗失スルカ故ニ蒸氣若クハ水ヲ以テ獸炭ヲ洗滌スルカ或ハ煤氣ト共ニ大氣ヲ通過スルカ然ラズンハ熱ヲ以テ獸炭ヲ再調セサレヘカラス而シテ單ニ獸炭ノミヲ使用スルルハ畜ニ煤氣ノ照力ヲ減殺スルノミナラス其容積ヲモ亦減少スルノ憂ヲ免レヌ
此改良法ノ目的ハ煤氣ノ照力ヲ減殺セシテ其容積ヲモ亦著シク減少セシテ其操作法ニ間斷ナク且ツ煤氣ヲ充分ニ精製スルニアリ即チ其

專賣特許願書式及明細書文例

法ハ煤氣中ノ汚物ヲ除去スル力ヲ増加スレモ該氣中ノ照氣ヲ吸收セサル物體ヲ獸炭ニ混合シ大氣ト共ニ煤氣ヲシテ之ヲ通過セシムルモノトス

此發明ヲ實施スルニハ石炭「タール」若クハ該油ト水或ハ單ニ水ノミヲ以テ獸炭(新製ノモノ又ハ使用セシモノニテ可ナリ)ヲ浸潤シ之ヲ一器或ハ數器内ニ充填シ以テ之ヲ精製器トス若シ浸潤スルニ單ニ水ノミヲ以テセサルトキハ獸炭ヲ乾燥シテ充填スルモ亦可ナリ而シテ煤氣ヲ該精製器内ニ通過セシムルニ當リ蒸溜器若クハ本管ヨリ少量ノ大氣ヲ導入シ例ヘハ精製スル煤氣ノ容積一百分之十付十分ノ八内至二ト二分ノ一ノ比例ヲ以テ之ヲ煤氣ニ混合セシメ然ル後煤氣ヲ該器内ニ通過セシムルモノトス但シ大氣量煤氣中ニ於ケル汚物ノ多少ニ關係ス若シ大氣ヲシテ煤氣ト善ク混合セシメント欲セハ蒸溜器ト精製器ノ間ニ於ケル本管ノ一局部又ハ精製器ニ密接シタル處ニ於テ適宜ノ混合機ヲ裝置スヘシ水瓦斯ヲ精製スルノ際ニモ亦大氣ヲ該瓦斯中ニ導入スルトキハ單ニ水ノミヲ以テ浸潤セル獸炭ニテ可ナリ

此法ニ據ルハ大氣中酸素ト抱合シ終ニ可溶鹽類ヲ生シ其殘餘ハ全ク硫化水素及其他ノ含水素硫素複體ノ水素ト抱合シテ水ヲ生シ更ニ遊

離酸素ヲ殘留モス硫化水素及其他ノ硫素複體中ニ於ケル硫素ノ一部ハ遊離狀トナリテ獸炭中ニ沈澱シ窒素ノ一部ハ殘餘ノ水素ト抱合シ終ニ「アムモニヤ」鹽類ヲ生ス若シ窒素ハ精製シタル煤氣ト共ニ通過シ去ルコトアルモ甚タ僅少ナルヲ以テ更ニ害アルコトナシ

此ノ如ク大氣ヲ使用スルトキハ獸炭久シク其作用ヲ保存スルヲ以テ該操作法ハ常ニ間斷ナク施行スルヲ得ヘシ

最後ニ獸炭ノ吸收力ヲ失スルニ至リタルトキハ其有用ナル「アムモニヤ」鹽類ヲ含有スルヲ以テ之ヲ賣却スヘシ然ラズンハ勢ヲ以テ獸炭ヲ再調シ或ハ水ヲ以テ之ヲ洗滌シ而シテ適宜ノ溶劑ヲ以テ硫素ヲ分離シ再ヒ之ヲ使用スヘシ

石炭「タール」ヲ獸炭ニ混合スルニ因リ其煤氣中ノ生油氣及其他ノ照性重炭化水素ヲ吸收スルコトナシ

獸炭ヲ精製器ニ充填スルノ前若クハ後ニ於テ獸炭ヲ處理スルニ煤氣中ノ照氣ト相互ノ關係アル適宜ノ物體即チ該炭ニ交和シテ照氣ヲ吸收セシメサル所ノモノヲ以テスルヲ得ヘシ特ニ石炭「タール」ヲ掲ケシ所以ハ其最モ得易キヲ以テナリ但シ該油中ノ炭化水素溜液即チ「ベンゾール」屬ノモノヲ使用スルモ亦可ナリ

石炭煤氣ノ場合ニ於テハ前記ノ如ク獸炭ハ該氣中、硫化水素ヲ吸収ス但シ乾燥ナル獸炭中ニ煤氣ヲ通過セシムルトキハ多少其照力ヲ減殺スヘシ然レモ大氣使用シ且ツ石炭「タール」ヲ以テ獸炭ヲ浸潤スルトキハ却テ之ヲ増進ス是レ此ノ如クシタル煤氣ノ照力ハ獸炭ヲ通過セサルトキト同一ナレモ通過セサルモノニ比スレハ尙ホ一層白焰ヲ生スルヲ以テナリ

此法ニ據ルトキハ硫素ト水素ト相分離シ硫素ハ獸炭中ニ殘留シ水素ハ煤氣ト共ニ通過シ炭酸氣モ亦全ク通過スルヲ以テ煤氣精製ノ前後ニ於テ實際其容積ニ差異ヲ生セス

此改良法ノ大ニ便宜トスルノ煤氣ヲシテ凝縮器ヨリ直接ニ新發明ノ精製器内ニ通過セシムルヲ得從テ擦擇法ト精製法トヲ給合セシムルヲ得ルニアリ

硫化水素ヲ除却スルニハ之ヲ煤氣中ニ於テ分解スヘキ酸化鐵錫鑛「マ」ンガニース「鑛」等ノ如キ物體ヲ獸炭ニ混合スルモ亦可ナリ

此精製器ヲ以テ精製セル煤氣ハ更ニ「アムモニヤ」及硫素ヲ含マス殆ト無臭ナリ

此發明ノ專賣特許ヲ請求スル區域ハ左ノ二條トス

第一 己ニ述陳セシ如ク獸炭ノ方便ニ依リ煤氣ヲ精製スルニ當リ其煤氣中ノ照氣ヲ吸收スルヲ豫防スルノ方法即チ照氣ト相互ノ關係アル適宜ノ物體ヲ獸炭ニ混合スルノ法是ナリ

第二 煤氣ヲシテ大氣ト共ニ石炭「タール」ヲ以テ獸炭中ヲ通過セシムルノ法是ナリ

右之通相違無之候也

何 郡 地名 番地 居住
 族籍 寄留

業名

發明者 氏 名 印
 又ハ發明者二人ナルトキ
 肩書前同斷

發明者 氏 名 印
 肩書前同斷

發明者 氏 名 印
 又他ノ發明ヲ讓受ケタルトキハ
 肩書前同斷

年 月 日

農商務卿某殿

第二(組成劑ノ發明ヲ記載スルトキ)

明細書

脱毛煤助劑

毛皮ヲ鞣化スルニ當リ豫メ其毛皮及ヒ脂肪ヲ脱除シ易カラシムルカ
爲ニ使用スヘキ新規有益ノ組成劑ヲ發明セリ之ヲ左ニ明解ス
此組成劑ハ清水石灰曹達硝石及ヒ花狀硫黃ヨリ成ル即チ其割合ヲ掲
クルヲ左ノ如シ

清水

一二五斗

生石灰

八〇〇

曹達

一二〇〇

硝石

二四〇

花狀硫黃

一二〇

以上ノ成分ヲ攪擾シテ善ク之ヲ混和セシムルモノトス

此組成劑ノ用法ハ豫メ毛皮ヲ一日乃至八日間水中ニ浸シ皮裡ニ含有
スル鹽類及汚物ヲ脱除シ之ヲ清淨ニシタル後此液劑中ニ浸ス一四十
八時間ニシテ之ヲ取出シ通法ヲ以テ其毛ヲ脱除スルモノトス
此組成劑ヲ使用スルトキハ當ニ其毛ヲ脱除シ易カラシムルノミナラ
ス毛皮ヲ鞣化スルニ當リ妨礙ヲ來タズヘキ脂肪及ヒ其他ノ物質ヲ脱
除スレトモ精良ノ柔革ニ變成スヘキ質ハ却テ之ヲ保存ス
此發明ノ專賣特許ヲ請求スル區域ハ上文既ニ記載セシ如ク毛皮ヲ鞣
化スルニ當リ豫メ其毛ヲ脱除シ易カラシムル爲ニ使用スヘキ組成劑
是レナリ
右之通相違無之候也

年月日

發明者 氏 名 印

又ハ發明者二人ナルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名 印

專賣特許諸願書式及明細書文例

肩書前同斷

發明者 氏 名 印

又他ノ發明ヲ讓受ケタルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名 印

肩書前同斷

讓受人 氏 名 印

農商務卿 某 殿

第三(器械ノ發明ヲ記載スルトキ)

明細書

クリーム分離器械

此發明ハ牛酪製造ノ際氷ノ方便ニ藉リ牛酪ヲ冷却シ以テ其クリームヲ分離スル爲メニ使用スヘキ新奇有益ノ器械ナリ之ヲ左ニ明解ス

此器械ハ長方形ノ水槽ニシテ其内部ノ中間ニ關中(イ)ノ如ク氷塊ヲ抑止スヘキ焙格形ノ裝置ヲナシ又槽ノ一側面ニ(ク)リム(全ク上深セルヤ否)ヲ窺ヒ得ヘキ玻璃窓(ロ)下槽底ニ接近セル所ニ吸子(ハ)下ヲ備ヘリ

圖中ニ槽ノ側面ヲ裁斷セル所以ハ只々其内部ノ結構ヲ示サンカ爲

メナリ

此器械ヲ以テ乳ヲ冷却スルニハ先ツ槽ノ高サ四分ノ一ニ達スルマテ清淨ナル氷塊ヲ密布シ其上ニ乳ヲ注入ス但シ乳四十斤ニ付氷十斤ノ割合ナリトス然ルトキハ氷塊ハ焙格ニ抑止セラレテ液面ニ上深スルヲナク從テ乳ト混合シテ(ク)リム(ノ)分離ヲ妨碍スルノ憂アルヲナシ

斯ク乳ヲ冷却スルヲ大約四十分時間(ク)リム(ノ)全ク液面ニ上深スルヲ俟テ之ヲヒ取り尋テ吸子(ハ)ヲ開キ殘乳ヲ瀉出シ之ヲ乾酪製造場ニ送ル此操作中溶解セル氷水ハ少量ニシテ未ダ殘液ノ品位ヲ劣ラスニ至ラス又更ニ(ク)リム(ノ)混合セサルナリ

此器械ニ依リテ分離セル(ク)リム(ノ)ハ其品位頗ル良好ニシテ其量甚タ多シ而シテ此器械ヲ使用スルトキハ(ク)リム(ノ)速度ニ分離スルヲ以テ殘液ノ酸味ヲ呈セサルニ先チ之ヲ乾酪製造場ニ送ルヲ得ルト一年四季中何時ニテモ常ニ之ヲ施行シ得ルトノ二便アリ

此發明ノ專賣特許ヲ請求スル區域ハ己ニ記載セルカ如ク水槽中ニ裝置セル焙格形ノ抑氷機是レナリ

右之通相違無之候也

何縣地名番地 居住 寄留

年	月	日	族籍
			業名
			發明者 氏 名 印
			又ハ發明者二人ナルトキ
			發明者 氏 名 印
			發明者 氏 名 印
			又他ノ發明ヲ讓受ケタルトキ
			發明者 氏 名 印
			讓受人 氏 名 印
			農商務卿某殿
			本人割印

第四(圖面)

(圖面零ス)

第六節 專賣標記方

○明治十八年四月廿三日農商務省第七號告示

專賣特許條例第十條發明品ノ標記左ノ通相定候條此旨告示候事

專賣特許何月何日ヨリ何年間

專賣何年何月何日何年間

專賣以下年月日ノ數字ヲ記スヘシ

例ヘハ明治十八年七月一日ヨリ五年間專賣特許ヲ受ケタレハ

其標記ノ内專賣人ノ便宜ニ依リ選擇シテ標記スヘシ但縱若クハ横ニ

前三項ノ内專賣人ノ便宜ニ依リ選擇シテ標記スヘシ但縱若クハ横ニ
一行又ハ二行ニ記シ或ハ圓形橢圓形等ニ一行ニ記スルモ妨ケナシ

第七節 專賣免許料收納手續

明治十八年六月三日農商務省第貳拾六號府達

今般第七號專賣特許條例公布相成候ニ就テハ專賣免許料收納手續左
ノ通可相心得此旨相達候事

專賣免許料收納手續

專賣標記方○專賣免許料收納手續

一 專賣特許條例第十七條免許料ハ出願者ニ於テ明治十七年大藏省第四十一號達國税金収納順序ニ依リ第二號ノ切符ヲ以テ郡區長ニ納メ郡區長之ヲ預リ置其旨主稅長ニ報道シ追テ特許證若クハ指令願書到達ノ上成規ノ手續ヲ以テ同省ニ納附スヘシ

但免許料ヲ返付スヘキ場合ニ於テハ同年大藏省第四十二號達ニ依ルヘシ

一 右免許料ハ特許證若クハ指令願書ノ日附讓與分與ハ特許證ニ以テ年度ヲ區分スヘシ

一 收納セシ免許狀ハ半ケ年ツ、區分シ別紙雛形ノ通明細表ヲ調製シ

四月十五日限リ農商務省ヘ差出スヘシ

但十八年ハ半ケ年ツ、ニ區分セシ四月十五日限リ差出スヘシ

明治何年四月ヨリ九月マテ專賣免許料明細表

何府何郡何町何番地

氏名

年月日	發明	使用	追加	讓與	分與	再渡	免許料
何年何月何日	十五年一個						貳拾圓

年月日	發明	使用	追加	讓與	分與	再渡	免許料
何年何月何日							拾圓
何年何月何日		五ヶ年一個			一個		五圓
何年何月何日			一個				五圓
何年何月何日							拾五圓
何年何月何日		十年一個					拾五圓
何年何月何日							拾圓
何年何月何日						一個	壹圓
何年何月何日				一個			五圓
計	一個	一個	一個	一個		一個	三拾六圓
計	一個	一個			一個		三拾五圓

全上 氏名

火藥取締規則制定ニ付管轄廳ニ於テ屢々出方○火藥類鐵道運送條例 九十三

總計	二個	二個	一個	一個	一個	七拾壹圓
----	----	----	----	----	----	------

右之通候也

年 月 日

農商務卿 某殿

長官氏名印

第五章 爆發物

第一節 火藥取締規則制定ニ付管轄廳ニ於テ届出方

明治十八年一月六日第一號府警視廳へ達

續篇第一
章第一節
參觀

明治十七年十二月十二日第三拾一號布告ヲ以テ火藥取締規則被定候ニ付テハ管轄廳ニ於テ届出方左ノ通可相心得此旨相達候事

一 火藥類ノ賣買營業ヲ免許シ又ハ火藥庫設置ヲ許可シタル時ハ營業者ノ住所族籍氏名及火藥庫設置ノ地名番號ヲ記シ内務陸海軍ノ三省へ届出ヘシ

一 營業者ノ賣買シタル火藥類ノ種類數量ヲ統計シ毎年一月内務陸軍海軍ノ三省へ届出ヘシ

第二節 火藥類鐵道運送條例

明治十八年四月工部省第拾四號告示
明治五年五月第百四拾六號公布鐵道零則第十六條ニ依リ火藥類鐵道運送條規左ノ通相定ム但此條規ハ私設鐵道ニモ適用スル者トス
右告示候事

火藥類鐵道運送條規

第一條 火藥類ハ鐵道局ノ都合ヲ以テ之ヲ運送スルコトアルベシ

第二條 火藥類ハ別仕立列車或ハ旅客車ヲ運送セザル普通ノ貨物列車ヲ以テ運送スベシ但兵員乗車ノ時其携帯スル彈藥ハ此限ニアラズ

第三條 火藥類ヲ運送スルノ賃金ハ百斤ニ付一里金壹錢二厘ト定ム但三千五百斤以下及二十里以内ト雖モ猶本數本里ニ當ル金額即チ金八圓四拾錢ヲ徵スベシ

第四條 火藥類ヲ運送セントスル者ハ其名稱種類量數及送受人ノ氏名住所ヲ記載シタル書面ヲ四十八時間以前ニ鐵道局ニ差出シ其承諾ノ證ヲ領受スベシ其證ナキハ之ヲ送運セサル者トス但非常急劇ノ際ハ此時間ノ限ニアラズ

第五條 火藥類ノ受渡ヲナスハ鐵道局員ニ限ルベシ且其時間ハ日出

后日没前ニシテ鐵道局ニ於テ特ニ指定スル日時ヲ限ルベシ
第六條 火藥類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲナスルハ其桶箱等ハ成ルベク互ニ手渡ヲナシ決シテ地上ニ投下シ又ハ輾轉セシムベカラズモシ輾轉セサルヲ得ザルハ必ス革布木綿等ヲ以テ其經過スベキ地上ヲ蔽フベシ

第七條 火藥類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲナス者ハ鋸鐵或ハ釘ヲ付シタル靴類ヲ穿チ又ハ摺付木等ノ發火質アル器具ヲ携へ又ハ吸烟スルヲ許サス

第八條 火藥類ノ受渡庫入荷揚荷積ヲ始ルルハ之ヲ終ル迄少時間ト雖モ猶豫スベカラズ又其ノ預ラサル他人ノ其場ニ近クテ防クベシ
第九條 火藥類停車場若クハ鐵道ノ倉庫ニ到着シタルハ六時間以内ニ其受取方ヲナスヘシ此時間ヲ過クレバ一時間毎ニ一噸ニ付金貳圓ノ遲滯料ヲ徴スベシ

第十條 鐵道局ハ火藥類受渡庫入運送荷揚荷積ノ爲メ火藥類ニ生シタル損害並之ニ原因シテ他ニ及ビタル損害ハ勿論其他何等ノ事由アルモ其責ニ任セザル者トス但鐵道局員ノ過失ニ因テ起ル者ハ此

限ニアラス

第十一條 火藥類ノ運送ヲ委托スル者ハ前ニ列記シタル條規ヲ承認シタル証トシテ鐵道局ヨリ下付シタル條規寫書ノ端末ニ署名捺印スベシ

第六章 商標

第一節 商標條例附則中追加 (續編第四章第一節ニ出ツ)

第二節 商標條例附則中追加ニ付商標登錄願書式 (續編第四章第一節ニ出ツ)

第三節 商標勸覽所設置ノ件

千葉縣伺 十八年一月八日

本年御省第三拾號登錄商標見本觀覽所商工輻輳ノ地ニ設置云々右費用ノ儀ニ付嚮ニ埼玉縣へ御指令ノ次第モ有之候處該觀覽所必要ノ地ナルヲ以テ特ニ人民ヨリ一切ノ費金ヲ郡衙等へ献納シ居村戸長役場若クハ便宜ノ地ヲ右觀覽所設置等ノ儀出願候場合ニ於テハ御裁可相成候儀ニ有之候哉此段相伺候也
農商務省指令 同年一月十七日
伺之通

商標條例附屬中追加○同上ニ付商標登錄願書式○商標勸覽所設置○公有商標件 九十七

第四節 公有商標ノ件

嶋根縣伺 十七年十月二十四日

商標條例中疑義ノ麻左ニ相伺申候

第一條 條例第五條第四項ノ儀ニ付徳嶋縣伺御指令ノ趣有之候處其公有標ニ屬スヘキモノハ幾年ノ後露顯スルモ限ナキヤ

第二條 前條公有商標後日露顯シ之ニ牴觸スレハ條例第十二條ニ據リ無効ニ歸スヘキ處其公有商標トナスヘキ實否ノ調査ハ何等ニ據ルヘキモノナルヤ

第三條 若シ公有商標ハ人民ノ申出ニ任セ別ニ調査セラレサルモノトスレハ附則限内ニ出願登錄ヲ得專有權ヲ有スル者ト牴觸スルハ如何可心得哉

第四條 公有商標ト同一又ハ相紛ハシキ商標ヲ同一種ノ商品ニ用フルハ出願スルヲ得スト雖出願セシテ同様ノ商標ヲ使用スルモノアルモ不問ニ世ヘキ筋ナルヤ

農商務省指令 十八年三月三日

伺之趣左ノ通可相心得事

第一條 見解ノ通

第二條 已ニ登録ヲ經タル商標ニシテ後ハ公有ニ屬スヘキ商標ナルコトヲ商標登録所ニ於テ發見シタルハ農商務卿之ヲ判定シ民間

ニ於テ發見セシキハ裁判官ノ審判ニ據ルモノトス

第三條 附則限内ニ出願シ其登録ヲ經タル商標ハ條例第五條四項ニ牴觸スルコトナシ

第四條 見解ノ通

第七章 船舶

第一節 船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

明治十八年四月十三日農商務省第十五號附達

明治十七年十二月三十號布告西洋形船舶検査規則制定相成候ニ付テ

ハ同規則第二十一條ニ依リ船舶検査施行手續及ヒ船舶検査細則別冊之通相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

但明治十三年十一月内務省乙第四十五號達ハ本文月日ヨリ廢止ス

右相達候事

(別冊)

船舶検査施行手續

第一條 西洋形船舶検査規則ニ依リ検査スヘキ船舶ハ此手續并ニ檢

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

查細則ニ照ラシ取扱フヘシ

第二條 検査規則第四條ニ掲クル船舶ノ検査ハ管船局ヨリ便宜ノ地ヘ検査員ヲ派出シ之ヲ検査スヘシ

第三條 検査員ハ定時臨時ヲ問ハス毎検査詳細ノ報告書ヲ管船局(不登簿船ハ其地方廳)ニ差出スヘシ

但初度ノ検査ニ係ルモノハ第一號書式次回以後ハ第二號書式ニ據ルヘシ

第四條 管船局若クハ地方廳ニ於テハ前條ノ報告ニ依リ第三號書式ノ検査證書ヲ作り管船局ハ検査所ヲ經由シ地方廳ハ便宜之ヲ船主若クハ船長ニ下渡ス可シ

但シ検査規則第四條ニ掲クル船舶ニハ其船籍地方廳ヲ經テ之ヲ下渡スヘシ

第五條 検査證書中航路ノ定限ハ左ノ五項ニ區分ス

一 外國航路

一 內國航路(朝鮮南界ノ鴨綠江ヨリ露領黑龍江ニ至ル沿岸及ヒ薩俄噠諸港ニ航スルモノモ包含ス)

一 近海航船(沿岸ノ各港間ヲ往復シ又ハ内地ト離島ノ間ヲ通航シ特ニ

其航路ノ區域ヲ定メタルモノ)

一 內海航船(紀伊海峽ヨリ以西下ノ關佐賀ノ關以內ヲ限リ通航スルモノ)

一 平水航船(湖川港灣内ヲ限リ通航スルモノ)

第六條 検査スヘキ船舶ハ其船主若クハ船長ヨリ第四號書式ノ願書ヲ出サシメ受付ノ順序ニヨリ成ヘク速ニ臨檢スヘシ但時宜ニヨリ検査員ノ見込ヲ以テ順序ニ拘ハラス検査スルコアルヘシ

第七條 検査規則第三條ニ掲クル船舶ハ臨時検査ヲ除クノ外前ノ検査ヲ受ケタル検査所ヘ次回ノ検査ヲ願出サシムヘシ

第八條 検査證書ヲ受有スル船舶其航路ヲ變スル等ノ事故ニ由リ次回ノ検査ヲ他ノ検査所ヘ願出ルキハ該検査所ヨリ前ノ検査所ヘ照會ノ上之ヲ検査スヘシ但検査員ニ於テ照會ヲ必要トセサルキハ此

限ニアラス

第九條 検査執行ノ際ハ成ルヘク船主長機關手等ヲシテ之ニ立會ハシムヘシ

第十條 検査ノ上修繕若クハ改造ヲ爲サントスル時ハ其事項ヲ書面ニ記載シ之ヲ船主若クハ船長ニ交付シ其副書ヲ保存シ置クヘシ

第十一條 修繕若クハ改造ヲ命シ其工事中必要ト思惟スルキハ検査員ニ於テ便宜之ヲ監査スヘシ

但船主ノ都合ヲ以テ船體機關等ヲ新造又ハ修繕スルニ方リ特ニ臨檢ヲ請フモノアルキハ事務ノ都合ニ依リ之ヲ許可スヘシ

第十二條 修繕若クハ改造ヲ命シ其工事落成ノ上検査ヲ爲スルハ當初之ヲ命シタル検査員必ス之ヲ擔當スヘキモノトス

第十三條 定時臨時ニ關セス検査員ニ於テ運航ヲ差止メ修繕等ヲ命シタルトキハ本船現有ノ検査証書ヲ引上ケ置クヘシ

第十四條 検査規則第十三條ニ據リ出願ノ船舶ニ於テ其修繕ノ箇所ハ勿論場合ニ依リ其他部ヲモ精密検査ノ上既ニ受有ノ検査書面ニ變更ヲ生スルキハ該證書ニ報告書ヲ附シ管船局(不登簿船ハ其地方應)ニ差出シ其證書ノ書換ヲ請フヘシ然レモ検査ノ上其證書面ニ變更ナキキハ該證書ノ裏面ニ其要旨ヲ記シ検査認印ノ上直チニ運航ヲ許可スヘシ

但船主ノ都合ニ依リ木船入渠等ノ上之カ検査ヲ請フモノアル時モ亦本文ニ準スヘシ

第十五條 検査員検査終了ノ上運航ニ堪ヘキモノト認メタルキハ船

主若クハ船長ノ請願ニ依リ外國航船ヲ除クノ外第五號書式ノ検査假證書ヲ交付シ其運航ヲ許可スルヲアルヘシ但シ該假證書ノ効用ハ三箇月ヲ以テ限リトス故ニ右期限内必ス本證書ト交換スヘキモノトス

第十六條 農商務省検査員ハ登簿船ヲ問ハス検査證書ノ有効期限内ト雖モ衝突乗上ケ其他必用ト認メタル場合ニ於テハ直チニ本船ニ臨檢シ其所見ノ狀況ヲ管船局ヘ報知スヘシ

第十七條 夜間衝突ニ係リシ船舶ヲ検査スル時ハ特ニ其船燈及ヒ隔壁ノ位置大小方位等ヲ精密ニ検査シ又一方(相手方)ノ船舶其近傍ニ碇泊セルキハ同様之ヲ検査シ精細ノ報告書ヲ管船局ヘ差出スヘシ

但シ該報告書ハ衝突事件審問ニ關シ十分ノ證據トナルヘキヲ以テ極メテ遺漏ナカラシムヘシ

第十八條 検査員ハ船體船具機關等ノ現狀ニ依リ六月若クハ十二月間ノ運航期限及ヒ此手續第五條ニ掲クル航路ノ定限ヲ定メ之ヲ報告書ニ記入スヘシ

第十九條 検査ノ爲メ使用スヘキ物品ニシテ本船若クハ工場ニ備ヘ

アルモノハ便宜検査員ヨリ其主務者ニ談合シ之ヲ使用スルヲ得ヘシ

第二十條 検査所及ヒ地方廳ニ於テハ水壓唧筒驗壓元器等検査ニ關シ必用ノ器具ヲ備ヘ置キ漏罐ノ壓力等ヲ定ムルハ都テ該驗壓元器ニ據ルヘシ

第二十一條 検査所及ヒ地方廳ニ於テハ検査簿ヲ備ヘ置キ每船第一號書式ノ件名ハ勿論其他ノ要件ヲ検査ノ都度記入スヘシ

第二十二條 検査證書ヲ下附スルニ方リ舊證書ハ検査員ニ於テ取纏メ之ヲ營船局若クハ地方廳ニ返付スヘシ

第二十三條 東京海上保險會社ノ保險中ニ係ル船舶ハ検査員ニ於テ特ニ検査セサル検査合格ト看做スヲ得ヘシ

第二十四條 外國航船及ヒ內國航船ヲ除クノ外諸船ノ検査ハ其航路ノ難易ニ依リ検査細則ノ條款ニ照シ之ヲ斟酌スルヲ得ヘシ

第一號

船何九第一回検査報告書

明治何年何月何日本船検査願出候ニ付何年何月何日何所ニ於テ(碇泊入渠若クハ上架中)制規ニ遵ヒ検査候處(別紙之通夫々修繕改良ヲ命シ今般悉皆整備一切故障無之候ニ付^{十六}箇月間ハ記載ノ航路航通差

支無之モノト致認定候依之(本船ノ願出ニヨリ検査假證書致交付置候)検査證書御下渡有之度別紙検査表相添此段報告仕候也

明治 年 月 日 船體部検査主任 農商務省又ハ何府廳 船舶検査員 某印

機關部検査主任 農商務省又ハ何府廳 船舶検査員 何 某印

又ハ府縣長官 宛

管船局長 宛

帆船何九検査表

船免狀番號	定 繫 場
總噸數	製造年月
登簿噸數	製造場所
航路	製造人
船體材料	飲水量 石數ヲ記ス

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

船體外部	肋材心巨	梁及心巨 (正甲板)	船尾肘及敷	船首肘材及敷	透水瓣	支水壁及敷	車軸隧道	船底銅板張替年月	石炭庫容積	壓艙物噸數及裝置	綱具ノ裝置	量			毛紙	材			板下	
												第 一	第 二	第 三		上甲	正甲	下甲		每梁

楫數	機關手長	船主	船長	旅客定員			本船原名	甲板設置	尺		獲深	名	平均速力	吃水(船首)			
				下等	中等	上等			長	幅					船體內部	現狀	
	免狀種類及氏名ヲ記ス		免狀種類及氏名ヲ記ス					幾層但シ「オーニンダ」スーパ「アトア」等ノ裝置ヲ記ス	上層甲板ニテ船首ノ外測ヨリ柱ノ外側迄ヲ記ス	最大船幅ノ外側ヨリ外側迄ヲ記ス	量噸甲板ノ下面ヨリ船底中央ノ内板迄ヲ記ス	名	材料	厚	巾	現	狀

帆全部	裝置網同	架同	檣臺同	檣穴材料	檣料材檣			檣帆類	附屬品	總客積	第 六
					後	中	前				
羅盤	救命浮子	霧中信號器	黑球	赤燈	隔板	碇泊燈	檣燈	舷燈	同上附屬品	消防唧筒	芥除

第 五	第 四	第 三	外板固着釘	外載貨線上 板載貨線下	舷側厚板	船尾材	船首材	柁與木	龍骨	名 稱	材料厚	巾	現狀	端 艇	名 稱	長 巾	深 積	現狀	鎖 長	同 徑	大 索	同 長	周 圍		
																			右 舷	左 舷	第 一	第 二	第 三		

筒 行 長	水 徑	給 數	車 徑	外 材 料	製 造 年 月	漁 機 種 類	漁機之部			測 程 器	測 鉛 量	及 深 海 測 鉛 量 及 線 長	客 用 救 命 器
							螺 徑	螺 巨	葉 數				

轉 柁 索	柁 取 器	口 艙			海 圖	信 號 旗 及 書	時 計	雙 眼 鏡	晴 雨 計	豫 備 帆	船 體 附 屬 品
		楔	槓	覆 布							

同 徑 厚	加 熱 器 種 類	管			室			燃		烟 管 徑 數
		板 巨 支 柱 徑 心	後 板 厚	前 板 厚	同 支 柱 徑 心 巨	背 板 厚	同 支 柱 徑 心 巨	頂 板 厚	同 支 柱 徑 心 巨	
製造年月	副 瀛 罐 種 類	副 瀛 罐	附 屬 品 一 式	塞 瀛 瓣	驗 瀛 器 數	驗 水 嘴 子 數	各 罐 硝 子 驗 水 計 數	石 炭 消 費 高 積	各 罐 火 床 面 積	各 罐 安 全 瓣 ノ 數

芥 除	所 同 上 引 水 筒	筒 行 長	副 徑	驗 瀛 器	副 瀛 機 數	手 用 唧 筒	所 同 上 引 水 筒	筒 行 長	水 徑	污 數	同 年 月 日	水 壓 試 驗 度	安 全 瓣 封 鎖 瀛 壓	常 用 瀛 壓
同 支 柱 徑 心 巨	厚	同 接 合 種 類	同 徑 、 長 、 厚	各 罐 爐 ノ 數	鉸 釘 徑 、 心 巨	同 接 合 種 類	鐘 胸 徑 、 長 、 厚	同 年 月 日	水 壓 試 驗 度	安 全 瓣 封 鎖 瀛 壓	常 用 瀛 壓			

同接合種類	製造場所
漁函種類	鑄鋼徑長厚
同徑厚	爐徑長厚
同接合種類	火床面積
安全瓣種類	安全瓣種類
各安全瓣面積	驗水計硝子管
安全瓣封鎖	寒暖計
附屬品一式	安全瓣發條
豫備及所屬品	驗鹽器
	機關手道具
結錒上端螺釘及田螺	火床架
同下端	排氣唧筒瓣
吸鏟發條	護膜

正軸受螺釘及母螺	脩環同上
接軸鏑螺釘及母螺	雜螺釘及母螺
給水唧筒瓣若クハ護膜	鐵片
汚水同上	

第二號

船何丸第何回検査報告書
 明治何年何月何日日本船検査願出候ニ付何年何月何日何處ニ於テ(碇泊入渠若クハ上架中)制規ニ遵ヒ検査候處(別紙ノ通夫々修繕改良ヲ命シ今般悉皆整備)一切故障無之候ニ付十二箇月間ハ記載ノ航路航通差支無之モノト認定致シ候依之(本船ノ願出ニヨリ)検査假證書交付致置候條(検査證書御下渡有之度別紙相添此段報告候也)

機關部検査主任 農商務省又船泊検査員 何 某印
 船體部検査主任 農商務省又船泊検査員 何 某印

營船局長
又ハ府縣長官宛

帆船何丸第何回検査要目

一 船主(何府何郡何町何番地何某若クハ會社)

一定繫場(何府何郡何港)

一 航路(前期何當期何)

一 船體材料

一 檣ノ數

一 綱具ノ裝置

一 噸數(惣噸數何噸登簿噸數何噸)

一 石炭庫容積

一 吃水(載貨船首尾何尺何寸空船船首尾何尺何寸)

一 飲水量(何石)

一 汽罐ノ種類及數

一 馬力(公稱何實何)

一 汽機回轉平均數

一 推進器ノ種類

一 本船平均速力

一 每時石炭消費高

一 安全瓣封鎖汽壓前期何磅當期何磅

一 封鎖安全瓣ノ數

一 當用壓力

一 汽鑑水壓試驗年月日及壓度(施行セサルキハ前回ノ分ヲ記ス)

一 船底銅板張換年月鐵船ナレハ船底内外塗換年月

一 旅客定員(上等何人中等何人下等何人)

一 端船ノ數及惣客積

一 船長免狀ノ種類及氏名

一 機關手長免狀ノ種類及氏名

一 前期検査證書番號期限(第何號何年何月何日ヨリ何年何月何日迄)

第三號

番號	船名	検査地	登簿噸數

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

船舶検査證書

船主氏名	船名	航路	公稱馬力	漁機種類	漁罐種類	漁類	漁類	品所屬
定繋場	証書期限	上旅客等	中旅客等	下旅客等				

前記ノ船舶明治何年何月何日検査ノ上記載ノ航路航通ニ適當ナルノ報告ヲ得ルニ依リ西洋形船舶検査規則ニ遵ヒ此證書ヲ附與スル者也

明治年月日

農商務省
又ハ何府縣印

第四號

本船々主氏名若クハ會社ノ名
漁船何九第何回御検査願

一定繋場

一航路

一登簿噸數

一同稱馬力

一前期検査ノ場所

一前期検査證書有効期限何年何月何日ヨリ何年何月何日迄

一前回本船入渠検査年月日

一前回漁罐水壓試驗年月日

右ノ船舶當時何港碇泊若クハ入渠中ニテ検査用意相調候ニ付何月何日御出張御検査被成下度此段奉願上候也

船主若クハ船長氏名印

何々検査所宛

又ハ地方廳

第五號

船番號	船名	検査地	登簿噸數

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

船舶檢査假證書

船主氏名	航路	公稱馬力	汽機種類	汽鐘種類	汽壓	定場	證書期限	上旅客等	中旅客等	下旅客等	品所屬

前記ノ船舶明治何年何月何日檢査ノ上記載ノ航路航通ニ適當ナルヲ以テ此檢査假證書ヲ附與スル者也
 但此證書ハ本文記載ノ月日ヨリ三箇月ヲ限り無效タルヘシ
 明治 年 月 日

船舶檢査主任農商務省又ハ何府縣 船舶檢査員 何 某印
 機關檢査主任農商務省又ハ何府縣 船舶檢査員 何 某印

船舶檢査細則

船體檢査

第一條 船體檢査ハ其内部外部ニ關ハラス總テ現狀ニ就テ檢定シ決シテ之ヲ臆測ニ止ムヘカラス然レモ檢査ノ爲メ漫ニ完全ナル部分ヲ毀テ或ハ過大ナル準備ヲ爲サシメサル様注意スヘシ

第二條 船體檢査ハ時トシテ内部ニ止ルコアリ又外部ヲモ檢査スルコアリ但其外部ハ檢査員ノ意見ニ因ルト雖少クモ毎三年ニ一回ハ必ス入渠等ノ上之ヲ檢査スヘキモノトス

第三條 檢査ノ爲メ船舶ヲシテ入渠等ヲナサシメ及ヒ初度ノ檢査ニ係ルキハ豫メ左ノ準備ヲナサシムヘシ
 但初度ノ檢査ニ於テ入渠等ヲ要セサルキハ船底外部ノ準備ハ之ヲ除ク

木船

- 一 船底ノ真鍮板ヲ剝去シ 瀝青ヒツチヲ刮取シ内外共ニ掃淨スルコト若二十四箇月以内
- 一 各輪板ヲ新貼シテ檢査ヲ經 現狀良全ナル者ハ之ヲ要セス
- 一 各部適宜ノ處ニ足場ヲ架スルコト
- 一 船首船尾ノ隅ハ最精密ノ檢査ヲ要スル處ナルヲ以テ其掃除ニ注

船舶檢査施行手續并ニ船舶檢査規則

意スルヲ

- 一 石炭庫ヲ掃淨スルヲ
- 一 鎖ハ鎖庫ヨリ出シテ之ヲ排列スルヲ
- 一 壓艙物アラハ之ヲ取り掲クルヲ
- 一 船底水道覆板ヲ取り除クヲ
- 一 肋材ヲ檢スルカ爲メ内板幾分ヲ剝キ或ハ若干ノ釘ヲ抜カシメ又ハ之ヲ穿ツヲアリ
- 一 梁端ヲ檢査スル爲メ甲板ノ幾分ヲ剝去スルヲアリ
- 一 鐵卷轆轤ハ取外シ置クヲ
- 一 索具帆證器類其他航海ノ要具ヲ甲板ニ排列スルヲ
- 一 端艇ハ附屬品ヲ取り纏メ置クヲ

鐵船

- 一 内外面ノ塗料ヲ剝去スルヲ但船底ヲ「セメント」ニテ塗り其現狀良全ナルハ之ヲ剝去セサルヘシ
- 一 支水壁ハ最注意シテ檢査スヘキ處ナレハ必其前後ノ掃淨ニ注意スルヲ
- 一 壓艙水箱ヲ具スル船ハ人孔ヲ開キ内部ノ檢査ニ便ナラシムルヲ

其他ハ木船ニ准ス

木鐵交造船 總テ木船鐵船ニ准ス
 第四條 檢査員ハ船體内外部ニ於テ左ノ部分ヲ檢査ス

- 但船底内部ノ檢査ノミニ止ルルハ船底外面ニ關ル部分ハ之ヲ除ク
- 木船 ○ 柁 （ピントル） ○ 螺旋受 （ラネイホスト） ○ 孔穴 （船底外部ニ在ル各種ノ孔） ○ 船底 （コック）
 - 嘴子辨或ハ管ノ附着方 （附着釘ハ總テ其頭ヲ碗狀ニ扁メテ外側ヨリ内部ニ嵌ルセシメサルヘカラス） ○ 排水辨及海水嘴子
 - 并ニ芥除 （總テ取り放シ掃除セシム） ○ 外板固着釘 （鐵貨線ニ於テ最注意ス） ○ 龍骨ノ固着釘 （接所ニ於テ最注意ス）
 - 龍骨 ○ 船首材 ○ 船尾材 ○ 舷側厚板 ○ 外板全部 （接所ニ於テ最注意ス） ○ 甲板全部 ○ 填絮全部 ○ 内龍骨 ○ 船底兩側内龍骨 ○ 船底灣曲材
 - 肋材 （瀛羅機開室及ヒ石炭庫ニ於テ最注意ス） ○ 船底水道 ○ 機關及ヒ瀛羅機臺 ○ 梁及梁端
 - 梁柱 （上下端ニ於テ最注意ス） ○ 水反材 ○ 梁受材 ○ 梁曲材 ○ 船
 - 首船尾肘材 ○ 檣及ヒ檣臺 ○ 檣孔 ○ 儀裝索 （「チエーシヤ」ニ於テ最注意ス） ○ 甲板船口ノ緣材 ○ 艙口閉鎖方 ○ 載貨門閉鎖方 ○ 船側窓 ○ 鐵
 - 大索及ヒ鎖 ○ 鐵卷轆轤 ○ 舵取具帆架類 ○ 帆全部 ○ 其他

船舶檢査施行手續并ニ船舶檢査規則

航海用具及ヒ危険豫防具一般

鐵船 ○龍骨同而翼板固着釘 ○外板全部 鐵管線ニ於テ最注意ス ○外板釘 接所ニ於テ最注意ス

○支水壁 ボルクヘット スルイスバルナ 注意ス ○船底セメント ○ストリンガー 正甲板ニ於テ最注意ス ○螺旋軸隧道 スクルーシヤフトトンネル ○壓艙水箱 チーディーバラストタンク ○其他木船ニ

准ス

木鐵交造船 ○外板固着釘 腐蝕如何ヲ最注意ス ○其他木鐵船ニ准ス

第五條 検査員ハ前條ニ列擧スル部分ヲ検査スルニ當リ本條ヨリ第十二條迄ニ掲クル所ノ條件ヲ以テ目的トナシ修繕或ハ改良ヲ命ス

ヘシ

一船體ハ何等ノ部分ニ關ラス腐敗或ハ解弛シ將ニ危害ヲ來タサントスル者ハ直ニ修繕ヲ命スヘシ

一甲板ハ其原厚ノ三分ノ一以上耗損スルキハ之カ改更ヲ命スヘシ

一鐵船及ヒ木鐵交造船ノ船體要部ニ於ケル鐵板ハ原厚ノ三分ノ一ヲ耗損シタルモノハ直ニ之カ改更ヲ命スヘシ

一鐵船ノ支水壁ハ總テ密閉ナラシムルヲ要ス故ニ内龍骨船底面側内龍骨及ヒ「ストリンガー」ノ貫通スル所ニ於テ密着スルヤ否ヲ檢シ若

チキタイ

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一木船及ヒ木鐵交造船ノ支水壁及石炭庫ノ木製ニ浪鑑トノ距離一尺未滿ナルキハ鐵板或ハ亞鉛板ヲ以テ之ヲ覆ハシムヘシ

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

一機關室ノ前後ニハ必支水壁 鐵製ノ製 設ナカルヘカラス

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

小瀛船ニ於テ各部ニ達スル通路ノ設ナキモ必スラストベリリ

少ニ達シ得ル設アラシムヘシ

一鐵船ニ於テ機關ニ運轉ス唧筒ノ吸水管ハ各支水壁ヲ通シテ各

一鐵船ニ於テ機關ニ運轉ス唧筒ノ吸水管ハ各支水壁ヲ通シテ各

- ニ達シ毎艙其漏水ヲ排出スヘキ備アラシムヘシ
- 一鐵船ニシテ壓艙水箱アルキハ悉ク其水ヲ吸除セシメテ能ク内部ヲ検査スヘシ但之ニ備フル人孔ノ蓋ハ必密閉ナラシムヘキモノトス
- 一正甲板及上甲板ノ諸口線材ハ充分ニ高ク且艙口天窓石炭庫口等ノ諸蓋ハ堅緻ニシテ漏水ナカラシメ又充分ニ排水孔及ヒ排水戸ヲ設ケ且載貨門アルキハ其閉鎖ヲ堅固ニシテ海水ノ浸透ナカラシムヘシ
- 一艙口ヲ密閉スルタメノ覆布概楔等ハ最精密ニ検査シ毫モ軟弱ナルモノナカラシムヘシ且覆布ハ二枚以上ヲ備ヘシムヘシ
- 一操舵具ハ最注意シテ之ヲ検査シ又豫備ノ轉舵索一具ヲ備ヘシムヘシ
- 一瀛船帆船及木鐵船ノ別ナク相當ノ消防器具ヲ備ヘ且外國航路及ヒ内國航船ハ手用消火唧筒ト又船中各部ヘ達スル消防布管ノ備ナカルヘカラス但検査毎ニ之カ使用ヲ實檢スヘシ
- 一都テ船舶ハ其航路ニ對シテ充分ナル海圖羅盤貳個以上晴雨計壹個以上雙眼鏡時計信號旗壹組信號書斧壹個以上時鐘壹箇百貳拾

- 尋ヨリ短カラサル深海鉛線ニ貳拾八磅以上ノ測鉛ヲ付セタルモノ壹箇又貳拾五尋ヨリ短カラサル測鉛線ニ七磅ヨリ少ナカラサル測鉛ヲ付シタルモノ壹箇ヲ備ヘ此線ニハ精密ニ目標ヲ付シ置カシメ又瀛船帆船ニ關ハラス測程器壹組并ニ砂時計ノ備ヘアラシムヘシ
- 一鐵船及ヒ木鐵交造船ニ於テハ羅盤ノ自差ヲ審ニ測定セシヤ否ヲ検査シ又木船目差表ハ恒ニ船中ヘ備ヘ置カシメサルヘカラス
- 一燈火隔板等ハ總テ衝突豫防規則及船燈製造方法書ニ適合スルヤ否ヲ最精密ニ検査スヘシ
- 一舷燈隔板ヲ索具ニ取り附ケ又ハ船體最廣部ノ後ニ置カシムヘカカス
- 一舷燈ハ端艇錨及帆端等ノタメニ光輝ヲ遮ラルハ憂ナカラシムヘシ
- 一瀛笛ハ能ク音響ヲ發スルモノニシテ其位置ハ上甲板諸建物等ニ遮ラレサル様十分高ク烟筒ノ前ニアラシムヘシ若前後貳箇ノ烟筒アルキハ瀛笛ヲ前烟筒ノ前ニ取附クシムヘシ

第六條 旅客船ニハ其常ニ定ムル所ノ最遠航程ノ日數間乘客壹人ニ船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則 百二十七

付壹日壹升ヨリ少ナカラサル飲水ヲ容ルヘキ水箱ヲ備ヘシムヘシ
第七條 旅客船ハ左ノ表ニ從ヒ端艇ヲ備フヘシ
但最小漁船ハ此限ニアラス

登簿噸數		千噸以上										十噸マテ				三百六拾噸ヨリ貳百四拾噸マテ				貳百四拾噸ヨリ百貳拾噸マテ			
數	長	幅	深	客積	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四	
	一八	五五	二二	一三三七	二七	二八	二六	二八	二八	二八	一六	二二	二二	二二	一四	一四	二二	二二	一四	一四	二二	二二	二二
	五五	五五	二五	三九六〇	八五	六五	二六	八五	八五	八五	五五	五五	五五	五五	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
	二二	二二	二五	五〇四九	三六	二六	二六	三六	三六	三六	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
	一三三七	一三三七	三九六〇	五〇四九	九九九六	五四〇八	五四〇八	九九九六	九九九六	九九九六	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇
	二二	二二	二五	三九六〇	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
	一三三七	一三三七	三九六〇	五〇四九	九九九六	五四〇八	五四〇八	九九九六	九九九六	九九九六	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇
	二二	二二	二五	三九六〇	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
	一三三七	一三三七	三九六〇	五〇四九	九九九六	五四〇八	五四〇八	九九九六	九九九六	九九九六	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇

五百噸ヨリ三百六		八百噸ヨリ五百噸マテ				百貳拾噸ヨリ六拾噸マテ				六拾噸以下壹雙					
第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四	第一	第二	第三	第四
一六	二四	二六	二六	一八	二四	二六	二六	一四	一六	一六	一六	一四	一四	一四	一四
五五	五五	八〇	八〇	五五	五五	六五	六五	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
二二	二二	三六	三六	二二	二二	二六	二六	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
一一八	一一八	四五七六	四五七六	三九六三	三九六三	五四〇八	五四〇八	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
一一八	一一八	四五七六	四五七六	三九六三	三九六三	五四〇八	五四〇八	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
一一八	一一八	四五七六	四五七六	三九六三	三九六三	五四〇八	五四〇八	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇	九一〇

本表ヲ作ルニ當リ噸數ヲ艇數ト定ムト雖率子旅客及乗組員ヲ載
セ得ヘキ艇數ヲ備フルヲ以テ足ル者トス其割合ハ拾立方尺ヲ以
テ壹人トシ其測度方ハ端艇ノ外部ニテ長幅ヲ取リ内部ニ深ヲ測
リ各之ヲ相乘シ其拾分ノ六ヲ以テ艇積ト定ム然レハ艇積七拾立
方尺以下ナルモノハ之ヲ算セズ
何船ニ拘ハラズ救命浮子貳箇善良ナル者ニシテ貳拾四時間三拾
貳磅ノ浮力アル者ヲ備フヘシ又外國航通旅客船ニハ其載セ得ヘ
キ旅客ニ適當ナル救命帶ヲ備ヘシムヘシ

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

第八條 旅客船ニ非サル通常汽船帆船ハ單ニ挽錨ヲ載得ヘキ端艇ノ備アルヘシ

第九條 端艇ニハ藥一組ト其他少クモ一箇ノ豫備藥放水口ノ栓貳箇
 舵舵柄纜^{ベイヤートフック}溢杓鈎筒壹箇又常備端艇ノ内半數ニハ必帆檣壹組ヲ備フ
 ヘシ但壹隻ナルキハ之ニ帆檣ヲ備フヘキ者トス又端艇揚卸ヲシテ
 自在ナラシムルノ設ナカルヘカラス

第十條 汽船ニハ帆并索具ヲ裝置セシメ少クモ帆壹箇ヘヲ備ヘ置カ
 シムヘシ

帆船ニハ帆壹箇ヲ備フルノミナラス尙左ノ豫備ヲナサシム

フオールステール
 メインセール
 フオールステール
 フオール或ハメイシセール
 トツプセール

方帆ヲ備ヘサル船
 方帆ヲ備フル船

第十一條 帆船ノ大錨挽錨小錨錨鎖及大索等ハ左表ニ記載シタル割
 合ヲ以テ目的トシ之ヲ定ム又汽船ハ其總噸數ノ三分ノ貳ヲ取リ表
 中之ニ應スル噸數ヲ以テ錨量ヲ定ムヘシ

總噸數	大錨	挽錨	小錨	大錨合量	挽錨	第一小錨	第二小錨	最少ノ經	長	長	周圍	周圍	周圍	周圍
三五〇	三	一	二	一五二	四三二	五三二	二八〇	一四〇	一六	二一〇	七五	八	五	二
三〇〇	三	一	二	一三四	三八三	四四八	二三四	一二二	一六	二一五	七五	八	五	二
二五〇	三	一	二	一二〇	三三九	四二〇	一九六	八四	一六	一九五	七五	七	五	二
二〇〇	三	一	一	九二四	二六三	二八〇	一四〇	一六	一六	一六五	七五	七	四	二
一七五	二	一	一	八一	一六二	二五二	一一二	一	一	一六五	七五	六	二	二
一五〇	二	一	一	七二八	一四五	三二四	一一二	一六	一六	一五六	七五	六	二	二
一二五	二	一	一	六四四	一三八	一六八	八四	一六	一六	一五六	七五	六	二	二
一〇〇	二	一	一	五六〇	一一〇	一六八	八四	一六	一六	一三五	七五	五	二	二
七五	二	一	一	四七六	九五二	一四〇	五六	一六	一六	一三〇	七五	五	二	二
五〇	二	一	一	三九二	七八四	八四	五六	一六	一六	一三〇	七五	五	二	二

船舶検査施行手續并ニ船舶検査規則

四〇〇	三	一	二	一七〇八	四八七二	五八八	一八〇	一六八	一	一六	二〇二	七五	八	二	六
四五〇	三	一	二	一八七六	五三四八	六二六	三〇八	一六八	一	一六	二四〇	七五	九	二	二
五〇〇	三	一	二	二〇一六	五七四〇	七二八	三六四	一六八	一	一六	二四〇	七五	九	二	二
六〇〇	三	一	二	二三五二	六七二〇	八二二	三九二	一九六	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
七〇〇	三	一	二	二六三二	七五〇四	八九六	四四八	二二四	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
八〇〇	三	一	二	二八五六	八二四八	九五二	四七六	二五二	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
九〇〇	三	一	二	三三〇八	八八四八	九八〇	五〇四	二五二	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一〇〇〇	三	一	二	三三六〇	九五七六	一〇六四	五三二	二八〇	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一一〇〇	三	一	二	三〇三三	一一七六	一一七六	五八八	二八〇	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一二〇〇	三	一	二	三八〇八	一〇八六四	一二〇四	六一六	二八〇	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一三〇〇	三	一	二	四〇八八	一一六四八	一二六〇	六一六	三〇八	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一四〇〇	三	一	二	四四八〇	一二七六八	一三四四	六七二	三三六	一	一六	二七〇	九〇	〇	〇	七
一五〇〇	三	一	二	四七〇六	一三四二二	一五二二	七五六	三九二	一	一六	三〇〇	九〇	〇	〇	七
一六〇〇	三	一	二	五〇四五	一四三六四	一七〇八	八四〇	四二〇	一	一六	三〇〇	九〇	〇	〇	七

表中大錨貳挺ヲ要スル船舶ニ於テハ其兩錨共同量ニアラサルモ其第二大錨ハ七分五厘ノ減量ヲナシ得尤表中ニ掲ル合量ハ之ヲ減量スルヲ得ス

又大錨三挺ヲ要スル船舶ニ於テハ三錨共同量ニアラサルモ其第二大錨ハ壹割五分其第三大錨ハ七分五厘ノ減量ヲナシ得尤表中ノ物量ハ之ヲ減量スルヲ得ス

總テ錨ハ平時使用セサル者ト雖必中央甲板又ハ上甲板ニ備ヘ決シテ艙内ニ藏ムヘカラス

第十二條 錨量ハ船長ノ簿冊カ又ハ錨證書ニ依リテ成ルヘク確實ニ之ヲ調査スヘシ若之ヲ闕ク場合ニ於テハ錨ノ總長(錨ノストック)共ニ三乗シ之ニ二二四ヲ乘シテ則概量ノ磅トス尤錨鐔ヲ除ク

第十三條 客室ノ裝置及ヒ旅客ノ定員ハ左ノ如シ
客室ハ上中下等ニ拘ラス又天氣ノ如何ニ拘ラス總テ充分ノ光明

ヲ引キ及ヒ空氣ノ流通ヲ促スタメ相當ノ窓ト空氣抜トヲ設クヘシ若シ之ヲ省畧シ又雨覆ナキ場所ハ總テ之ヲ客室ト看做ヲ得ス

一 雜居旅客室ハ左ノ割合ヲ以テ其面積ニ應シ定ムルモノトス

(一) 外國航船 壹坪^六方尺ニ付 大人三人 甲板ノ高サ五尺以上

(二) 內國航船 同 大人四人

(三) 近海航船 內海航船 平水航船ニシテ其室ヲ上中下ニ區分スル
 其ハ左ノ如シ尤モ六時以內ヲ定時トシ航通スル分ニ限り詮議ノ上壹坪ニ付八人迄ニ及ホスヲ得

壹坪ニ付
 上等 大人四人
 中等 同 五人
 下等 同 六人

但三室共ニ通路トシテ總面積ノ內ヨリ五分ノ壹ヲ減スヘシ若別ニ通路ノ設アル^キハ此限ニアラス

一 旅客船ニシテ寢床ヲ設置スル者ハ其數ヲ以テ客員ヲ定ム

一 (二) (三)ノ場合ニ於テ其室ノ高六尺五寸未滿ナル船舶ハ雜居室ヲ二層ニナスヘカラス

一 外車船ニテハ車覆ヲ客室トスヘカラス

一 客室ニ貨物ヲ積ム^ルハ右ノ(一)(二)(三)ノ割合ヲ以テ客員ヲ減スヘシ

一 上等室用ノ便所ヲ除ク^ルノ外下等客員ノタメニハ概テ五拾人ニ一箇ノ割合ヲ以テ之ヲ設クヘシ

一 畜類ヲ積ム^ルハ客室ト畜類トノ中間ヲ畫シテ嚴シク之カ別ヲ立ツヘシ又畜類ノ汚水ハ極メテ流通ヲ便ニシテ外部ニ吐キ出サシムヘシ

一 貳拾四時間以上寄港セサル汽船ニ於テハ必ス水火夫室ノ設ケアラシムヘシ

一 水火夫室ハ六拾立方尺ヲ以テ壹人ト定メ光輝及ヒ空氣流通ノタメ適宜ニ窓及ヒ空氣拔ノ設アルヲ要ス成ルヘシハ風筒ノ備アルヘシ

一 居室ノ昇降口ヲ堅固ニシ「コンパニヨン」等ヲ備ヘ室内ニ漏水ナカラシムヘシ

一 船客及ヒ水火夫室ノ面積ヲ測ルニ方テ船口物置及ヒ階子等ハ之ヲ除クヘシ

第十四條 旅客船ニテ上甲板ノ舷樁^{プルチック}ナキ者ハ少クモ高三尺以上ノ欄干ヲ設ケシムヘシ尤モ內海航船平水航船ニ至テハ減テ貳尺ニ及スヲ得

機關檢査

第十五條 機關檢査ハ船舶ヲ入渠セシメテ悉ク其全部ニ施行スルコトアリ又入渠ヲ要セス檢査員ノ必要ト思惟スル箇所丈ケテ檢査スルコトアリ斯ル場合ニ於テハ其檢査ノ爲メ取外スヘキ箇所ヲ書面ニ認メ船主或ハ船長ニ送達シ豫メ檢査ノ用意ヲ爲サシムヘシ

第十六條 蒸筒ハ其蓋ヲ取外シ内外共緻密ニ檢査シ若シ内部ニ裂目等ノ箇所ヲ發見セハ孔ヲ鑿ミ其深淺ヲ測リ或ハ水壓試驗ヲ施ス等ノ手續ヲナスヘシ

第十七條 吸銹ハ其シヤシクシテ上ケテ内部并ニ彈環ノ良否等ヲ檢シ滑瓣ハ其箱板ヲ取外シテ擦合ヲ檢シ時宜ニヨリテハ瓣ヲ取出サシムルコトアルヘシ

第十八條 吸銹 銹結 銹滑瓣 銹心 銹等ハ總テ瑕釁ナク堅牢ノモノナルカ否ヲ檢シ殊ニ曲拐栓ニ注意ヲ加ヘ結銹ノブラス少クモ壹箇ハ取外サシメ軸ヲ旋轉シテ檢査スヘシ

總シ軸受「ブラス」ノ頂覆ヲ取外シ螺旋軸外車軸ヲ檢シ檢査員ノ見込ニヨリテハ螺旋軸ヲ取出サシムルコトアリ然ルモハ螺旋軸ヲ取付タル後再ヒ檢査スヘシ

第十九條 排氣唧筒循環唧筒汚水唧筒給水唧筒冷氣器ハ其蓋ヲ取外シ内部并ニ吸子及諸瓣ヲ檢査スヘシ

第二十條 新造汽船又ハ舊船ニ新製機關ヲ備フルモハ必ズ正給水管及瓣ノ外ニ又之ト全ク連續セサル給水裝置ヲ備ヘシムヘシ此給水裝置ハ通例副唧筒ヲ用ユルヲ好シト雖モ小汽船ニ於テハ吸水力充分ト檢定セシモノニ限り或ハ手用唧筒ヲ用ユルコトヲ許可スヘシ

第二十一條 密閉支水壁アル船ノ汚水唧筒ニハ各艙毎ニ汚水ヲ汲ミ取ル裝置ヲ爲サシムヘシ又泥箱及芥除ハ平時掃除シ易キ位置ニ設ケシムヘシ

第二十二條 壹箇ノ唧筒ニテ給水唧筒及汚水唧筒ノ兩用ニ供スルモノアラハ其不利ヲ論シテ改良セシムヘシ

第二十三條 蒸管及給水管ハ成ルヘク銅製ニシテ其厚サハ檢査員ノ檢定ニ由ルモノトス

第二十四條 新製機關ヲ新造汽船又ハ舊船ニ備ルモハ副機關ノ廢汽管ハ必ズ甲板又ハ廢氣主管ニ導キ船側ニ導クヘカラス

第二十五條 最重吃水以下ハ勿論其ノ近傍ノ諸通孔ニハ機關手ノ何

時ニテモ開閉シ得ヘキ嘴子コック或ハ瓣ヲ付シ且ツ之ニ連續スル管ハ航海中破損スルモ直チニ修繕ヲ加ヘ得ヘキ位置ニ設クルモノトス
第二十六條 渠入ヲ命シタル船舶ノ機關ヲ検査スルキハ排水嘴子ダンプ・コック及海水嘴子セア・コックハ之ヲ取外サシムルモノトス

瀛罐検査

第二十七條 瀛罐ノ常用瀛壓ハ其製造ノ方法并ニ材料ノ良否ヲ検査シ各部ノ強弱ヲ算定ノ上確定スルモノトス故ニ検査員之ヲ爲スニ方リ深ク其安全ニ注意スルハ勿論ナレトモ又瀛壓ヲ不當ニ減少セザル様注意スヘシ且新製ノ瀛罐ニテ豫メ其構造ノ仕様書及圖面ヲ出シテ工事中農商務省検査員ノ監督ヲ受テ落成シタルモノヲ除クノ外ハ都テ各部ノ尺度ヲ測リ假令新罐ト雖船内ニ取付ル迄一回モ見分セシヲナキ者ノ如キハ殊ニ注意ヲ加ヘ若シ其必要ナル場合ニ於テハ罐板ノ厚サヲ確知スル爲メ孔ヲ穿ツ等精細ニ之ヲ検査シテ其壓力ヲ定ムヘシ

第二十八條 検査員ハ毎検査罐内ヲ點檢スヘシ若シ瀛罐小ニシテ内部分ニ入り難キハ検査員ノ見込ヲ以テ水壓試験ヲ行ヒ其現狀ヲ定メ又入孔マンホール小ナルカ其位置ノ不便ナルカ爲メニ入り難キハ之ヲ改

造セシメ又支柱ノ爲メニ入り難キハ之ヲ取去ラシタルコトアルヘシ

第二十九條 瀛罐新製ナルカ若クハ大修繕ヲ加ヘタルモノハ其製作ノ良否ヲ知ル爲メ常用瀛壓貳倍ノ水壓試験ヲ行フヘシ然レモ常用瀛壓ヲ定ムルハ罐板ノ厚薄及性質支柱ノ支力及鉸釘接合ノ強弱等ニ由ルモノニシテ水壓試験ニ由ラサルモノト知ルヘシ

舊罐ヲ検査スルニ方リ其強弱ヲ判定センカ爲メ時トシテハ水壓試験ヲ行フコトアルヘシト雖モ之カ爲メ往々固有ノ強力ヲ減殺スルコトアリ故ニ其壓力ハ常用瀛壓ノ一倍半ヲ超過スヘカラス然レモ多少常用瀛壓ヲ超過スルニ非サレハ亦其効ナキモノトス

水壓ノ度并ニ試験施行ノ年月トハ其都度検査簿ニ記入スヘシ
第三十條 罐ノ支柱ヲ鑄鐵ヲ用ユルヲ許サス又罐臺鑄鐵ナレハ其不利ヲ論シテ成ヘク改造セシムヘシ

第三十一條 既定ノ瀛壓ハ其検査員ニ照會ヲ經ルニ非レハ他ノ検査員之ヲ増加スヘカラス
但シ大修繕ニヨリ更ニ瀛壓ヲ定ムルハ此限ニアラス

第三十二條 罐板ノ平ラナル部分ヲ支フル支柱ハ切斷面積一平方吋

毎ニ練鐵ナレハ五千磅鋼鐵ナレハ六千七百磅ヲ超過スル力ヲ受シムヘカラス右ノ切斷面積ハ支柱ノ最弱ノ箇所ニ於テ測ルヘシ
 斜向支柱ノ積ヲ求ムルハ左ノ定則ニ依ルヘシ

$$\frac{\text{斜向支柱ノ積} \times \text{斜向支柱ノ長}}{\text{平板支柱ノ積} \times \text{平板支柱ノ長}} = \frac{\text{斜向支柱ノ積}}{\text{平板支柱ノ積}}$$

 「カッセツトステイ」ノ面積ハ右ノ式ヨリ得ル所ノ積ヨリ大ナラシムヘシ

第三十三條 燃 燒 室其他平坦ノ箇所ヲ支フル支梁ノ強サハ左ノ式ニヨリ求ムヘシ

但シ支梁ノ一端ヲ管板ノ縁ニ据ヘ他ノ一端ヲ燃燒室背板ノ縁ニ据タルモノニ適用ス

式 中
$$\frac{OX \times A^2 \times T}{(L-P) \times D \times L}$$

- L ハ 支梁ノ長 (吋ニ)
- P ハ 支釘ノ心距 (吋ニ)
- D ハ 支梁間ノ距離 (吋ニ)
- A ハ 中部ニ於テ測リタル支梁ノ深 (吋ニ)
- T ハ 支梁ノ厚 (吋ニ)

C ハ 定數ナリ左ノ如シ

- 第一 各支梁ヲ支釘一本ニテ取付ルキハ六〇〇〇ナリ
- 第二 各支梁ヲ支釘二本又ハ三本ニテ取付ルキハ九〇〇〇ナリ
- 第三 各支梁ヲ支釘四本ニテ取付ルキハ一〇二〇〇ナリ
- 第三十四條 平板上ノ瀛壓ハ左ノ式ニヨリテ求ムルモノトス

$$\frac{OX \times T^2}{1.2}$$

式 中

- B ハ 錐板ノ厚 (吋ノ十六分)
 - P ハ 支柱ノ心距 (吋ニ)
 - (一) 支柱ヲ錐板ニ捻込ニ兩端ヲ鉸釘狀ニシタルキ 板厚吋ノ十六分七以下ナレハ九〇〇
 - (二) 支柱ヲ錐板ニ捻込ニ兩端ヲ母螺ニテ締タルキ 板厚吋ノ十六分七以下ナレハ一〇〇〇
 - (三) 錐板ノ内外ヨリ母螺ヲ以テ支柱ノ兩端ヲ締タルキハ板ノ厚薄ニ關セス一四〇
 - (四) 第三項ノ取付ニシテ座金ヲ鉸釘ニテ取付ケ其座金ノ徑ハ支柱心距ノ五分ノ二厚ハ錐板ノ二分ノ一ヨリ少カラサルキ 一六〇
- 瀛錐燃燒ヲ受クル鐵板ニテ瀛部ナレハ右ノ定數ヨリ二割ヲ減ス然
 此鐵板ヲ副テ火ノ直觸ヲ防クモノハ減スルニ及ハス丁或ハL狀ノ
 鐵ヲ用テ鐵板ヲ強ルキハ検査員ノ見込ヲ以本條ノ式ニテ算定シタ

ル瀛歴ヨリ多少増加スルコトアルヘシ
右ノ定數ハ雜鐵又ハ舊鐵ノ多年ヲ經過セサルモノニ適用スルモノ
ナリ若シ支柱ノ端若クハ母螺毀損スルモノハ検査員ノ見込ヲ以テ
適宜減少スヘシ

鐵板鋼鐵ニシテ支柱ヲ固着スルニ母螺ヲ用フルモノハ右ノ定數ニ
貳割半ヲ加ヘ母螺ヲ用ヒサルモノハ壹割ヲ加ヘシ
第三十五條 圓形瀛鐵洞板ノ強サハ鐵長ニ拜行ノ接合
強サヨリ算ス其式左ノ如シ

$$\frac{C \times T \times B}{D}$$
ロンチチユージノナルシヨント

式
C 定數ナリ左表ニ掲ク
T ハ鐵板ノ厚(吋ニ)
D ハ鐵洞ノ平均直徑(吋ニ)
B ハ左ノ(一)式ノ内其小ナルモノヲ取テ用フヘシ
○接合ニ於テ板ノ強サ
(一) $\frac{B \times T}{D} \times 100$
接合ニ於テ鐵釘ノ強サ

(二)
 $\frac{B \times T}{D} \times 100$ 鐵板鐵釘ニシテ打貫孔ナル片
 $\frac{B \times T}{D} \times 30$ 鐵板鐵釘ニシテ錐孔ナル片
 $\frac{B \times T}{D} \times 35$ 鋼鐵板鋼鐵釘ナル片
 $\frac{B \times T}{D} \times 20$ 鋼鐵板釘ナル片
 p ハ鐵釘ノ心距(吋ニ)
 a ハ鐵釘ノ徑(吋ニ)
 n ハ鐵釘ノ積切斷面積(平方吋ニ)
 a ハ鐵釘ノ列數
 鐵釘ニ重剪力ヲ受クルル片ハ右(二)式ノ a 二一七五ヲ乘スヘシ

鐵製瀛鐵定數表

接合ノ種類	鐵板厚ノ二分一	鐵板厚ノ四分
重接合ニシテ打貫孔ナル片	一五五	一七〇
重接合ニシテ錐孔ナル片	一七〇	一九〇

ダブルボルトストラップジョイント
二重覆板ヲ用タル接合ニテ
打貫孔ナル件
一重覆板ヲ用タル接
合ニテ錐孔ナル件

一七〇	一八〇	一九〇	一九〇	二〇〇
-----	-----	-----	-----	-----

鋼鐵製瀛罐定數表

接合ノ種類	錐板時ノ八分三 及其以下		錐板時ノ八分三以 上十六分ノ九マテ		錐板時ノ十六分ノ九 以上四分ノ三マテ		錐板四分ノ 三以上
	重接合ノ件	二〇〇	二一五	三三〇	二四〇	二六〇	
二重覆板ヲ用タル 接合ナル件	二二五	二三〇	二五〇	二六〇	二六〇	二六〇	

第三十六條 覆板ハ必ス錐板ト同質カ若クハ之ヨリ優等ノ鐵板
ヲ用フヘシ又其厚サハ單覆板ナレハ錐板ノ厚ヨリ約八分ノ壹厚キ
モノ貳重覆板ナレハ其厚サハ錐板ノ約八分ノ五以上ノモノタルヘ
シ
厚サ貳分壹未滿ノ板ニ用フル鉸釘ノ直徑ハ板厚ノ約貳倍ナルヘク
又貳分壹以上ノ厚サナル板ニ用フル者ハ板厚ノ約壹倍半ヲ通則ト
ス然レモ検査員ノ見込ニヨリテハ必ス之ニ適セサルモ其徑板厚ヨ
リ大ナル件ハ合格ノモノトナスコアルヘシ

第三十七條 人孔其他ノ孔ハ錐板ノ厚ヨリ小ナラサル縁環ヲ以テ堅
牢ニスヘシ又罐胴ニ在ル橢圓形ノ孔ハ常ニ短徑ヲ罐ノ長ニ並行シ
テ置クモノヲ良シトス
第三十八條 圓形火爐ノ強サハ左ノ式ニ由テ算スヘシ
(一) 時田瀛罐(船中)方寸上瀛ニテ (L+L)X D
CXT²

式中

T ハ板ノ厚 (吋ニ)
D ハ爐ノ直徑 (吋ニ)
L ハ爐ノ長 (呎ニ) 但シ鐵環ヲ嵌メタル爐ナレハ其環ノ距離
爐長ト並行ノ接合鍛合シタルカ或ハ覆板ヲ用ヒタル件ハ九
〇〇〇〇
重接合ナレハ七〇〇〇〇
重接合ナルモ正圓形ナル件ハ八〇〇〇〇
右ノ式ニテ算定シタル瀛壓若シ左ノ(二)式ヨリ得タルモノヲ超過ス
ル件ハ此(二)式ヲ用フヘシ
8000XT
(二) 時田瀛罐(船中)方寸上瀛ニテ D
本條ハ新製ニシテ材料良質且ツ製作精工ノモノニ適用スルモノナ

リ故ニ古爐又ハ製作粗惡若シクハ材料弱質ノモノハ検査員ノ見込ニヨリ適宜定數ヲ減少スヘシ

第三十九條 火焰ノ作用ヲ受クル所ノ加熱器或ハ瀛函胴板ノ強サハ瀛罐胴板ニ用ル算式ニ依テ求ムヘシト雖モ其定數ハ表中記載ノ三分貳ヲ取ルヘシ尤モ火焰ノ衝當ヲ受クルモノハ尙一層減少スヘシ

加熱器ハ最モ注意シテ検査スヘキモノトス何ントナレハ高壓瀛力ヲ使用スルハ鐵板條チ脆弱トナリ屢々危險ノ景狀ニ陥ルコトアリ故ニ其内外共遺漏ナク巨細ニ點檢スヘシ構造ノ模様ニヨリ器内ニ

入ルヲ得サル者ニハ内部ヲ點檢スヘキ裝置アラシムヘシ

加熱器ノ種類ニヨリテハ主罐ト通路チ絶ツノ裝置ヲナスモノアリ斯クノ如キモノニハ適當ノ安全瓣ヲ付スルヲ必要トス

第四十條 副罐并ニ其他ノ瀛罐ヲ検査スルハ主罐ト異ナルコトナシ

第四十一條 總テ瀛船ハ每罐少クモ貳箇ノ安全瓣ヲ具シ左項ニ從テ壹箇或ハ壹個以上ヲ封鎖スルモノトス

但シ副罐及瀛艇ノ罐ノ如キハ第四十八條ニヨルヘシ

第一 壹箇ノ瓣ノ面積火床面積每平方呎ニ貳分壹平方ノ割合ニ適フホハ壹箇ヲ封ス

第二 壹箇ノ瓣ノ面積前項ノ割合ヨリ小ナルトキハ壹箇以上ヲ封ス

第四十二條 發條安全瓣常用瀛壓ノ限度ヲ定ムルニハ瀛力ヲ以テスルモノトス而シテ給水瓣塞瀛瓣ヲ閉チ少クモ二十分時間充分ニ瀛

火シ安全瓣ヨリ蒸氣排出スルニ至リ尙瀛壓ノ昇騰既定ノ常用瀛壓ノ一割ヲ超ルホハ發條ヲ改造セシムヘシ

第四十三條 安全瓣發條ノ太サハ左ノ式ニヨリ求ムルモノトス

$$D = \sqrt[3]{S \times 11}$$

式中

S ハ瓣上ノ總瀛壓 (磅ニテ)

D ハ發條螺線ノ直徑但シ線ノ中心ヨリ中心マテ (吋ニテ)

d ハ角線ナレハ方圓ナレハ徑 (吋ニテ)

C 圓線ナレハ八〇〇〇

C 角線ナレハ一〇〇〇

第四十四條 安全瓣ハ封鎖シタルト否ヲ問ハス凡テ機關室ヨリ之ヲ開キ得ヘキ裝置ヲ設ケ又之ニ瓣徑ヨリ少カラサル直徑ノ廢瀛管ヲ

付セシメ又辨ノ昇降距離ハ少クモ辨徑ノ四分ノ壹以上タルヘシ
第四十五條 新タニ安全瓣ヲ構造スルニ當リ製造者或ハ船主ノ諸願
ニヨリ豫メ之ヲ檢定シ又ハ檢査員自ラ意匠ヲ費シテ之ニ應スルコ
アルヘシ

第四十六條 每罐必ス硝子驗水計一箇驗水嘴子貳箇以上ヲ備ヘ又前
後ヨリ點火スル瀧罐ニハ之ヲ前後ニ備フヘシ驗壓計ハ正確ノモノ壹
箇宛每箇宛ニ付セシムヘシ

第四十七條 塞瀧瓣ハ辨函ト縁鏑トフ間成ルヘク短キモノヲ每罐ニ
直ニ取り付タルモノタルヘシ

第四十八條 副罐及瀧艇ノ罐ハ其附屬品等主罐同一ノ規則ニ從フヘ
シ但シ安全瓣ハ封鎖ヲ要セス又火床面積拾四呎ヲ超過セサルモノ
ハ壹箇ヲ以テ許可スルコアルヘシ

第四十九條 瀧罐其他ノ水壓試驗井ニ焚試等ニハ兼テ檢査所備付ノ
驗壓元器ヲ用フヘシ

第五十條 蒸溜器及ヒ附屬品 蒸溜器ヲ常用スル瀧船ニ於テハ其諸部ヲ取外シテ檢査ス
ルノ期ハ檢査ノ見込ニヨルト雖モ成ルヘク毎一年壹回施行スルヲ

要ス而シテ之ヲ檢査スルニ當リ此器ヲ作用スル機關及ヒ罐ヲモ點
檢シ且ツ其蒸溜水ハ清潔ノ純水ニシテ飲用ニ適スルモノタルヲ認
ムヘシ蒸溜器付屬ノ瀧罐ハ凡テ主罐或ハ副罐ト同一ノ規則ニ從フ
ヘシ

第五十一條 外國航船及ヒ內國航船ニ係ル瀧船ハ左ノ豫備品并ニ所

- 屬品ヲ備フヘシ
- 結鏑ノ上端ニ用フル螺釘及母螺 各貳箇
- 結鏑ノ下端ニ用フル螺釘及母螺 各貳箇
- 吸鏑發條 壹組
- 主軸受ノ螺釘及母螺 各貳組
- カプリングポート 壹組
- 給水唧筒及汚水唧筒ノ瓣若クハ護謨 各壹組
- 驗水計ノ硝子管 六箇
- 寒暖計 壹組
- 安全瓣ノ發條 壹箇
- 驗盤器 壹箇
- 機關手道具 壹箇

火床架

排氣唧筒循環唧筒諸辨ノ護謨

總數ノ拾分壹

螺釘及母螺大小取雜若干
鐵片大小取雜若干

第一節 不登簿船檢查報告書送附方

明治十八年四月十三日農商務省第十六號府達

今般第十五號ヲ以テ船舶檢查施行手續及船舶檢查細則相達候ニ付テハ不登簿船檢查報告書ハ地方廳ニ於テ取纏メ毎三箇月當省ニ送附スヘシ右相達候事

第二節 西洋形船舶檢查所設置

明治十八年四月九日農商務省第五號告示

明治十七年月第三十號布告西洋形船舶檢查規則第二條船舶檢查所ノ儀當分左ノ場所ニ設置ス

東京 大坂 函館 神戸

但橫濱入港ノ船舶ハ當分東京檢查所ニ於テ管理ス

第四節 船燈監查手續概目

明治十八年四月四日農商務省警視廳沿海府縣并滋賀縣(沖繩縣ヲ除ク)達

船燈監查手續概目左ノ通相達候條右ニ照準可取扱此旨相達候事

船燈監查手續概目

- 第一 船燈ヲ監查スルハ其所轄ノ廳府縣於テ監查員ヲ派出シ製造所販賣所及繫泊ノ船舶ニ就キ施行スルモノトス
但西洋形船舶檢查規則ニ據リ檢査スヘキ船舶及ヒ甲板ナキ漁舟小船等ハ此限ニアラス
- 第二 製造所販賣所ハ船燈製造及ヒ販賣規則第十條ニ遵ヒ精細ニ監査シタル上合格ノ燈器ニハ其廳名アル檢印(檣燈ハ側面舷燈ハ前面)ヲ刻シ不合格ノモノハ製造方法ニ照シテ改正セシムヘシ
- 第三 船燈ハ府縣廳ノ檢印ナキモノ及ヒ免許販賣所外ニ於テ販賣所スルヲ許サス
- 第四 繫泊ノ船舶ハ其船籍ノ自他ニ係ラス定時毎年二回 四月十月又ハ臨時監査ヲナシ別紙甲號書式ニ據リ監査證書ヲ附與スヘシ但不合格ノ舷燈隔板及ヒ碇泊燈ヲ所持シ若シクハ之カ裝置ヲ誤ルモノアレハ懇篤ニ危害ノ在ル所ヲ指示シ速カニ改良セシムヘシ
- 第五 無檢印ノ舷燈舶來品ヲ除キテ所持スル者其購入ノ年月此監査手續施行以後ニ係ルルハ之ヲ販賣セシ者ノ住處氏名ヲ取糺シ其地

方廳ニ通報スヘシ

第六 監査ノ際船長又ハ海員中重立タル者ニ就テ海土衝突豫防規則中必要認ムル條件ヲ尋問シ若シ之ニ通曉セサル者アルキハ懇ロニ説明スヘキモノトス

第七 監査證書ハ第一回ヨリ第五回目ノ監査ヲ了ル迄ハ各地方ヲ通シ該證書欄内ニ其都度加書押印シ参照ノ便ニ供スヘシ

第八 毎回監査了リタル上ハ別紙乙丙號書式ノ監査表ヲ製シ一箇年^六兩度^{十二}月取廻メ農商務省ヘ報告スルモノトス

第九 製造人販賣人ノ住處氏名ハ各府縣相互ニ通報スルモノトス但人員増減改名轉籍等其都度本項ニ據ルヘシ

第十 船燈ニ關シ犯則ノ既分ニ係ルモノアルキハ其事項ヲ詳細農商務省ヘ届出ツヘシ

第十一 右各項ニ基キ尙ホ地方ノ便宜ニ依リ細目ヲ設クルハ妨ケナシト雖モ此場合ニ於テハ更ニ農商務省ヘ届出ルモノトス

甲號

船燈監査之證

監査回数	一 回	二 回	三 回	四 回	五 回
監査年月日					
廳府縣監査員氏名印					
船名					
積石(噸)					
木船定繫場名					
船主本籍名					
船頭本籍名					
船燈種類及番號					
船燈製造人氏名					
舷燈白燈及隔板適否					
改良之部					

船燈監査手續概目

記 事	乙 號	明治 船燈製造所及販賣所監查報告書		府縣名 目								
		監查 月日	監查 地名									
丙 號	明 治 年 自 報 告 書 至 月	監 查 地 名	船 名	積 高	本 船 定 場 名	船 主 氏 名	船 頭 氏 名	船 燈 製 造 人 名 及 番 號	舷 燈 種 類	舷 燈 白 燈 及 隔 板 適 否	摘 要	應 府 縣 名 目

第五節 北海道諸產物出港稅船改派出所増設

明治十八年三月三十日第四號布達
 北海道諸產物出港稅船改派出所今般更ニ左ノ二箇所ヲ増設ス
 釧路國釧路郡釧路
 根室國花咲郡花咲
 右布達候事

第八章 北海道水產物取獲罰則中追加 (續編第十三章ニ出ツ)

第九章 驛傳

第一節 驛傳取締所設置方ノ件

石川縣伺 十七年十二月十日

今般御省第三十五號ヲ以テ驛傳取締準則御達相成右驛傳取締所ノ儀
 ハ各驛ニ於テハ必ス設置スヘキハ勿論ニ候得共從來驛稱ノ名義アル
 下雖モ小驛ニシテ僅カノ營業者アリ取締所設置スルモ其費用從テ僅
 少實際困難ノ箇所ハ隣驛ト組合該取締ノ取締ヲ受ケ驛稱ハ從來ノ儘
 存在シ可然儀ニ候哉且準則第一條驛ニ據リ便宜分畫シテ其組合ヲ爲
 ストハ便宜管下ヲ幾區畫トナシ從來營業人無之村落ト雖モ豫メ區畫

北海道諸產物出港稅船改派出所増設○驛
 傳取締所設置方ノ件

ヲ定メ置若シ營業ヲサント欲スル者ハ尤モ其地租組合規則ニ從ヒ其
取締所ヲ受ケシメ可然哉

農商務省指令 十八年二月四日

伺之趣左ノ通可心得事

但主管事務ニ付當省限及指令候事

一前段小驛ト雖モ隣驛ト組合該取締所ノ取締ヲ相受ケ候儀ハ不相成
筋ト心得ヘシ

但驛傳營業人稀少ニテ取締所ノ費用支出ニ困難ナル小驛ハ此際
其驛稱廢合ノ見込相定メ別段伺出ツヘシ

一後段準則第一條驛ニ據リ便宜分割トハ管下所在ノ驛又ハ驛外ノ地
ヲ本據トシ其近傍ニ居住セル現在驛傳營業人ヲ便宜分割スル儀ニ
有之候得共取締ノ都合ニ依リ豫メ管下所在ノ各村落ヲ分割シテ組
合區畫ヲ定メ置モ妨ナシトス尤施行ノ上ハ詳細届出ヘシ

第二節 組合外ノ地ニ到リ營業スルル其地

組合規則ニ從フ件

滋賀縣伺 十八年二月五日

昨年貴省第三十五號ヲ以テ御達相成候驛傳營業取締準則中第十條ニ

驛傳營業人ニシテ組合外ノ地ニ到リ營業スル時ハ其地組合規則ニ
從ハシム可シト有之右ハ甲地組合營業者ニシテ甲地ヲ去リ乙地ニ
轉居スル時ハ乙地組合規則ニ從ハシムヘシトノ旨意ニ候哉又ハ轉
居セスト雖モ甲地ノ者假令ハ人力車夫ニシテ客ヲ乗セ乙地ニ到リ
乙地ニ於テ又他ノ需ニ應シ營業スル等ノ事アル時ハ其地組合規則
ニ從ハシム可シトノ旨意ニ候哉聊疑義ニ涉リ候ニ付相伺候也

同省指令 同年三月九日

伺之趣轉住スルトセサルトニ拘ハラス組合外ノ地ニ到リ營業スルル

ハ其地組合規則ニ從ハシムヘキ儀ト可心得事

但甲地ヨリ乙丙ノ兩地ヲ經テ丁地ニ直行スルカ如キ場合ニ於テハ
其途中乙丙ノ組合規則ニ從ハシムルニ及ハサル儀ト心得ヘシ

第三節 驛傳取締ノ爲メ現在ノ町村驛名改

稱不成ル件

茨城縣伺 十八年一月十六日

驛傳營業取締方ノ儀ニ付客年御省第三拾五號御達ノ趣モ有之候處右
御達第一條ニ驛傳營業取締ノ爲メ驛ニ據リ諸營業人ヲ便宜分割シテ
其組合ヲ爲サシムヘシト有之候得ハ成ルヘク又從前ノ驛宿ニ據リ

組合外ノ地ニ到リ營業スルル其地組合規則ニ從フ件○驛傳取締ノ爲メ
現在ノ町村驛名改稱不成ル件 百五十七

組合ヲ立ツヘキ儀トハ被存候得共明治十一年第十七號ヲ以テ郡區編
制法御頒布相成候以來行政區域即チ郡區ノ下ニハ町村アルノミニテ
宿驛ノ公稱ハナキモノ、如クニ相成候得共今日迄傳ノ取締ヲ立ント
スルニ際シ其町村ニ寄リテハ更ニ驛名ニ改稱候モ不苦哉果シテ御差
支無之儀ニ候ハ、箇所限リ取調更ニ可相伺候得トモ先以此段相伺候
也

同省指令 同年三月二十三日

伺之趣驛傳取締ノ爲メ現在ノ町村ヲシテ驛名ニ改稱スルハ不相成儀
ト可心得事

但驛傳ノ爲メ特ニ驛ト稱スルハ此限ニアラス

第十章 印紙賣捌規程取扱手續

明治十八年四月二十九日太藏省第十八號府へ達

明治十七年五月當省第貳拾九號達印紙類賣捌規程取扱手續左ノ通改
正ス

右相違候事

印紙類賣捌規程取扱手續

第一項 印紙類ハ需用者及現在高ノ景況ヲ參酌シ凡六ヶ月分見込相

立テ収税長ノ名印ヲ以テ主税官長ニ宛テ之ヲ請求スヘシ

第二項 印紙類ノ取扱ハ主任官貳名以上ノ立會ヲ要スルモノトス

第三項 印紙類到達ノ節ハ日數五日以内到達ノ月日ヲ記載セシ領収

証書ヲ主税局ニ送附スヘシ

第四項 印紙類賣捌看板ハ第壹号雛形ニ據リ調製シ之ヲ下附ス可シ

二種類以上賣捌シモノハ各種類ヲ一枚ニ併記スルモ妨ナシ

第五項 印紙類賣捌人改姓名轉居ノ節ハ其ノ旨郡區役所ニ申出サセ

看板ニ記載アル住所姓名ノ書換ヲ請ハシム可シ

但シ燒失等ノ節ハ其ノ事由ヲ詳記シ更ニ看板ノ下渡ヲ請ハシム

可シ

第六項 印紙類賣捌人休業ノ節ハ規程第十條ニ準據シ賣捌看板ヲ返

納セシム可シ

第七項 規程第二條ニ據リ印紙類賣捌人員ヲ定ムルニハ從前賣捌方

ノ模様其ノ他ノ景況ヲ參酌シ需用者ニ差支ナキ様之ヲ定ムヘシ

第八項 他ノ管轄ヨリ轉籍シ又ハ寄留シタル者印紙類ノ賣捌ヲ請願

スルトキハ規程第十三條ニ據リ禁止又ハ停止セラレタルトナキヤ

否ヲ詳查ス可シ

- 第九項 印紙類賣捌人員ハ一ケ年ヲ二期ニ分チ第貳號離形ニ倣ヒ六月十二月末日ノ現在人員ヲ取調ヘ七月二十日限り地方廳差立テ主税局ニ送附スヘシ
- 第十項 規程第八條但書ニ據リ延期ヲ許可スルキ其ノ抵當トナスヘキ公積證書ノ價格ハ明治十三年當省乙第壹號達ニ據リテ之ヲ定ム可シ
- 第十一項 印紙類代金延納ヲ許可シタルトハ第三號離形ニ倣ヒ上納受書ヲ差出サシムヘシ
- 第十二項 印紙類代金ノ延納ヲ許可シタルトハ其ノ期限該年度内ニ係ルモノハ印紙ヲ下渡シタル時期ノ稅表ヘ編入シ其ノ期限翌年度ニ涉ルモノハ該年度ノ稅表ヘ編入スヘシ
- 第十三項 印紙類ヲ運送會社ノ類ニ運搬セシメタル分ハ到達ノ節社員等爲立會檢査ヲ遂ケ若シ損傷汚染或ハ護謨糊粘着等ニテ全ク使用シ得ヘカラサルモノヲ發見セハ社員ノ手續書ヲ徵シ之ニ其枚數調書ヲ添附シ處分方ヲ稟議スヘシ
但シ天災地變等ニ罹リタルモノハ本項手續書ニ社外貳名以上ノ證明ヲナサシムヘシ

- 第十四項 印紙類萬一封中ノ員數ニ過不足ヲ生スルモノアルキハ其ノ封紙帶紙ニ立會官吏ノ姓名書ヲ添附シ處分ヲ稟議ス可シ
- 第十五項 印紙類ノ受拂ハ適宜帳簿ヲ設ケ種類ヲ別ツテ記載シ置ク可シ
- 第十六項 印紙類ノ受拂ヲ爲シタルトキハ即日受拂及ヒ殘在高ヲ記載シ帳簿ト現品トヲ對照シ主任官之ニ檢印スヘシ
- 第十七項 前項ノ場合ニ於テ主任官交代スルキハ帳簿ト現品在高トヲ對照シ檢印証明シテ受渡ヲナスヘシ
- 第十八項 印紙類賣捌手数料ハ即納延期トモ印紙代金上納ノ節之ヲ下渡スヘシ
- 第十九項 規程第十條ニ據リ返納セシ印紙中代金既納ノモノアルトキハ左ノ區別ニ從ヒ其ノ代金ヲ返附スヘシ
但シ返納セシ印紙代金ニ對スル手数料ハ其節之ヲ返納セシムヘシ
- 一代金納附ト印紙返納ト其時日同年度ニ係ルモノハ該年度収入金ノ内ヨリ返附シ稅表皆濟帳トモ其ノ員數ヲ除去スヘシ
- 一代金納附ト印紙返納ト其ノ時日年度ヲ異ニスルキハ印紙ノ種類

印紙ハ量目(受納印紙)枚數及代金納入年度區分等明細仕譯書ヲ添附シ別途還附ヲ収税長ヨリ主税官長ニ稟申シ税表皆濟帳トモ其ノ員數ヲ除却スルニ及ハス尤返納ノ印紙ハ受拂計算表ヘ一畫ヲ設ケ元請ニ組入スヘシ

第二十項 規程第十二條ノ損傷又ハ汚染印紙交換ノ際上納セシ代金百分ノ五ノ金額及第十九項但書ニ據リ返納セル手數料ノ内最前下渡セシトキハ年度ヲ異ニスルモノハ雜收入ニ納附スヘシ

第二十一項 印紙類ハ肉色變更又ハ護謨糊粘着ノ患アルモノニ付濕氣豫防等貯藏方ニ注意スヘシ

第二十二項 損傷又ハ汚染印紙ノ交換ヲ許可シタルトキハ府縣廳現在ノ印紙ヲ以テ交換シ其ノ交換シタル印紙ハ受拂計算表拂ノ部ヘ一畫ヲ設ケ記載シ損傷汚染ニヨリ返納ノ印紙ハ每半年分取極メ事由ヲ記シ主税局ニ送附スヘシ

第二十三項 府縣廳ニ於テ隨時各郡區役所ニ主任官ヲ派遣シ受拂ノ實況及現在高等ヲ精査セシムヘシ

第二十四項 印紙類賣捌人ハ各種類ヲ區別シタル帳簿ヲ製シ其賣捌高ヲ明記シ置カシムヘシ

但シ煙草印紙ハ別ニ成規アルヲ以テ本項ノ限ニアラス

第壹號 離形 長二尺九寸

表ヤ

第何號

何々印紙賣捌所

何府何國何郡何村何番地

某

第二號 離形 用紙美濃紙

明治何年何月印紙賣捌人員表

何府

郡區分名	規程第一條受恩典者		計	非恩典者合		計	前期ニ比較増減
	同第三條ノ受恩典者	者		計	者		

右之通候也

年月日

主稅官長宛

收稅長印

第三號離形

印紙代金上納方受書

一印紙代金何圓

內譯 印紙ノ種類及枚數ヲ揭記スヘシ

右印紙代金ノ儀ハ來ル 月 日無相違上納可仕因之右代金ニ對シ別

紙(左ノ)麻書ノ公債証書ヲ抵當トシテ差出申候若シ上納期日ニ不納候

トキハ該公債証書御賣拂ノ上印紙代金御差引御徵收相成聊異議無之

且印紙類ハ保護可致ハ勿論萬一水火盜難等有之候トモ印紙代金ハ急

度上納可致候此段御受申上候也

但シ印紙類賣捌規程第十條及休業ノ場合ニ於テハ本文ノ期限ニ拘

ラス直チニ上納可仕候也

年月日

國區町番地

賣捌人

何

某

印

府知事縣令宛

前書之通相違無之ニ付與書候也

年月日

戶長

某

印

他人記名ノ公債証書ヲ借受抵當

トスル片ハ其ノ記名者ノ連署ヲ

要ス

他人記名ノ公債証書ヲ借受抵當

トスル片ハ記名者所在地戶長ノ

連署ヲ要ス

公債証書麻書

一何種類公債証書

此金高何圓

內譯

何印何號何番何枚此金高何圓

右之通相違無之候也

國區町番地

兌換銀行券條例中追加○地券書換ノ節心得方
摺附木製造ニ黃燐ヲ用ルヲ禁ス

賣捌人

第十一章 兌換銀行券條例中追加

明治十八年五月七日第九號布告

明治十七年五月第十八號布告兌換銀行券條例第六條ニ左ノ但書ヲ追加ス

但支店ニ於テハ本店ヨリ準備金ノ到達スヘキ時間其兌換ヲ延期スルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

第十二章 地券書換ノ節心得方

明治十八年二月六日大藏省第三號府縣(西館縣沖繩縣) 札幌縣樺太縣ヲ除クノ達

明治十七年第七號布告第三條ニ於テ有租地ノ地目ヲ被定候ニ付テハ爾來地券書換ノ都度該第三條ニ掲グル所ノ地目ニ訂正シ尙ホ地番號ノ下ニ朱字ヲ以テ現地ノ名稱ヲ附記スヘシ

右相達候事

第十三章 摺附木製造ニ黃燐ヲ用ルヲ禁ス

明治十八年一月十八日內務省甲第一號府縣(視廳) 樺太ノ達

摺附木製造ニ黃燐ヲ用ヒ候儀ハ自今禁止候様可致此旨相達候事

第十四章 徵兵

第一節 徵兵事務條例中削除

明治十八年五月二十一日第十號布達

明治十七年五月第十八號布達徵兵事務條例第八十九條中郡區長ノ三字

削除ス

右布達候事

第二節 徵兵適齡者失踪シ事由書ヲ差出者

ナキ時戸長ヨリ届出及戸主死亡嗣子失踪二男嗣子トナルモ猶豫ニ屬セサルノ件

東京府伺 十八年二月十日

徵兵事務條例第四十條ニ壯丁中疾病處刑又ハ逃亡失踪等ニテ檢査所へ出頭セサル者アル時ハ戸主或ハ親屬ノ者ヨリ逃亡失踪等ノ者ハ其事由書ニ戸長ノ奥書証印憲兵部若クハ警察署ノ證認ヲ受ケ云々ト有之然ルニ適齡者ニシテ全戸或ハ單身戸主ニテ失踪シ他ニ親屬モ無之者ハ右事由書ヲ出スヘキモノ之ナキニ付其旨戸長ヨリ届出サセ可然哉果ノ然ハ官吏ノ届書面ニ憲兵部若クハ警察署ノ證認爲相受候儀ハ穩

兵事務條例中削除○同上ニ關スル件○同取扱手
ニ關スル件 百六十七

當テラサル機相考候間戸長ハ該人名ヲ憲兵部若クハ警察署へ通牒スルマテニテ可然哉

茲ニ戸主アリ戸主死亡ス嗣子^{ナ長男}アルモ失踪ノ故ヲ以テ親族協議管轄廳ノ許可ヲ請ケ廢嫡シ二男^{ナ適齡者}ヲ以テ戸主死亡跡ヲ相續スルモ

ノ之アリ右ハ令第二十二條第八項ニ依リ徵集スヘキハ勿論ノ處二男^{ナ適齡者}ハ嗣子ノ名義ハ得サルモ長男廢嫡ノ上ハ嗣子ノ位ヲ占メ戸主

ノ死亡跡ヲ繼キ且ツ長男失踪五箇年ヲ經過シタル者ニ付同條第五項ノ精神ニ依リ猶豫ニ取調可然哉

陸軍省指令 同年二月十四日 伺之趣左之通可心得事

第一項 前段伺ノ通後段通牒スルニ及ハス
第二項 猶豫ニ屬セス

第三節 徵兵相當者体格乙種身幹四尺九寸

以上ノ者處分方ノ件

一 徵兵事務取扱手續第十六項ニ雜卒若クハ職工適當ノ者不足スルハ其不足ハ體格ノ五種兵ニ亞ク者ヨリ之ヲ補ヒ尙不足スルハ云々ト有之右五種兵ニ亞ク者トハ即合格者中體格乙種ナル者ニテ此乙

栃木縣伺 十八年一月四日

種ナルモノハ假令寸尺ハ五尺三寸以上ナルモ五種兵ノ不足補充スヘキモノニ無之單ニ雜卒等ノ不足ヲ可補モノニ止マリ候様相見候就テハ若シ雜卒モ亦甲種ニ充足スルハ此乙種ナルモノ遂ニ抽籤セシメサルモノニ候哉又ハ雜卒以下ノ補充員トシテ必ス抽籤セシムヘキモノニ候哉

但本文抽籤セシメサルモノトセハ檢査後調製スヘキ名簿中何レノ名簿ニ組入可申哉又抽籤セシムルトセハ甲種ニテ雜卒適當モノト各別ニ抽籤セシムヘク候哉

一身幹四尺九寸以上ノモノハ手續前同項ノ旨趣ニ依リ候得ハ體格乙種ニテ雜卒ノ不足ヲ補ヒ尙不足スルハニシテ始テ四尺九寸以上中體格甲種ノ者ヨリ補填スル儀ニ候得ハ若乙種マテニテ其員數充足スルハ此四尺九寸以上ノ者ハ直ニ翌年回シト爲スヘキ哉又ハ猶補充員トシテ抽籤セシムヘク候哉

但抽籤セシムルハ乙種者ノ例ニ倣ヒ雜卒以下ノ補充員トシテ抽籤セシメ可然哉

右相伺候也

陸軍省指令同年一月十五日

伺之趣身幹五尺以上ノ乙種ハ五尺以上五尺三寸未滿甲種ノ未番號ニ次キ四尺九寸以上ノ甲種ハ五尺以上乙種ノ未番號ニ次キ四尺九寸以上ノ乙種ハ其甲種ノ未番號ニ次キ別ニ抽籤セシメ共ニ補充員トスヘキ儀ト可心得事

第四節 年齡正誤者ノ處分ノ件

東京府伺 十七年九月三十日

茲ニ徵兵適齡前又ハ適齡ニ際シ戶籍面年齡誤寫從テ國民兵入籍屆年齡誤謬ナルノ趣ヲ以年齡正誤願出ル者有之右ハ確證アル者ニ限り開屆來リ候處其開屆タル年齡前年ニ溯リタル者ハ舊徵兵令ニ照シ當時ノ資格ニ依リ國民軍ノ外免役及ヒ平時免役等ニ取調可然哉陸軍省指令十八年一月廿四日 伺之通

但客年九月十五日迄ニ舊令第六十一條ノ届出ヲ爲サ、ルトキハ先入トシテ徵集スヘシ

第五節 輜重雜卒身上異動届出方之件

椽木縣伺 十八年二月

現役兵入營中身上異動届出方之儀ハ客年九月九日附本縣伺へ御省ヨリ御指令之趣親族ヨリ本人へ通牒シ本人ヨリ所属ノ隊へ届出ヘキモノトスモ有之了承候得共輜重輸卒ノ如キ

ハ現役兵ニシテ入營セサル者當卒ヲ過キ候此者身上ニ異動ヲ生セシトキ其届出方ハ本人又ハ戶主ヨリ府縣駐在官或ハ郡區駐在官ノ内へ届出可然哉徵兵事務條例中明文モ無之ニ付此段相伺候也

陸軍省指令 同年三月七日

伺之趣本人又ハ戶主ノ届書ニ戶長郡區長ノ與書証印ヲ受ケ郡區駐在官へ可届出儀ト可心得事

第六節 豫備後備兵服役中ノ者屯田兵志願ノ件

愛媛縣伺 十八年三月九日

豫備後備兵服役中ノ者ニテ屯田兵ニ志願スルモ差支ナキヤ直ク御指揮アリマシ

陸軍省指令 同年三月十三日

豫備後備兵ニテ屯田兵志願ハ伺之通但其旨連名簿へ記載スヘシ

第七節 病氣犯罪等ニテ入營セサル輜重輸卒ノ取扱方ノ件

嶋根縣伺 十八年三月三日

從前現役輜重輸卒ニシテ入營ノ際病氣又ハ犯罪等ニテ入營セサル者

ハ他ノ現役輸卒ト同シク豫備軍ニ編入先入兵又ハ翌年回シ等ニ不致
例ニ有之候處改令ノ今日ニ至ルモ同様豫備役ニ編入シ入營延期翌年
回等ノ處分ニ不及儀ニ可有之哉

陸軍省指令 同年三月廿四日

伺之趣輜重輸卒ト雖_レ征兵令第四十條ニ據處分スヘキ儀ト可心得事

第八節

札幌農學校ニテ修業中ノ者検査ヲ要
セス第一豫備徵員ニ編入ノ件

京都府伺 十七年十月二日

條例第三百三十二條ニハ本令第十八條第三項ノ生徒ニシテ第一豫備徵
員ニ編入ノ際身體検査ヲ受ケシムヘシトアリ然ルニ十七年兵ニシテ
札幌農學校ニテ修業中ナルヲ以テ一箇年ノ徵集豫猶ナリタルモノ本
年ニ至リ該核ニテ卒業セシモノアリ右者第一豫備徵員ヘ編入可致モ
ノト相考候就テハ身體検査等ノ儀ハ如何相心得可然哉

陸軍省指令(電報) 十七年十一月廿九日

本人尙札幌ヘ寄留中ナレハ身體検査ヲ要セス第一豫備徵員ニ編入ス
ヘキ儀ト心得ヘシ

第九節

検査定日戸主ヨリ其検査ヲ受クヘキ

モノニ示サス及ヒ定日前失踪逃亡シ
タルモノ告發ノ件

陸軍省伺 十八年二月五日

徵兵検査時日ノ指定ヲ受ク正當ノ故ナク其場所ニ參會セサル者ハ徵
兵令第四十三條ニ據リ處分スヘキ儀ニ候處戸主ニ於テ検査時日ノ指
定ヲ受ケ之ヲ其検査ヲ受クヘキ者ニ示サ、ルヨリ検査所ニ參會セサ
ル者アリ右ハ正當ノ故ナクシテ參會セサル者トシ該條ニ據リ検査ヲ
受クヘキ者ヲ告發シ可然哉又検査時日ノ指定以前ニ於テ検査ヲ受ク
ヘキ者失踪又ハ逃亡シ爲メ検査所ニ參會セサル者アリ其失踪逃亡ハ
指定以前ニ係ルト雖モ之ヲ正當ノ事由ト爲スヲ得サルヲ以テ是亦該
條ニ據リ告發スヘキ儀ニ候哉

太政官指令 同年三月十日

前段伺ノ通後段令第四十四條ニ據リ告發スヘキ儀可心得事

第十節

癡疾不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ム
不能サルモノ猶豫鑑別ノ件

陸軍省伺 十七年十一月十九日

徵兵令中疑義ニ涉リ處分上差支候庶左ニ相伺候條速ニ御指令相成度此段相伺候也

第一項 徵兵令第拾七條及ヒ第二十二條中廢疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムヲ能ハサル云々トアリ右ハ徵兵事務官ニ於テ徵兵事務條例第百四十五條ニ據リ檢査所ニ呼出シ軍醫ノ診斷書ヲ以テ其廢疾不具等ノ情況ヲ檢査シ果シテ一家ノ生計ヲ營ム能サルモノト認定スルモノニ限リ猶豫ノ處分ヲ爲スヘキ儀ニ候哉

第二項 前項果シテ然ラハ一家ノ生計ヲ營ムヲ能ハサルヲ認定スルハ其身分若クハ職業ニ應シ家計ヲ失フモノト否トヲ以テ鑑別スルキモノニ候哉

太政官指令ノ十七年十二月十三日

第一項 伺ノ通

第二項 身分若クハ職業ノ如何ヲ問ハス其身廢疾不具等ニシテ自家ノ生計ヲ擔當スルコト能ハサル者ヲ以テ鑑別スヘシ

第十一節 徵兵諸名簿異動取扱ノ件

東京府伺 十八年三月五日

第一條 徵集猶豫名簿 先入兵不參名簿 入營延期不參名簿 翌年

回名簿本令第十八條第五項第六項等ノ者 中ノ者轉居等ノ異動アル毎ニ加除訂正致シ置サルルルハ臨時徵集及ヒ翌年檢査ニ差支候ニ付平素加除訂正可致ハ勿論ノ儀ニ候哉果ノ然ルルハ四月十一日以後九月十五日迄ニ轉居等

ノ異動セシキ届出ノ成規無之右ハ適宜期限ヲ定メ爲届出可然哉

第二條 前條諸名簿中ノ者他ノ府縣へ轉籍及ヒ離縁トナル者ハ本簿ヲ削除シ異動名簿ヲ調製致シ之ニ其理由ヲ登記シ置キ轉居先へ府縣へ通報シ又他ノ府縣ヨリ轉入セシ者ハ相當名簿へ追加シ置可然哉

陸軍省指令 同年四月二日

書面兩條共伺之通

第十二節 徵兵適齡者失踪シ三十二歳以上ノモノ及徵兵署閉鎖罷名稱ノ者ニ關スル件

東京府伺 十八年四月七日

第一條 徵兵適齡者適齡ノ當時失踪シ先入兵名簿へ編入ノ者目下復歸シ及適齡屆濟ノ廉發露スル者有之其年齡ヲ算スレハ常備後備ノ年限即三十二歳ヲ經過セリ右ハ舊徵兵事務條例ニ於テハ其三十一

徵兵令同事務條例ニ關スル件

歳ヲ越ユルハ其時々經伺ノ筈ニ候處新令ニ於テハ右等處分ノ例規無之就テハ五種兵ノ現役年限年齢ハ三十五歳迄ニ付前件ノ者モ滿三十二歳迄ハ直チニ徵集シ其年齢ヲ超過セシ者ハ其時々相伺御指彈ヲ得ヘキ儀ニ候哉

第二條 徵兵署閉鎖後罷名稱ノ者翌年徵集スヘキ儀ハ條例第四百七條ニ明記有之候處其名稱ヲ罷メタルハ徵兵署閉鎖後ナレモ其年四月十日以前再ヒ條例第三百三十條後段ノ資格ヲ得ルハ仍ホ猶豫ニ屬シ條例第三百三十一條ニ當ル資格ヲ得ルハ仍ホ檢査時限ニ係ルヲ以テ猶豫ニ屬セス翌年徵集スヘキ儀ニ候哉
陸軍省指令 同年四月十四日
伺之通

第十三節 新兵入營前他府縣又ハ管内ノ轉居及豫備員等異動取扱ノ件

東京府伺 十八年四月一日

第一條 新兵入營前甲府縣ヨリ乙府縣へ轉籍又ハ全戶密留スル者乙府縣ニ到着スルハ番號割符ヲ添へ府縣廳へ届出ル迄ノ取扱ハ條例第八十四條ニ掲ケ有之候得共其後ノ取扱方明記無之右ハ府縣廳

ニ於テ番號割符ヲ受領スルハ直ニ鐵簿へ記入シ割符訂正方之儀ハ後備軍司令部へ照會可致儀ニ候哉

第二條 新兵入營後身元轉居等ノ異動ヲ生シタルハ取扱方成規無之右ハ轉居ニ係ル分ハ轉居先郡區長及戶長ノ與書証印ヲ以テ身元ヨリ直チニ本人所屬ノ隊へ爲届出可然哉

第三條 第二豫備徵員ニシテ身上ニ異動ヲ生シタルハ取扱方成規無之右ハ名簿上平素加除ヲ爲シ置サルハ臨時徵集ノ節差問候ハ勿論ノ儀ニ付適宜届出之期限ヲ相定メ其異動ヲ爲届出可然哉
陸軍省指令 同年四月十四日

伺之通左ノ通可相心得事

第一條 伺之通
但割符ノ訂正ハ鎮臺へ照會スヘシ

第二條 親族ヨリ本人へ通牒シ本人ヨリ所屬ノ隊ニ届出スヘキモトス
第三條 伺之通

第十四節 近衛兵入營附添人ノ件

愛媛縣伺 (電報) 十八年四月廿八日

古物商條例ニ關スル件

近衛兵附添人ハ徵兵事務取扱手續第廿三項ノ割合ニ依リ爲附添可然哉

陸軍省指令 (電) 同年四月三十日
近衛兵入營附添人ノ儀ハ伺之通

第十五章 古物商條例第四條第六條ニ該ル者
處分方ノ件

新潟縣請訓 十七年十二月廿三日

第一條 古物商條例第四條但書ニ身元詳ナル者其証人タルトキ又ハ警察官若シクハ巡查ノ認可云々トアリ爰ニ鹿兒嶋縣或ハ宮崎縣等ノ身元詳ナラサル者新潟港へ來リ或ル古物商ニ就キ物品ヲ賣ラント云フ其商者ハ近隣ノ某ヲ連來リ賣主トハ曾テ面識ナキ者ヲ証人ニ立テ買取タルトキハ其証人ノ効力ナキ者ト心得可然哉
第二條 同條例第六條前畧ス單ニ警察官ノ許可ヲ受クヘシトアリテ証人等ノ文字ナキヲ以テ視ルトキハ四條ト六條ハ其精神ヲ異ニスル勿論ノ處警察官ノ許可ヲ受ケスシテ前條ノ如ク賣主ト面識ナキ者ヲ証人ニ立テ物品ヲ買取リ又ハ交換シ及寄藏シタル後チ其者盜罪詐僞取財ノ罪及刑法第三百九十九條第四百一條ノ處斷ヲ受タル

コノ判然シタルトキハ違犯者ト心得可然哉

右ハ古物商取締條例ヲ御頒布相成タル御旨意ノアル處ハ不正品ヲ天下ニ自由ナラシメサルニ據ルモノナルヘシ然ルニ同例第四條ト第六條ノ解釋ニ付種々ノ論有之何分疑義ヲ生シ候條仰御内訓候也

司法省内訓 同年二月十二日

請訓ノ趣左ノ通心得ヘシ

第一條 見解ノ通タルヲ以テ古物商條例第四條ノ違犯者トシテ處斷スヘキモノトス

第二條 物品ヲ取受スル時ニ當リ全ク同條例第六條ニ列記シタル犯人タルコトヲ知ラサル片ハ單ニ第四條ノ違犯者トシテ處斷スヘキ者トス

右及内訓候也

第二編 懲罰

第十六章 華族懲戒例

○明治十八年一月十日太政官號外達
今般華族懲戒例左ノ通改正候條此旨相達候事

華族懲戒例

- 第一條 華族ノ品位ヲ保護スル爲メニ懲戒處分ノ例ヲ設ク
- 第二條 華族懲戒ノ權ハ之ヲ宮内卿ニ委任シ上裁ヲ得テ處分ヲ行ハシム
- 第三條 公ニ風教ヲ亂リ又ハ家屋ヲ浪費シ華族ニ必要ナル品位ヲ失フ者ハ懲戒ノ處分ヲ行フ可シ但隱微曖昧ノ事ハ懲戒ノ限ニアラス
- 第四條 懲戒ヲ分テ三種トス
 - 第一 譴責
 - 第二 謹慎
 - 第三 除族
- 第五條 譴責ハ宮内卿ヨリ譴責書ヲ付シ戒悔スル所アラシム
- 第六條 謹慎ハ十日以上一年以下外出ヲ禁シ自宅ニ於テ謹慎ヲ守ラシム

- 第七條 失行重大又ハ懲責ヲ受ケ猶ホ悛改ノ跡ナク華族ニ必要ナル品位ヲ有ツコト能ハサル者ハ其族ヲ除クヘシ
- 此條ハ刑法第三十一條ト相牴觸スルコトナシ
- 第八條 前條ノ場合ニ於テ情輕キ者ハ子孫又ハ他ノ親屬ヲシテ爵ヲ襲カシムヘシ親屬ナキ者ハ家ヲ除ク
- 第九條 華族ノ戶主ハ其子弟及家屬ヲ檢束スルノ責ヲ負フヘシ
- 第十條 華族ノ戶主幼年ナル者ハ後見人代テ其子弟及家屬ヲ檢束スルノ責ヲ負フ可シ
- 第十一條 華族ノ子弟及家屬ニシテ第七條ニ當ル者ハ其身ノミ華族ノ屬籍ヲ除クヘシ
- 第十二條 華族ノ犯罪輕罪以上ニ觸ル、者ハ司法ノ裁判ヲ經タル後其情狀ニ從ヒ更ニ懲戒ノ處分ヲ行フヘシ
- 第十三條 前條ノ場合ヲ除ク外懲戒處分ヲ行フニハ豫メ本人ニ通知シ其事情ノ審問ヲ必要トシ又ハ本人ヨリ審問ヲ請求スルトキハ宮内卿ハ上旨ヲ得テ華族五人ヲ撰任シ審問委員ト爲シ審問シテ狀ヲ具ヘ上申セシムヘシ
- 第七條第十一條ノ場合ニ於テハ本人ノ請求スルトセサルニ拘ハラ

華族懲戒例○戶長職務上過失處分方

ス審問ヲ經ルヲ必要トス
第十四條 審問委員ハ宮内卿ヨリ下付シタル事件ノ外ニ涉リ審問スルコトヲ得ス

第十五條 華族ノ犯罪司法ノ裁判ヲ經放免セラレタル者仍ホ其情狀ニ從ヒ懲戒ノ處分ヲ行フコトアルヘシ

第十六條 華族懲戒ノ處分ハ不服ヲ以テ太政官ニ請願シ又ハ裁判所ニ控訴スルコトヲ得ス

第十七條 華族懲戒ノ處分ヲ受タル者ハ宮内卿ヨリ警察官ニ通知シ將來ノ行儀ヲ監察セシム

第十八條 除族ノ處分ヲ受テ情輕キ者悔改ノ事實アルトキハ五年ノ後上旨ニ由リ復族セシムルコトアルヘシ除族情重ク親屬襲爵ヲ得サル者十年ノ後上旨ニ由リ親屬ニ襲爵ヲ命スルコトアルヘシ但本人ハ終身復族ヲ許サス

第十七章 戸長職務上過失處分方

明治十八年二月六日內務省甲第四號府縣(沖編)除クノ達

戸長職務取扱上過失アルトキハ總テ官吏懲戒例ニ依リ處分スヘシ但明治十一年乙第八十號達第五項ハ廢止ス

右相違候事

第十八章 在監人實印及權利義務ニ關スル証書類ヲ隱匿スルモノ處分方

三重縣伺 十八年二月廿五日

監獄則第十四條ニ總テ入監人ノ携有スル財貨物件ハ悉ク點檢シテ云々(中略)但點檢ノ際隱匿セシ貨物ハ沒收スト有之候處茲ニ在監人ニシテ實印又ハ權利義務ニ關スル証書類ヲ隱匿スルモノアリ其實印ノ如キハ一已私有ノ物品ニ外ナラサルヲ以テ同條ニ照シ沒收シ可然見込ニ候得共權利義務ニ係ル証書類ハ單ニ物品トハ難見做乎ニ相考候斯ノ如キモノハ監獄則第九十五條第八項ニ準擬シ本人ヲ相當懲罰スルニ止メ該証書類ハ所持品中ニ領置シ放免ノ節還付シ可然哉
內務省指令 同年三月廿一日
書面伺ノ趣証書類ハ勿論實印モ沒收セサル儀ト可心得事

在監人實印及証書類隱匿スル者處分方○地所建物等質入書入ニ關スル件 百八十三

第三編 民法

第十九章 戸長所有ノ地所建物船舶ヲ質入書入等ノ節 扱方

○明治十八年三月二十三日内務省達甲第六號府へ達
戸長所有之地所建物船舶等ヲ質入書入及ヒ賣買セントスルハ其次
席ノモノ次席ノモノ無之ハ隣町村戸長ヲシテ公証爲取扱來候處自
今戸長ニ於テ成規ノ公證ヲナシ郡區長(戸長役場ヲ兼ヌル區役所ハ府
知事縣令)之檢閲ヲ爲受候様可致此旨相達候事

第二十章 土地所有者ニシテ其土地所在ノ戸長

役場ニ居住セサルハ代人届置ノ

明治十八年六月五日大藏省第二十號府へ達
土地所有者ニシテ其土地所在ノ戸長役場所轄内ニ居住セサルハ地
租地方稅備荒儲蓄金區町村費ヲ納ムル爲メ代人ヲ定メ土地所轄ノ戸
長役場ニ届置カシムヘシ
右相達候事

第四編 訟法

第二十一章 戸主身代限りノ節 非戸主財產糶賣

ノ件

愛媛縣伺 十八年一月十九日

戸主身代限之節ハ土地建物並ニ記名アル公債證書ヲ除キ非戸主ノ所
有ニ係ル動產物ハ総テ戸主財產ニ組込糶賣相成例規ニ有之候得共其
内非戸主ノ所有タルハ明確ナル分取除クヘキ儀ニ候哉
前項若シ否ストナストキハ非戸主カ篤行奇特ノ行爲ニ據リ賜リタル
金銀木杯等ハ如何處分致可然哉
司法省指令 同年二月十八日
伺ノ趣左ノ通心得可シ

但主管ニ付當省ヨリ指令ス

第一項 公債證書地所ノ如キ成法上所有者ノ記名アルモノニ非サレ
ハ取除ク可キ限リニアラス
第二項 賞賜ニ係ル金銀木杯等ハ差押フ可キ限リニアラス

第二十二章 民事上帶動有位者喚問

戸長身代限ノ節 非戸主財產糶賣ノ件 ○民事上帶動有位者喚問 百八十五